

安政元年正月二十三日

一八四

右之通、向々可被相觸候、○明石藩日記

寅正月

(明石藩日記)

○安政年錄ニハ、正月廿六日、本庄安藝守殿御渡御書付トシテ、次ニ本書ト同文ヲ收ム。右ハ後ニ掲グル諸用留ニ據レバ、目付及奥所筆組頭ヘ達セシモノナリ。

〔當番〕目付通達○内閣記録課所屬本  
御書付御目付通達向掛合留所職

○正月二十六日二之丸留守居ヘ

〔朱書〕寅正月廿六日、來使伊澤源之助、返書同人ニ遣、

五郎三郎

安藝守殿御渡候御書付寫差遣候、可被得其意候、以上、

當番

御目付中

正月廿六日

二丸御留守居中

〔西丸當番〕目付通達○内閣記録課所屬本  
觸留所職

○正月二十六日同裏門當番ヘ

安藝守殿御渡候御書付寫差遣候、以上、

西丸當番

御目付中

正月廿六日

西丸御裏御門

當御番中

〔諸用留〕○内閣記録課所屬本

扣伊勢守〔阿部正弘、若中〕

觸書

東海道伏見宿外三ヶ宿困窮ニ付、人馬賃錢割増、左之通可受取旨、申渡、

東海道

伏見宿

淀宿

牧方宿

守口宿

當寅二月より來ル未正月迄、中五ヶ年之間、人馬賃錢貳割増之上、壹割五分増、都合三割五分増、

右割増錢申渡候間、可被得其意候、

右之趣、向々可被相觸候、

寅正月

安政元年正月二十三日

一八五

伏見外三宿  
人馬賃錢割  
増令



安政元年正月二十三日

右書付渡方、

一三奉行

一通

松平 豊前守渡(信篤、寺社奉行)

一大目付

一通

井戸 石見守渡(直道、大目付)

★一御目付

一通

右之趣、向々可被相觸候、尤西丸御目付も可有通達候、

久世 十太夫渡(水戸藩城付)

一御三家御城附

一通

奥書

右之通、相觸候間、可存其意候、

一色 豊後守渡(直休、田安家老)

一田安殿  
一刑部卿殿 家老衆  
清水附

一通

奥書

右之趣、相觸候間、可被得其意候、

\*一奥御右筆組頭

一通

奥書

右同斷

内藤 茂之助渡(忠長、佐渡奉行)

一在府之遠國奉行

一通

奥書

右同斷

右書付、自分より渡、星附候分、本庄安藝守渡之、

正月廿三日

京都 大坂 長崎 駿府 山田 浦賀 新潟

右、次飛脚差遣之、

幕府、伊豆代官江川太郎左衛門英龍〇勘定吟味 役格〇海防掛ニ命ジ、米艦内海進入ノ際、

其退去ニ盡力セシム。

安政元年正月二十三日



〔老中達〕

○東京帝國大學所藏本  
幕府沙汰書所藏

○正月二十三日 葦山代官江川太郎左衛門へ

正月廿三日、○中

御代官

江川 太郎左衛門

亞墨利加船、萬一江戸近く乗入候も難計、其方早速出船致し、精一を以申諭、爲乘戻候様可被致候、

有、於新部屋、伊勢守殿御達有之候由、

〔御城書海防簡條書拔、高麗環雜記 通航一〕  
覽續輯 有所不爲齋雜錄 諸用留 聞見錄

〔村垣範正公務日記〕

○村垣範正所藏本

正月廿三日、例刻、○中

一萬一本牧を越内海へ入候ハ、江川太郎左衛門罷出、十分申諭し、退帆以多し候様取計可申旨、伊勢殿以御書付太郎左衛門被仰渡、右こ付、小早御船こる罷出候積り、御目付へ打合濟、其節萬次郎連候積り、

○江川ノ中濱萬次郎同行中止ニ關スル史料ヲ次ニ收ム。

〔江川家系譜〕

○維新史料編纂會所藏本

此の時に當り、應接通辯の爲め、中濱万次郎 數年間米國に漂流滞在致居候故、英語に通し居候(當時は蘭書を讀候者は有之候得共、英語に通する者は至稀なり、) を召連れ出張せられ度と思はれ候處、當路に嫌疑者多く、水戸烈公も亦た意見を異にし、書狀を贈る、其文に曰く、

春寒無障大悅、櫻馬場毆製も半に不至候内墨夷渡來、遺憾千萬、何とそ一挺ツ、も早々出來、扱出來候分は直様臺車等全備いたし度同意至願に候、さて中万事、(中濱萬次郎) 決て疑無之者と被見拔候歟に相察候處、本國を慕ひ歸り候程の者故、感心には候得共、元來墨夷にて中万か幼年を見込、右一人のみ、別て恩をさせ筆算仕込候處は、計策無之とも難申、中万も一命を被救候上、幼年より二十歳迄の恩義有之候得は、墨夷の不爲に成候事は決て好み申間敷、依てはたとひ疑無之と被見拔候とも、彼船へ遣候義は勿論、上陸の節も爲逢候義は必見合せ、此方の内評議等は一切爲知不申方可然、尤江川の用ひ様にて墨夷の事情等よく分り、却て彼を防ぎ候道具にいたし候は、江川の腹に可有之如才は有之間敷候得共、過憂の餘り如此候也、

二月初二 登城出仕に指かゝり、急亂筆宜く推讀可致候、

水 (德川齊昭、前水戸藩主) 隠 士

江川 との

二白、實は此節からはなにかひに致置候は不用心に候得共、究くつにいたし候ては當人

安政元年正月二十三日

德川齊昭書翰  
萬次郎ニハ  
警戒ヲ要ス

米船引戻ニ  
盡力スベシ



氣受をそんし、用に立不申候間、御あてかひをは存分に被下、扱江川腹心の者へ内密被申付、はなしかひの中に守護の念をふくみ可然、龍の子をなつけ飼置候もの、大嵐の節、風雲に乘し逃去候むかし咄の如く、万一變心墨夷の船へ被連行候時は、臍をかみても間に合不申、くれ／＼も念に念を入候方可然候、

三白、墨夷は應接の義我に備無之故、乍残念平穩に返し度は同意に候得共、平々穩々にて彼に被乗候得は際限も無之候、彼は河伯と雷獸の如く水上と火器を恃み、かくの如く横行いたし候得共、野原にころけ廻り候に至ては河伯も雷獸も格別のこと無之間、艦礮備候まで我は神速接戰の氣を持、應接いたし度、江川の勇氣必ず夷人の膽へひ／＼さ可申と存候、乍序例の剛情申述候、不盡、

執政阿部正弘、此の事に付、翁へ書翰を贈る、其文に曰く、

江川太郎左衛門へ

伊 勢 守

過刻は御來駕、其節縷々万次郎儀に付被申聞候趣、御手前出船乗戻方申諭候に付、通辨致し候者無之ては甚差支、無據義に付、万次郎處は當時心底も可見届、更に懸念無之候に付、御手前引受御不爲の義は不被取計趣故、只今にも出張、何分不取計事に付、其通にても可然と存候得共、尙得と相考候處、御手前の場にて万事の引請受合被申候儀、聊懸

墨夷應接ノ  
心得

阿部正弘書  
翰

萬次郎同伴  
ノコトハ見  
合セテハ如  
何

念いたし候筋は無之、萬次郎場も必反間の儀は無之義、顯然いたし居候得共、異情更に難計、船中へ乗込如何様の義に相成、異人より万次郎場連行候ても致し方無之、其上右に付ては、水府老公同列中にも深懸念致被居候人々も有之候間、格別差支も無之候は、今晚中、万一應接等出船も有之義に相成候は、先づ万次郎は見合せ候ては如何有之か、左候得は明日登城の上、一應申談早々沙汰可致と存候間、左様承知可給候、何も御爲筋の義厚勘辨の上、猶差支の儀も有之候は、明朝登城懸可被申聞候事、

正月廿三日

翁より阿部正弘へ返翰す、其文に曰く、

阿 伊 勢 守 殿

江川 太郎 左衛門

猶々御端書の趣承知、いつも出来上りの上にて申上候様可仕候、以上、  
過刻參上仕候節、縷々万次郎儀に付申上候趣、出船乗戻方申諭候にも、通辨仕候もの無之候ては甚差支無據義に付、万次郎儀處は當時心底も見届更に懸念無之、私引受御不爲の義不取計趣故、只今にても出張、何分不可計事に付、其通にても可然哉と思召候得共、尙篤と御勘考被遊候處、私儀万事引請御受命申上候上は、聊御懸念の筋は不被爲在、万次郎儀も反間の義無之は顯然仕居候得共、異情更難計、船中に乗込如何様の儀相成、異

江川太郎左  
衛門返翰



人共万次郎連行候ても致方無之、其上水府老公御同列様方にも深御懸念被爲在候間、格別差支も無御座候は、今晚中方一應接等出船も仕候義に相成候は、先万次郎は見合候事は如何可有之、左候得は明日御登城の上、一應被仰談、早々御沙汰可被成下間、左様可仕、何も御爲筋の儀厚勘辨の上、猶差支の儀も御座候は、明朝御登城懸可申上旨、御書取の趣承知奉畏候、右御請奉申上候、以上、

正月廿三日

〔昨夢紀事〕

正月廿二日、○中略、

一、此日、江川太郎左衛門殿へ、異國船萬一内海へ乗入儀も難計、其節ハ太郎左衛門殿早速出船ありて、誠心を以申諭、乘戻候様可致旨を被命たりとぞ、仍之晝夜濱御庭に詰居らるよし聞えたり、

江川ノ人物

齋藤彌九郎ノ咄

太郎左衛門殿ハ豆州葦山の御代官にて、海防懸り御鐵炮方を兼られたり、外國の事情に精敷、蘭學をも心得られて、近年外寇の事に付ては日夜心肝を碎き、必戦を期し、忠誠膽勇、幕府諸有司中之隨一たり、仍之幕廷の信任を受けて如此特命をも蒙られたり、此人の股肱之手附齋藤彌九郎も同敷伴ふて出船すへき手筈なりしか、事果て後、彌九郎

太郎左衛門殿にいへるは、彼時僕か心構へは、君の彼理を諭し給ひて、彼若固く聞入間敷狀を見届たらんには、矢庭に彼理刺殺して仕舞んと覺悟して、御供に侍ひしなりと申せしかは、太郎左衛門殿打笑ひ、余もいかてか彼理を諭し得へき、其期に至り聞くまじきも必定なれハ、彼應答の語氣を察し、一刀兩断になしてくれんすとの心算なりき、汝に先はさせまじとおもひしなりとかたられしよし、彌九郎（中根親實）師實に物語りき、

〔鹿兒島藩士〕安田義宜日史○公爵島津忠重所藏本

一異人へ應接有之候得共、色々苦情申立候處よ、江川太郎左衛門ハ異船萬一江戸海に乘入候と、其方早速差越、精一を以申諭候様、正月廿三日御達相成候、

〔懷舊紀事〕○阿部伊勢守筆蹟

正月二十三日、亞米利加船乘戻（事二付カ）ノ付ニ、公江川太郎左衛門へ左ノ如ク申渡ス、  
亞米利加船萬一江戸近乗入候モ難計ニ付、其方儀、早速出船イタシ、精一パイ申諭、爲乘戻候様可致事、

○正月十三日、江川、出府ス。次ニ其史料ヲ收ム。

〔諸用留〕○内閣記録課所藏本

江川太郎左衛門届申聞候書付、

安政元年正月二十三日



正月十三日、

江川 太郎左衛門

右、今日豆州表より到着之旨、爲届入來、

老中阿部正弘伊勢守○福山藩主 前水戸藩主德川齊昭前權中納言 ニ米使ノ態度强硬ナ

ルヲ告ゲ、貯炭場トシテ小笠原島ヲ貸與スルノ可否ヲ議ル。是日、齊

昭、書ヲ復シテ之ヲ不可ト爲シ、且應接方法及海岸防備ニ就キ、所見ヲ

陳ズ。

〔老中阿部正弘書翰〕

○公儀徳川閣所藏本  
豆州下田港亞墨利加船所藏

○正月前水戸藩主德川齊昭宛

伊勢守殿直書取、御相談として差上候分、

此度應接として罷越候もの共、浦賀奉行申談、アメリカ使節へ應接方兼る御評議致令伺（正月十六日、幕府林義等浦賀返書ノ節參照） 濟之通を以云々申諭方取計候、魯西亞使節へ應接等こ見合、取計候ハ勿論候へ共、彼中々容易ニ納得退帆致間敷、其節こ及び接戦と相成候てハ、兼る覺悟の事と乍申、いづも武備いまこ相整居不申候間、彼願筋之内少ハ聞届遣候姿いとし候ハ、彼本意ハ滿

米使應接ノ  
考案

其口上振

人心外國交  
通ヲ欲セズ

萬止ムヲ得  
ズバ小笠原  
島ヲ貸與ス

不申候とも、理窟之上よ於て彼を丸潰こ致さぬ處有之、聊をぐら彼退帆歸國の上之申譯も可有之形と被存申候、仍る彼願三ヶ條之内、石炭置場之儀（小笠原島）付、無人島を借一遣候様致候るハ如何可有御坐候哉、是迎も不容易義、實こ心痛い多一候得共、其口上振ハ、我邦の人心外國交通之事を欲せば、二百年來唐阿蘭陀之外ハ交易も致さば、民俗人情是こる一定固結いとし居、俄こ夫を變一候儀甚六ヶ敷、古今時勢の替り等申諭一候旁、何レ歲月を費す事よて、此度交易承知候返事も何分難致、得と取調申諭候上、有無之返答致候間、甚氣之毒千萬よ候得共、三五年相待候様及懸合候、石炭置場處も右同斷よる、縦遠土邊境の地を借一候るも、最早外國へ交通相始候様上下一統相驚、騒々敷可相成、左候るハ出來候事も出來致さぬ勢よも相成、差向國中の騷亂難計、困入候得共、段々申越次第も有之、實こ無餘儀場も有之こ付、他之處ハ不相成、小笠原島を借一可申と及答候るハ如何可有御坐候哉、彼定る其意こ滿さば、小笠原島ハ無人島ハ候間、石炭を置候とも、他國の船來り奪去候も難計、夫等ハ日本ハ人拔差越置、警固致くれ候哉と難題申候ハ、此方よてハ地を借スのこよる、警固人迄ハ付置候儀ハ不相成、且前々申通り、石炭置場計之地よても借一遣スと申候るハ、國中之人心動搖い多一、心痛致すなれとも、小笠原島をれハ、當時無人島ゆへ借一遣共、差向國亂も引出申さば、其内こハ追々利解も可行届候と存、且其方之望こハ、カリホルニヤ

安政元年正月二十三日

一九五



一應彼が面  
目ヲ立ツベ  
シ

より唐國へ往來路筋之爲メ、我邦之南境を借し、くれ候との事をれハ、小笠原嶋をれハ其路筋よも相當り、其國の用辨も可宜と存候る也と、再答可致、若又小笠原島へハ、イギリス人住居罷在候間、アメリカ之自由ニ參らば、日本之地をらハ、日本がイギリスへ懸合を付ケ吳と申出候ハ、夫ハ案外之事驚入候、乍然前よも申候通り、我邦大喪色々混雜する、イギリスありフランスあり、外國之應對手出一、差向出來不申候間、其方よる懸合可申云々、此餘如何様よも申方も可有之候、詰り彼り意ハ應せぬハ相分り居候へ共、彼之願筋を丸潰し致さぬ體面よと成し候迄よる、彼も未萬事修飾以多し、懸合居候事をれば、心中ハ不足よるも理窟之上よて、一度ハ納得之一端とも可相成候と存申候、如何被思召候哉、但、彼へ返答口上こ、此儀イギリス・フランス何レ之國カ、石炭置場處を借用致度と、達る願來候事も有之候ハ、前申候通り、只今之處よてハ、外ニ借し可遣場處ハ無之候間、矢張小笠原島之内へ、其國と申合こる差置候様可及返答候間、是も相合居可申と、此儀も爲念申聞置事と存申候、

○本書翰ハ藤田東湖ノ筆寫ニカ、ル。

〔水戸藩士藤田誠之進書翰〕

○水戸藩史料所載

○正月前藩主徳川齊昭宛

石川和介ト  
無人島貸與  
ノ可否ヲ論  
議ス

謹る拜見仕候（御座候）、只今和介と對談中ニ御座候、和介明日こも浦賀へ内々罷越候も難計、其節ハ暫く逢兼候間、此度一條大圖之處見當承り度旨、極々懸合届兼候節ハ、無人島を石炭置場こか候るハ如何と申候ゆへ、夫位こて承知いたし候をらば、爭戦よハま可申候へ共、置場と申ものハ置候るも盜まれ候苦勞無之場所可然、無人こてハ番人無之候ゆへ、あめりか石炭を置候る歸候跡こて、あろしや歎いさりす其外の人々こ右石炭を盜まれ候るハ、置候せんハ有之間敷、此所如何と申候へバ、和介もいかさま夫をらば八丈ハ如何、八丈迄か候ハちとくるし候へ共、如何こも此御不備、交易こハま可申杯と、當時談論最中ニ御座候、○下

〔前水戸藩主徳川齊昭書翰〕

○水戸藩史料所載

○正月二十日藩主藤田誠之進宛

夕刻、石和來り云々申候との事故、八丈よりハ無人の方まさり可申候へ共、是以如何と存申遣候處、只今床こ入り、又々考候へハ、無人とても八丈こても何レこも、墨夷の申事一ツも御叶へ被成候ハ、墨夷ハ無事ニ引取候共、直ニ魯夷來候て、魯夷ハ長崎へ來り、正法こ申立候をバ御濟せ無之、墨夷浦賀へ來り、不法こ申出候をバ御濟せニ相成候よし申、魯夷も浦賀へ來り、又墨夷も來り、其外イギリス・フランス皆々浦賀へ來り、申合候て如何様の

石川ノ論ニ  
對スル意見

安政元年正月二十三日



米使ノ申出  
ハ全部拒絶  
スベシ

事致候も難計、左候へバ一ツも墨夷の申出御取用無之方、あと以墨夷ハ不法の振舞致候と  
も、先つ墨夷計の事、強訴こそそれ一ツも御濟せ相成候ハ、果して後の愛ハ鏡こかけ  
候様は存候へバ、明朝、和介發足こも相成候ハ、此ふん申聞候方と存候、○中如何こも不  
容易事故、尙又石和へ申遣候様こと存候、くれくれも、墨夷へ一事御濟せ相成候ハ、必  
魯夷こて右をとらへ申候て仕方有之間敷、愚考いふ候、早々、

廿日夜

誠之進

〔老中阿部正弘書翰〕

○公館徳川御願所蔵本  
豆州下田港亞墨利加船所載

○正月二十一日前水戸藩主徳川齊昭宛

正月廿一日、阿部伊勢守方、於營中、御直よ御相談とて差上候、又壹通、

（小笠原島）  
無人島を借すと申事甚失策と存申候、何ゆへと申せハ、無人島ふれハ日本之許無之共、彼  
自由こ致候間、少も難有儀無之、彼本國へ歸候るも、無人島を借り歸候と申さば、人之棄  
ものを受歸候儀と笑物こ可相成、使節之大恥辱とも可相成、詰り差向彼こ益無之事ゆへ、  
無人島を借候る難有と承伏可致答ハ無之、只々彼之申筋を斷候事出来不申候る、無據ケ様  
之事を申出候と、人よ見下ケられ候のみと被存候、且又よろやへ此度長崎よる懸合よ

小笠原島貸  
與策ヲ否ト  
スル意見

も、彼之申處を一ケ條も御取揚御差許と申儀ハ無之、都る三五年と期を延し有之候へハ、  
アメリカ迎も同様、彼之三ケ條も、總る期を延し候様不被成候るハ、御取計こ異同有之、自  
然よろや只今よも再渡いとし、アメリカ願筋よハ御差許之ケ條も有之由、魯西亞ハ一ケ  
條も御許無之ハ如何候哉、長崎よ於てよろやハ別段厚く御取扱之由御口上も有之候  
處、案外之次第と六ケ敷申來候ハ、如何返答可有之哉、夫のみあらば、此後イキリス・フ  
ランスよても追々渡來、いろく之事願出候ハ、矢張三五年之内ハ難及返答と御斷可有  
之、其節彼申こハ、アメリカハ三ケ條之内、一ケ條ハ御差許有之、然ルこ我國へハ一ケ條  
も御許無之ハ如何と申候ハ必定こ有之、其時此方よハ、夫ハ廉相違之事候、其方願筋  
よ於て、石炭置場を借用と申出候ハ、アメリカ同様の許可致、已ニアメリカへも爲含置  
候と申るも、中々其通りよハ參り申聞敷、何よもせよ、御許と申名目重く候間、彼も面目よ  
拘り、必定差違、六ケ敷相成可申、左様之儀ハ決る無之と被思召候や、如何、

○本書ハ藤田東湖ノ筆寫ニカ、ル。

〔前水戸藩主徳川齊昭書翰〕

○水戸藩  
史料所載

○正月二十三日老中阿部正弘等宛

安政元年正月二十三日



小笠原島貨  
與策ヲ不可  
トス

ふなら強く  
斷ルベシ

米使應接私  
案ノ一

米使ヲシテ  
退屈セシム  
ベシ

安政元年正月二十三日

二〇〇

一昨二十一日、内密御相談有之候無人島貨遣候可否(前二揚之)兩通、幾度もくり返し熟覽、二夜快寢も不致候て愚考之處、貨遣候へば少々あいううこハ相成、丸潰しに不致處こハ味有之様候へ共、其位にてハ迎も不致承知事を、あまの口を開き候ハ、魯夷へも引張、旁後難難計候間、やそり當然の處にて押ぬき、尤理ハ正しく、言葉ハやそらかよぬ、彼より何程おびやう候とも、我ハどこまでもあきら強く、彼より兵端も開き兼候様仕向ケ申度、其外愚存條々別紙に及御相談候、最早如何にも事急、國家安危の大機會候間、乍勿論厚く御評議こいぬ度候也、

御書取二通返進、御落手可給候、

正月念三

水 隱 士

勢 州 殿

○別紙

一此度の事應接肝要よて、兵端の開否も夫より起り候處、此節ハ應接場へ引戻候事さへ不承知の様子、然るを此方より去さりこ早く應接いた度あせり候ハ、異人不快をど稱し、彼こ先ンを取られ候間、却る此方よてハあせり不申、彼佚して我勞するの勢を變下、我佚して彼退屈いた候御仕向ケ致度事、

廻船漁船等  
取締ノ方法

警備ノ方法

一右こ付るハ彼へ申遣候ハ、遠方渡來無益を爲隙取候てハ氣之毒ゆへ、浦賀にて應接之事追々懸合候得ども、將官不快等にて當分差支候ハ、無據候間、其方都合よろき節、どつていらして乗り來、合圖いた候様、夫迄ハ此方より應接船さし出し不申候間、右様心得候様、壹通の書、遣し申度事、

一此節廻船之外漁船等差留候よ之處、御用船之分少々残り、漁業等平常の通爲致、尤異船近邊へハ近寄不申方可然候、

但、此方より右様いた候も、夷狄の方より來り、漁人共殺生の魚等被奪取候事杯ハ可有之哉候へ共、少々之事ハ彼こ不直をかさねさせ候ゆへ可然候、

一廻船ハ無滯入津候へども、御用船こあてられ候を恐れ、外海に待合居候類も有之よ一相聞へ、自然米價等こ拘り可申、伊豆下總等へ御申付見合せ居候船も有之候ハ、此節御用船等こハ不被仰付候ゆへ、無心配入津荷物さむき候様、元船へ通達爲致度事、

一過日も申候通、諸家の備海岸へ幕打廻し揃居候と、案山子同様、實に失策候間、四家始五町あり八町あり陸地木蔭山かげ等へ引込陣取、程のまきぬ様こいたし、晝ハ勿論夜中も松明等にて海岸見廻り申度事、

安政元年正月二十三日

二〇一



海戰ノ準備  
整フ迄ハ陸  
戰法ヲトル

疲弊ノ驛村  
ヲ至急救助  
スベシ

番船ノ數ヲ  
減ゼシム

以俟待勞ノ  
策ヲ執ルベ  
シ

安政元年正月二十三日

二〇二

岸より防ぎ候てハ、所詮勝利無覺東候間、大銃大艦存分ニ御出來迄ハ、敵を引上ケ候る  
接戰以テ一度事ニ候、早く申せば、是迄ハ陸へよせつけぬと申ス御趣意を變テ、上陸す  
るから上陸せよと申ス見識ヲ引返シ申度事、

一當分の様子にて異船長く滞留いたし候ハ、東海道ハ勿論浦賀近邊其外驛々村々疲弊、  
耕作も仕事も不相成、萬民怨怒差見へ、甚不容易候間、何事をも御さし置、右驛々村々御  
救方一日も早く御評議、且人馬遣ひ方悉減候様有之度事、

異賊へハそれものこさハり候様よいたし、御國大切の百姓をバ塵芥の如くむごく  
たし候へバ、つまる所其禍異賊よりハちろしく、くれぐれも厚く御勘考之事、

一此節番船夥く有之由之處、鐵砲等用意之船も無之、異人乗込候日ニハ何の用も相立  
不申候間、品川邊物見注進船ハ格別、處々無用の番船ハ可成丈減テ、敵より見候るも、日  
本も了簡を一ツかへ候様あやみ候方、却てよろしく可有之候事、

一右之外すべて御國の疲弊ニ不相成候御工夫、何分も御勘考有之度、右様之御仕向ケニ  
相成候ハ、諸向怠り可申との御懸念も可有之哉ニ候へ共、當分の勢ハ只々敵ニ先ン  
かけられ、我ハ奔命のみつられ、此姿にてちろーや滞留程の日數を経候ハ、たとひ  
異賊兵端を開らばとも、御府内始メ不戰る潰可申と、扱々痛心千萬ニ候、案山子の如く

ある御手當よりハ、諍り返りて實ニ戰<sup>（符カ）</sup>を持候方、御國內へもひびき、御國內本氣ニ相成  
候へバ、自然彼の膽もひびき可申、仍る號令の大意、左ニ御相談の事、

幕令私案

異船渡來之節心得振之儀、去十一月重き上意奉承知候上ハ、一統聊弓斷有之間敷候  
所、今般いよ、數隻渡來ニ付るハ、應接の模様ニ寄、彼より兵端を開き候は、一同  
奮發之儀申迄も無之候得共、異船滞留中、御備向外觀のみ取飾り、海岸ニ陳列いたし、  
又ハ驛々人馬等無益ニ召遣ひ候るハ、御國之疲弊ニ相成、彼ガ術中ニ陥り候間、御備  
被仰付候面々ハ、此節より要害の土地見計、山蔭木蔭等へ陣取、晝夜時々行列を正し  
海岸見廻り、彼等海上にて少々ノ無禮等いたし候ハ不致頓著、萬一上陸及亂妨候ハ  
、速ニ出張致退治候様心懸可申候、且又屋敷々々へ手勢用意以、候分も、右ニ准  
ト外觀之虚飾一切相止、士卒の銳氣を養ひ、諍り返り居候る、大筒小筒配り方ハ勿論、  
劍槍手詰之勝負等實地の接戰、專一ニ心懸居候様、精々可申付云々、

但、大船等御備相立候上ニハ思召も被爲在候へども、方今差向候場合にて、本文之  
通り被仰出候間、面々必死之覺悟する、著實之工夫可致候、尤いよ、彼より兵端  
相開き候節ニ至候ハ、小船を以神速ニ勝負ニ及候儀も可有之候、

右ハ全く御號令之大意のミ認申候、御同心ニ候ハ、御添削の上御覽ニ御入、御ふれニ

安政元年正月二十三日

二〇三



安政元年正月二十三日

二〇四

致度事、

正月廿三日

水 隱 士

勢 州 殿

御初へ

米使應接私  
案ノ二

即答ノ不可  
ナル理由

應接振之儀、(林瑞、米使應接掛)大學等手揃之上、彼是不及申候へ共、心付之廉先頃も認御相談申候處、其大筋、尙又左に及御相談候、過日の論と重複の事も可有之候、

一 應接の寛猛等臨機應變のへ、あらかじめ一定致難く候へ共、魯夷ハ隣境、殊に長崎へ來候るさへ、願之趣申延候上ハ、何程墨夷より願候迎も即答いたし候るハ、魯夷へ對し信を失ひ候のへ、此儀よく推察いたし候様、

一 又候渡來よても、遠路空しく返し候ハ氣の毒ゆへ、蘭人へワざざ相頼と傳達、蘭人よりも請書差出候處、右約に違ひ、即答いたし候るハ、蘭人へ對し候るも信を失ひ候間、此儀も察し候様、

一 我國二千五百年餘、前例無之事を半年一年の内ニ挨拶承度との儀、あまり短氣ある事ニハ無之哉、得と了簡いたし候様、

返答延期ノ

一 去夏ハ御病中、去秋御大變、此節御代替の御大禮未被爲濟、祖宗の大法を變候儀及評議

口上振

候るハ、人心決る不服、整ふべき事も不整候間、當寅年より巳年春迄三ヶ年の間ハ、有無及挨拶兼候、

一 是非只今有無之挨拶承度との事ニ候ハ、祖宗大法之通り斷候外無之候へ共、夫にてハ去夏以來折角の厚意よて遙々渡來の廉に相當不致候間、右申通り二千五百餘年の法を變候事ゆへ、篤く評議、日本國中承知之上、有無之返答に及度候、

右之外、ちろちや問答にも有之通り、封建郡縣の差別、神國人心固結のまけ等、乍勿論能々申諭度、且他日交易整候ハ、此方より何々の品望をよて、其方より何々の品遣

し候心得候哉、先きより承り候分ハ不苦候間、委細に承候上、得と評議いたし可申と答候ハ、彼も期を待候心可相成候、右の趣をやいらう懸合、先きより兵端を

開き兼、退屈いたし候様仕向ケ申度候、兩度迄渡來之者へ三五年杯とふらと懸候るハ、中々承知致間敷候間、とさと當年より三年と申方可然、三年にて御兵備不整候るハ、迎も御整六ヶ敷候、右件々を應接の眼目といたし、度々懸合候るハ物分れこいふ

し、其中に與力等心得正しく氣てん有之ものへ申付、遊説を入候ハ可然、譬へバ馬鹿くしく日々懸合よらみ居候よりハ、本國并外國への面目に、米穀食料よても頂戴よてハ如何と歎、説を入候ハ可然哉候へ共、表向應接の節、此方より内かぶとを見せ

安政元年正月二十三日

二〇五



候ハ、以之外とくれぐ、愚慮いたし候、如何よも大切の儀、諸賢の衆評如何、  
正月廿二日夜燈下亂筆御推讀希候、

水 隱 士

勢 州 殿 御初へ

○正月二十四日老中阿部正弘等宛

昨夜認落候ケ條

浦賀奉行屬  
吏ヲ召シ應  
接事情ヲ聽  
取スベシ

一浦賀の事情更に分り不申候處、同所奉行并ニ林等ハ人氣ニ拘り候ゆへ、御呼戻も如何ニ  
候得共、此度應接いゝ候組頭並御徒目付與力位ハ御呼よせ、別段之儀を以各方より御  
直ニ御尋ニ相成候方可然、長崎と違ヒ御手近の事ゆへ、舟ニ候は、速ニ往返可相成、格  
別御評儀の御足合ニ可相成哉と存候、

金澤邊警備  
ノタメ援兵  
ヲ派スベシ

一追々金澤邊様子を見候者の咄承候ニ、廿一日杯ニハ、異人測量之序ニ多ク島へ上陸、  
かけくらは杯いゝし、又ハ人家近く行候由、彼邊の地勢、本牧よりハ却テ金澤の方上陸亂  
妨等いゝやすき場所ニ候處、小家の米倉一手ニて左も右はれなる風情之由、可然大名  
へ援兵被仰付候てハ如何、定る表向見分の役々より御承知トハ存候へ共、心付ニ任せ申

述候、

細川等四家  
ニ臨時派兵  
ヲ命ズベシ

一細川等四家へハ持場等何の御達も無之哉、外海持場受取以前、異船ニ付てハ、此上様子  
次第、内外海之差別なく、臨時出張可被仰付旨、改テ御達有之候方可然哉、

警備ノ方法

但シ、可相成ハ、誰ハ金澤誰ハ某場所と申事、御達シ方可然候、品川より芝迄ハ何を申  
も御手近之御要害故、まゝといたし候大名多き方可然候、芝邊遠淺ゆへ元船ハ不來候  
共、ばつていらハ來候半故、於此方も、萬一の節ハ小船よて、ぞつていらの夷人を繰ら  
ひ打之儀相成候様、兼る爲心得度候事、

正月念四日

水 隱 士

勢 州 殿

初に

〔村垣範正公務日記〕

○村垣範  
通所藏本

正月廿四日、例刻、○中

一水戸老公御書下ケ、伊勢殿河内ハ御渡し、菊椽ニ掛物評議、二通之内壹通ニ、應接方心  
得眼目之御趣意可然品ニ付、其儘浦賀ニ被遣候方、尤其通りと申事も無之、右と舍ニ

いゝ候様被仰遣候積り、外壹通ニ、御警衛向其外宿驛人馬遣方廻船入津之譯等、御論  
尤之儀ニ候へとも、其儘も出しうと、是ニ御目付方此方引別レ、十分ニ評議之積り、

齊昭ノ書翰  
一通ヲ浦賀  
へ送附ス



安政元年正月二十三日

二〇八

○對米措置ニ關スル福井藩主松平慶永ト齊昭トノ往復書翰ヲ次ニ收ム。

〔福井藩主松平慶永書翰〕

○昨夢紀  
書所載

○正月二十四日前水戸藩主徳川齊昭宛

應接モ無ク  
切齒ノ至

一翰奉呈、陰晴不常、寒暖未整之時、先以倍御清安被成御起居、欣賀不啻奉存候、然ハ異船先々平穩之趣にハ候得共、世上巷說紛然、應接も無之由承り申候、如何相成候事哉、實に不安寢食、甚以苦惱、切齒積胸之至奉存候、此品到來合候付奉拜呈候、萬々一御笑留も被下候ハ、幸甚之至奉存候、將又先日以野書相伺候儀如何御坐候哉、御序之砌是非御教諭奉希候、誠に馴も不及舌候得共、萬一加奈川にて應接等相成候るハ、彌以乍恐 御武威失墜之端緒と奉存候、何も近日之御様子御見舞申上度、艸々頓首謹言、

正月廿四日

尙々、時下御自玉爲天下奉祈念候、被命昨夜品殿峰へ人數差出申候、左様御承知可被下候、以上、

〔前水戸藩主徳川齊昭書翰〕

○昨夢紀  
書所載

○正月二十五日福井藩主松平慶永宛

朶雲拜誦、如諭陰晴寒暖不定之候、愈御健勝被成御起居拵賀不啻候、墨夷渡來之處應接も

造船鑄砲モ  
間ニ合ハズ

挑戦ハ拙策

彼ガ不利ナ  
ル陸戦ニテ  
討ツベシ

無之、御切齒之由御同意御坐候、舊臘御書中ニ御下問之趣、御催促得貴意候得共、愚老之存意を申進候へハ、全く一己之了簡をも 廟議如此と御推考にてハ指支候故、是迄御答も延引いたし候、扱異賊渡來已前に候へハ、大船大礮等一日も早く御製造急務に候得共、今日と相成候るハ、所謂猪を見て矢をはくとやらん、何事も御間ニ合ひ不申候、公邊御始諸家之手當全備とも不被存候へハ、此方々打拂戰爭を挑み候ハ長策に有之間敷候、乍然異船長く逗留之内、我は空敷奔命に疲れ、其上士卒外に暴露、一統不戦して疲弊いたし候儀、甚致懸念候、つらく考候に、彼は河伯の如く水中にてこそりきみ居候得共、陸地にてハ何程之事可有之哉、されは我海岸等虚飾の陣を張居候よりも、山陰木陰等に休息致居、時々行列正しく海岸見廻り、晝は木の間々旗小印等奥しれす見せ、夜は松明等樹間に耀き候類にいたし、銳氣を養ひ扣へ居、異賊上陸亂妨致候は、速に出張、或は進て戦ひ、或は偽て弱を示し、彼乘し來候處にて、大小筒戦士夫々引分ケ、處々打て出候ハ、必勝無疑奉存候、夫迄ハ彼々とし候共聊頓著不致、退屈いたし候様仕向ケ度事に候、彼も中々容易に上陸亂妨ハ致間敷候歟、右は全くの愚存ニ候得共、過日殿峰へ御人數御差出のよし、實地の御參考にも可相成哉と、御懇意故吐露致し候也、

正月二十五日

水 隱 士

安政元年正月二十三日

二〇九



二白、何寄の品御投送令多謝候、此品如何敷候得共、御報の寸志迄令呈進候、不盡、

〔前水戸藩主徳川齊昭手記〕○水戸藩史料所載

正月廿五日、

此方より兵端を開き候ハ不宜候へ共、彼より開き候時之事をハ厚く考度候、  
一彼等海上ニ何百艘居候迎も更ニ頓著不致儀、海濱へ來り亂妨之時ハ、出張打拂切捨等ニ

致し候へバ子細無之、此處能々考候へバ、こはき様にて存之外こはく無之候間、一統膽  
をすへ、陸戰接戰と極可然、此處能々御申付ニ致度事、

右ハ正月廿四日、御城於扣所老中へ逢候節渡ス、

舊年アメリカへ云々申候様蘭人へ申達、其節八丈ヲ織り遣候由之處、彌申達候事ニ候ハ、  
蘭人へハ何う被下有之可然、追て使候爲こよろしく、

一此度來候アメリカ人内海へ乗入、此方より申聞候儀をも不用、或ハ測量いたし、上陸い  
たり人家へ入物を取、又ハ婦人を追、又ハ鳥銃にて鳥を打候坏、統て御法ニ觸候儀致候  
儀、月日迄浦賀奉行方にて留置申度候、是ハ後日の申草ニ可相成爲こ候、

右ハ正月念五日、口上覺書こいあり、老中へ相渡ス、

〔水戸藩士原田成徳日記〕○公稱録川原所載本

彼ヨリ開戦ノ際ヲ考慮スベシ

米人亂暴ノ件々記シ置キ後日ノ證トスベシ

正月廿六日、寒風、晴、事なし、

櫻任藏ヲ藤田ノ許ニ赴カシム

今日、櫻任藏（奥念）・中西忠藏浦賀詰御役人衆模様之儀ニ付、藤虎（藤田東湖）の咄吳候様兩人よて來ル、又傳  
へよてハ不宜候間、直ニ參り咄候様致指圖遣ス、八兵衛も跡より行ク、（原田）略、

〔水戸藩士藤田誠之進書翰〕○水戸藩田家舊藏書類所載

○正月二十七日前藩主徳川齊昭宛

謹る奉申上候、あめりか書翰、今朝半兵衛呼寄、私宅にる爲寫申候間、本書相納申候、御寫

ハ直ニ御預り申上候、

一イシザテヅヨ書面、乍恐内々奉入

高覽候、

一廿二日彼理病氣見舞品物遣候節、黒川嘉平の供ニ相成異船へ罷越候村越芳太郎事櫻任

藏、昨夜對談、いろく事情承候處、第一可患ハ、大學頭始メ御使の心底、如何にも疑敷

御座候、平穩々々を專一ニ仕候ゆへ、あしく仕候ハ、御國體を汚し候儀、何共安心不仕

候、五年ハ何事をも申のべさる代り、五年過候ハ、三ヶ年之間試ニ通商と懸合候るハ

如何と、林等内評いたし候趣、尤右ハ席上種々の論の内の一ツにて、勿論決著こハ無之

事と存候へ共、扱々苦々敷御座候、仍る愚察仕候に、筒井・川路等ハ出立之前日 前様へ

安政元年正月二十三日

櫻ト對談

應接掛ノ心底疑フベシ

林等ノ行動ヲ評ス



安政元年正月二十三日

一一二

御目見仕候處、此度ハ 前様方くぎをさし申候を恐れ、御目見も不仕、彼地にて臨機應變と申事にて、俄に御返翰を目論、御断らばなし位にて決著の含みにハ有之間敷哉、左候るハ閣老初メ不相濟事と存候、全くの推察にハ御座候へ共、過憂之餘り、奉入御内聽、以上、

正月廿七日

臣 彪

異人ノ態度  
言語同断

異船へ大こんねぎ遣候へハ、異人共直に受取、將官へ披露無之内に大こん等をぬすまかじり候由、無禮無作法實に禽獸同様のよし、其上昨日云々と懸合候事を今日ハ更にしらぬかほにて飛し候類、言語同断之由に御座候、以上、

○参考

〔水戸藩士藤田誠之進書翰〕

○公卿徳川國頼所藏本  
東瀛遺稿所載

○正月二十一日同藩士金子孫次郎宛

十九日之御書面、今廿一日早朝半之助持參、致拜見候、如諭早春方異賊渡來、とかくかれめを懸られ候段、苦々敷御坐候、乍併三月四月に至候も、最早渡來よてよろきと申事ハ無之、却る待疲れいと候方ハよろしく御坐候、只々膳立間合不申故、まかひ大難物、御察可被下候、  
一 二三日、(長野、薩摩) 浦賀へ出立、右ハ異人へ對談被命候由、  
一 右以前、十三日、浦賀奉行伊澤美作守(政務)、先年長崎奉行にて御討之人物、同與力組頭黒川嘉兵衛(伊澤同)、被御討候、異船とすれ合浦賀へ乗込、諸事決断、去年と違ひ都合よろしく御坐候よ、去年ハ彼方上陸いとさがり候を無理に押へ、漸々栗濱へ引上

林等浦賀ニ  
赴ク

露船退帆

諸侯旗本兵  
ニ戰意無シ

熊本藩家老  
手兵ヲ率キ  
テ著府ス

本藩ノ手當  
亦不十分

ケ候處、此度ハ此方方上陸申付、直に浦賀よて對談の御含と相見へ、十四日夕方、日夜對談場假御ふん取懸り居候よ、乍然此方申付候通り、よく右場所へ上陸いとし候へハよろしく候處、如何相成可申哉、  
一 筒井・川路等おろしや人をハ先こどうりから辨付、去ル八日、退帆爲致候上ハ、墨夷をハ尙更辨付、押返し不申候るも不相成候處、墨ハ魯と違ひ、元方驕傲無禮候間、承伏之程何共安心不致、懸合もつれ候ハ必定、其上よて如何成行可申哉難計候處、當時惣體の人心、懸合之もつれ候時の事をハ不考、多分平穩よの相濟可申と見下し居候よハ、扱々こほり申候、夫ゆへ、松平加賀守殿始在府大諸侯へ、夫々處々固等被 仰付、御旗本詰場持場等追々日々被 仰出候共、更之戰氣無之、如何よも案山子の姿、不堪浩嘆御坐候、所詮大砲の聲と赤キ血を見不申内ハ、振ひ起し候策無御坐候、可憐ハ四里四方の老若、其節に至り、道路に泣き及び、火付夜盜等横行思ひやられ申候、御先手方加役十人被 命候へ共、中々鎮撫六ヶ敷御坐候、  
一 細川家老長岡盛物も、去ル九日着府、過日の書面の末に、道中梅花を見て、  
後れトの心を同一梅の花我も弓矢の道のさきかけ

中々感心し御坐候、一昨十九日之書面、道中いそぎ、手勢更に追付不申、いまだ半分も參着不致候内異船渡來、扱々心配、此節手勢僅に百人と申來候、半も參着不致候し手勢百人の身上、浦山敷事御坐候、  
一 末筆に相成候共、(徳川齊昭) 前様益御機嫌克、十六日方日々御登城、恐悅御坐候、御勇氣御盛に御坐候、(徳川齊昭) 中納言様よもすハと申候へハ、御登 城之御張込に御坐候へ共、御手當ハ誠こがらくとワけふし御坐候、只今も石川吉次郎來り承り候處、かんさつ府も誠こあはれに御坐候、今ハ是非に不及候間、却る諸侯方も一段糞落付よて、其内に取捕候外無之、中々神速に御出張ハ御六ヶ敷御坐候、  
一 御登城ハやり火事具と御さしづ、但老若衆俄に見廻り旁出馬之節ハ、小具足陣羽織の申合のよしも達しに相成申候、尤諸侯ハ勝手次第と達しに相成申候、いささ甲冑よもかぎり申間敷候、

安政元年正月二十三日

一一三



急登城ノミ  
ニテ出陣ハ  
ナカラシ

安政元年正月二十三日

二一四

一當分様子よるハ、急御登城ニても先ハ君公よハ大樹御身近くを御警衛當時三藩御一人ニテ、御出軍ハ有之間敷、御人數も右御旗本の御備にて可有御坐、尤鼻の先迄攻來候時ハ格別ニ候へ共、品川高輪邊へ御出張ハ有之間敷候、ととひ御出張候様老中等申候位にてハ、いや／＼拙者ハ御側ハ離れ兼候と申御見識と竊こふまへ罷在候、是ハ筆紙ニ盡し難し、早く申せば有志を湊川へ押出し、清忠等内まくこ控へ居候様にてハ大變ニ御坐候也へ御坐候、客來落かさぶり候内相認、とかく横道へのみ書ちらし申候、御推覽可被下候、以上、

正月廿一日

銚子及湊ノ  
警備肝要

尙々大銃の臺彈丸硝石ハ、一ツツ、も御せり立可然、祭する所御献上後ハおこり候半奉存候、浦賀内海事起り候時よハ、銚子と湊ハ決して油斷不相成候、以上、

金子様

誠

○三月十四日、米艦「マセドニアン」、江戸内海ヲ去リ、小笠原島ニ向フ。同條參看スベシ。

福井藩、一番手人數ヲ品川御殿山武藏國荏原郡警備地ニ派遣ス。明日、津山藩、同ジク高輪江戸警備地ニ出兵ス。

〔老中達〕

○東京帝國大學所藏本  
幕府沙汰書所載

○正月二十三日津山藩主松平齊民・福井藩主松平慶永へ

正月廿三日、

松平越後守

警備地へ出  
兵スベシ

異國船渡來ニ付、兼る相達置候場所ハ、先壹番手人數差出候様、可被致候、

松平越前守

同文言

穩便ニ取計  
フベシ

一人數差出候儀相達候得共、不事立様穩便ニ取計可申旨、御達一、

〔松平慶永老中〕  
右、於和泉守宅、家來呼出、同人、書付ヲ以、達之、

〔村垣範正公務日記〕

○村垣範  
通所藏本

正月廿三日 例刻、○中略、

一御殿山、松平越前守今日出張被 仰付候、

〔昨夢紀事〕

〔松平慶永老中〕

正月廿二日暮時過、西尾侯へ御留守居之者を被召呼、先つ一番手の御人數を物靜に被指出候様、御達ある故、兼る御調之通り、一番手を被指出、品川東海寺を宿陣と定められたり、

〔合同舶入相秘記〕

○松平慶永手記  
東京帝國大學所藏本

正月二十三日、

松平和泉守ヨリ呼出、六ツ時過、留守居罷出候處、六ツ半時頃歸、御渡書付、

松平越前守〔慶永、福井藩主〕

安政元年正月二十三日

二一五

一番手ヲ出  
シ東海寺ヲ  
宿陣トス



老中達

出兵届書

安政元年正月二十三日

二二六

異國船渡來ニ付、兼而相達置候場所へ、先一番手之人數差出候様可被致候、  
外々御書付、

別紙之通り人數指出候様相達候得共、不事立様穩便ニ取計可申事、

只今、品川御殿山エ、御警衛人數一番手繰出申候、此段御届申候、以上、

正月廿三日

御名

去夏之節ハ、早太鼓早拍子木ヲ以揃候へ共、今晚、之ハ穩便之被仰出ニ付、太鼓ヲ靜ニ「デ  
ン」「デン」ト打、拍子木ヲ「カチ」「カチ」ト打候テ爲知候也、左ナクシテハ、先日之法令  
反古ニ相成候故ナリ、

山縣三郎兵衛・平本但見・鈴木主税不出、出淵傳之丞・有賀清右衛門・勝木十藏目見、何レモ  
へ申聞候而退去、常盤橋屋敷出拂五ツ半時過、靈岸島屋敷出拂四ツ半時、

品川着到九ツ半時頃、

何レモ用人雨森傳左衛門申達之、

今日之被 仰出ハ、風聞ニテハ、トカク應接カナ川ニテイタシ度趣夷人共申立、且又本牧  
邊測量イタシ、又一昨夜品川沖迄モ夷船罷越候故ニ、餘リ御固メ無之候モ不宜候ニ付、被

仰出候、ト申事ナリ、

幕府出兵下  
命ノ理由

二十四日、

今晚、松平和泉守ヨリ呼出、留守居罷出候處、御勝手ニテ公用人申聞候者、今度者差出サレ

候御人數餘程長陣可相成、疲勞ニ及候テ、万一之節御間ニ合不申候而者所詮無之ニ付、保

養致シ罷在候様、就夫交代等イタシ候而モ不苦候趣、内々和泉守被申候旨申聞、又公用人

書付相渡、

渡來之異國船平穩ニ候得共、明廿五日、彼國祝日ニ付、○中略

右之趣傳左衛門申達之、家老へ傳左衛門申達、山城ヨリ三郎兵衛迄以馬方申越、

尙又公用人申候由、夜分海岸へ挑灯等差出候義モ無用可致由、彼万一品川邊乗込候ハ、

見當ニ相成候ユヘノ御趣意之由、公用人申聞候由、七右衛門申達、傳左衛門ヨリ承ル、今日、

阿州・水戸殿公へ手紙差出ス、

中根鞞負黄昏罷歸、承候處御殿山者何モ相替候事無之、昨夜九ツ半時比着到ニテ、未タ御

締リモ不相整、人足小屋場御拜借御引渡無之、色々掛合ニ及候處、漸七ツ半時過比御引渡

ニハ相成候得共、未タ人足出拂不申、明曉迄ニ引拂候様、嚴ク及掛合候趣、

獵師町臺場之儀、御拜借人足ニテハ中々餘計ニテ、却而果敢敷儀モ無之候故、今日ハ御人

數大ニ疲レ居候間、明朝ヨリ取掛リ尤手、晝比迄ニハ仕上ケ致度趣、

安政元年正月二十三日

二二七

長陣ノ覺悟  
ヲ要ス

夜中海岸へ  
提燈ヲ出ス  
ベカラズ

人足小屋拜  
借

獵師町臺場  
拜借



本牧へ乗入  
ノ風説

警備十分

此邊之風説ニテハ、本牧へ乗入候趣沙汰有之、  
二十五日、

中根鞞負五ツ時頃歸ル、承候處、御殿山御ベリモ十分宜相成、獵師町臺場ハツテレ之儀ハ全備相成候、ウヌホレニハ無之候得共、御眼有之人ニ見セ候ハ、嘸々感心致シ候義ト申候、

二十九日、

此度、浦賀表へ異國船渡來ニ付、品川御殿山邊御警衛被 仰付、人數差出候儀ニ御座候、右ニ付、場所并備向之様子致見分置度奉存候間、供連極省略仕、野服ニテ相越、猶又取締方嚴申付度奉存候、不苦儀ニ可有御座哉、御内慮奉伺候様越前守申付候間、此段奉伺候、以上、

名内

正月廿九日

大道寺七右衛門

〔浮天齋日記〕

○市川兼恭日記  
維新史料編纂會所藏本

正月二十一日、四十一度、大岩・小森來、吉兵衛來、青木來告、御固場爲御殿山、夜中根氏行、  
廿二日、三十八度、行杉田(成卿)、天臺出勤、

廿三日、四十度、行靈岸島(福井藩中屋敷)、見大砲四門之量、夜七時聞太鼓柏木、即 公邊御書物上納、行

福井藩兵六  
百餘出陣ス  
臺場築造

靈岸島、十二時勢揃、出張於東海寺、三時着宿高源院、寒威切肌、御人數六百餘、

廿四日、海岸築臺場四所、銃眼八個、中根氏來、移宿定惠院、有明日異船祝發之諭、

廿五日、築臺場、中根氏來、正午異船祝發、

廿六日、築臺場終、狛氏來、  
(福井藩老)

〔松字日記〕

○水戸藩士西野宣明日記  
子爵齋藤敬三所藏本

正月廿五日、天晴、暖和如三月、  
○中略

越州侯(松平慶光)、御殿山へ陣屋相構、崩山築塘或造間道、其前置大礮、  
大礮多我藩所獻上也

福井藩ノ警  
備

〔津山藩日記〕

○子爵松平  
康春所藏本

正月廿三日、晴、  
○中略

一海防御掛り御月番松平和泉守殿方御呼出ニ付、御留守居吉田權平罷出候處、左之御書付壹通、御用人堀口忠兵衛を以御渡、請取來、

袖ニ

御名

御名

異國船渡來ニ付、兼る相達置候場所、先壹番手之人數差出候様可被致候、

安政元年正月二十三日

一番手ヲ出  
スベシ



畢る左之御口達御書取、右同人を以御渡、

別紙之通、人數差出候様相達候得共、不事立様穩便之取計可申事、

但、御承知之御使者、直之權平相勤之、

一右之趣、

(松平慶倫世子)少將様之御部屋御小納戸を以申上之、略、中

大目付達

一大目付之役壹人之、左之通及演達之、

異國船渡來之付、兼る相達置候場所之、先壹番手人數差出可申候、尤不事立様穩便之

取計可申旨、松平和泉守殿之御留守居御呼出、御書付を以被蒙 仰候、此段及演達候、

一御先備出張之頭分以上并支配頭等之、於御用所、出張可致旨御達可有之處、差懸り候儀

之付、御達有之振合之相心得候様、大目付之夫々之相達之、

一右之付、出張之面々并役懸り之面々、明朝六半時揃之旨被 仰出、大目付之夫々之相達

之、

一於御用所、御用番御家老代御年寄渡部勘解由左之通申渡之、大目付出席、

御用番家老代達

秋元 乾左衛門

出張太儀、跡々之處致安心、萬端法令之通相守、士大將安藤主税介指圖、毛頭違背致間

敷候、

但、御目見被 仰付、御直達之處、深更急々致出立候付、本文之通、

一於大目付役所、左之通申達之、

勘定奉行之

柴田貴與増儀、御出張迄、作事目付介被 仰付候、此段可被申渡之候、

小泉 鎧一郎

引受尾上庄九郎儀、出張中御馬役代心得可相勤候、此段可被申渡之候、

廿四日、曇風、

一御先備御人數被差出候付、御用所始役懸り出張之面々等、六半時揃出仕、

一御名代

少將様於御座之間、士大將安藤主税介 御目見被 仰付、御定之御疊目之罷出平伏、是

へ之 御意、御書付三通御渡、奉畏候旨、御請申上之、其節、御手熨斗被下之、頂戴退座、

夫より御吸物・御取肴等、御小納戸御小姓之差上之、猶又主税介御定之御疊目之罷出、

御盃被下之、頂戴、平伏、退座、

但、御直達御書付之、別紙之有之、

士大將御目見



安政元年正月二十三日

二二二

藩主出座

右線出シ大目付、

一御客座敷二之間ハ三之間に懸ケ、大番頭代初メ御徒格迄、出張之面々線出置、少將様御出座被遊、御熨斗三方御小姓差上之、大番頭代渡邊甚介被爲 召、書付之通可相心得旨、御意御書付御渡、御手熨斗被下之、元之席に退座、御請申上之、夫々一統に書付之通可相心得旨、御意御書付大目付ハ大番頭代に相渡之候上、御手熨斗三方御小姓持出シ、御敷居外壹疊目之下モ之差置之、物頭以下大役人迄壹人充進ミ出、頂戴之、御書院御廊下通りを引、但銘々御手熨斗可被下處、手間取候付、本文之通、右相濟、御使番兒玉龍左衛門、尙又二之間下之御敷居内壹疊目に罷出平伏、是へと御意、上之御敷居外三疊目に罷出平伏、書付之通可相心得旨、御意御書付大目付相渡之、退座、右相濟 御入座被遊候、

但、御直達御書付を、別紙に有之、

一大番頭代始メ御徒格迄一同退座懸ケ、大廊下西向に群居、士大將安藤主税介面謁有之、大目付出席、

一御人數、五半時、無滯線出相成、備押を別紙に有之候、

一右に付、御國表に刺込飛脚差立之、

人數線出

但、大阪迄六日、夫より二日限、

〔美作〕  
津山 松平家譜

○東京帝國大學所藏本

十一世齊民 ナリタミ 正四位 小名銀之助

○中略

嘉永七年甲寅正月十六日、異船渡來ニ付、高輪邊内海警衛ノ命ヲ受ク、

同年同月廿三日、兼テ警衛ノ場所に、人數線出ス可キノ命ヲ受ケ、翌廿四日、人數差出ス、

〔江戸町名主上申書〕

○帝國圖書館所藏本  
徳川幕府書類外國事件書所載

○正月二十四日町奉行へ

〔美紙〕  
上

- 一騎馬七騎程
- 一鐵炮貳拾八挺程
- 一長柄拾五本程
- 一幟八九本程
- 一歩行士四拾壹人程
- 一馬印壹本程
- 一貝壹ツ

津山藩出張  
人數

安政元年正月二十三日

二二三



安政元年正月二十三日

二二四

福井藩出張  
人數

一長持拾棹程

一大筒大小三挺程

凡人數五百人程

右に、松平三河守様御固御人數、今廿四日朝五半時頃、鍛冶橋御門を御堀端通南鍋町尾張

町通通行の御座候、

一騎馬貳拾騎程

一幟拾五本程

一馬印拾本程

一高張挑灯百本餘

一大筒拾貳挺程

一長柄貳拾本程

凡人數八百人程

右に、松平越前守様御固御人數、昨夜九時頃出門、通町通通行の御座候、

右御兩家共、行粧猩々緋幟、其外吹貫等之馬印有之、美々敷相見、尤越前守様御人數を、深

夜に付、不存の多候得共、大筒車通候場所を、兩側町屋の地響強候間、此響を町家之者

家前の出見請候者とも、晝之行列の候ハ、美事に可有之杯を申、更に人氣の相障候義無御座候、此段奉申上候、以上、

寅正月廿四日

名主共

○津山藩ノ鐵砲江戸表取寄セニ關スル史料ヲ次ニ收ム。

〔諸用留〕

○内閣記録課所藏本

〔朱書〕  
鐵砲證文裏印之

正月廿三日

儀申聞候書付

松平越後守

鐵砲證文

拙者此度國許より江戸屋敷に、別紙之通鐵砲、船を相廻候様致し度存候、依之相模國浦賀御番所無相違罷通候様、御裏印被成可被下候、則證文致進達候、以上、

正月廿三日

松平越後守

〔朱書〕  
「廿三日、左之證文共出、翌日、持出、」

まごき  
松平越後守鐵砲證文

覺

一鐵砲

百三挺

安政元年正月二十三日

二二五



安政元年正月二十三日

二二六

内

兩玉筒

百挺

十挺入十箱

壹貫目玉銃筒

壹挺

巢中四尺臺

三百目鐵張筒

壹挺

紋付巢中四尺壹寸臺共

二百目玉鐵張筒

壹挺

巢中四尺壹寸

鑄形

壹

貳百目

右、江戸表に相備置申度候付、此度從美作國津山、江戸屋敷迄相廻申候、浦賀御關所無滯罷通候様御裏印被成可被下候、以上、

嘉永七甲寅年正月廿三日

松平越後守印判

六 人 殿

〔朱書〕 廿三日出、翌日持出、裏書令調印持歸、同夕宅に留守居呼、

裏書之鐵炮百三挺、浦賀關所無相違可被相通候、斷そ本文有之候、以上、

〔内藤信親(老中)〕 紀伊印

〔久世廣周(老中)〕 大和印

〔松平忠盛(老中)〕 伊賀印

〔松平重全(老中)〕 和泉印

〔牧野忠雅(老中)〕 備前印

〔河部正弘(老中)〕 伊勢印

〔氏家(浦賀奉行)〕 戸田伊豆守殿

〔致義(浦賀奉行)〕 伊澤美作守殿

露國艦隊旗艦「ハルラダ」Harada 外三艘「オリウーツア」Oruyta・「メンション」Mentshon・「ボクトク」Boktoks 前後シテ那覇ニ至ル。十一日ヨリ二十日ニ至ル。是日、「オリウーツア」以下三艘、同地ヲ去リ、「マニラ」ニ向フ。明日、「ハルラダ」同ジク「マニラ」ニ向フ。

〔琉球〕 鹿兒島藩土川上式部等届書

○公爵島津忠重所藏本  
齊藤公史料所藏

安政元年正月二十三日

二二七



安政元年正月二十三日

二二八

○正月二十六日在國家老島津豐後等へ

魯國軍艦渡來ノ報

正月十一日、魯西亞國船二艘渡來、同十三日、同國船一艘、同廿日、同火輪船一艘、都合四艘致來着、地方官本船へ相招、直貫其外交易等之儀申掛候付、相斷候處、夫形ニテ聞濟、右船々都テ致出帆候形行、左ニ申上候、

露船二艘來ル

一正月十一日九半時分、北ノ方五六里程沖へ異國船二艘相見合、漸々那霸之様乘來、七半時分、那霸川口ヨリ拾町程ノ處へ碇ヲ卸候付、本國來着之次第相尋候爲、久米村大夫通事差遣候へ、波立強傳聞難漕行扣居候處、異國船ヨリ傳聞一艘泊臺瀨へ漕來、二艘之乘頭致陸下候付、通事係長堂里子親雲上差遣、本國來着之次第相尋候處、官話へ存不申、言語然々通兼候へ、魯西亞國之船長崎ヨリ四艘一同出帆、今日迄三日目相成、今二艘ハ明日方來着有之筈ト申ニ付、來着之次第相尋候處、何ソ用事ハ無之ト爲申段、大抵相通候由、尤天久寺止宿之小官モ、臺瀨ニテ逢、右乘頭兩人共天久寺へ列行、暫咄イタシ、本船へ罷歸候由、

一同十二日、波立少靜ニ相成候付、糧食品モタセ久米村通事差遣候處、中振之船ハ着場近有之、右船へノ大夫通夏ハ乘付候處、小官船端へ出迎、乘頭住居坐へ招入、茶菓子等馳走

有之、左候テ地方官ヨリノ帖并品々相渡候處、受取謝禮申述、唐人乗合不申、官話存候者無之、何ノ尋モ不相成由、小振ノ船ハ着場遠、波立強候テ難漕行、罷歸候處、右船傳聞ヨリ小官ノ者泊へ參居候付、右へ成行相達、帖并贈品乘頭へ相届吳候様頼入候へ、請合無之候付、波立靜相成候ハ重テ差遣候様可仕旨、申出候、

一同日七半時分、魯西亞船小官五人水主二人若狹町道罷通候付、板良敷里子親雲上差遣、爲致對談候處、嘆咭唎言葉存居候付、學校所へ招入、茶菓子差出、何國之何方ヨリ參候哉、乘組人數等モ相尋候處、魯西亞國之船四艘長崎へ罷渡、一ヶ月程滯船候テ、來着之二艘ハ同所ヨリ出帆、昨日迄三日目相成、中振ノ船ハ乘組人數百五拾四人、小振ノ船ハ乘組人數三十人ノ段爲申由、

一今二艘ノ成行相尋候處、二艘共兩三日後爰元へ渡來可致、一艘ハ大振ノ船、提督乘船ニテ四百二十人乗組、壹艘ハ火輪船三拾人乗組ノ段申候付、何ノ爲來着候哉ト相尋候處、諸國方々致見分候爲ト申候付、滯船ノ程合相尋候處、提督渡來之上相定可申候へ、大抵一七日程滯船ニテ、直ニ呂宋國へ罷渡候旨爲申由、

一唐人乗合候哉ト相尋候處、四艘共唐人乗合無之旨申候付、官話存候者罷在候哉ト相尋候處、提督乘船ハ官話能存居候者兩人罷在候ト爲申由、

安政元年正月二十三日

二二九

更ニ二艘來著スベシ



一右魯西亞人ヨリ亞國船渡來爲有之哉ト申候付、渡來爲有之段相達候處、何艘渡來、其内火輪船モ爲有之哉、且如何方致出帆候哉ト申候付、八艘渡來、内三艘ハ火輪船、日本へ罷渡候ト相答候由、

一右旁相濟、伯德令逗留ノ處ヲ見セ候様申ニ付、案内者相付差通、護國寺へ參、嘆人相逢候由、

一同十三日、波立靜ニ相成候ニ付、去ル十一日來着小振ノ異國船來着之次第相尋候爲、大夫通事共へ張紙通之品々爲持差遣候處、小官船端へ出迎、乘頭住居坐へ招入、乘頭致面會候處、言語文字不相通、地方官ヨリノ帖并右之品差贈候處、致受納、官人へ謝禮申上吳候様ニトノ趣、手様等ヲ以申述、酒菓子漬物等差出候由、尤唐人并官話存知之者不罷居由、

本文ニ付、張紙、

- 一豚 二疋
- 一羊 二疋
- 一玉子 百甲
- 一唐芋 八十斤

- 一庭鳥 拾羽
- 一大根 五拾斤

旗艦ニハル  
ラダニ來著

一去ル十三日七時分、那霸ヨリ北ノ方五六里程沖へ異國船(ハルラダ)一艘相見得、漸々那霸ノ様乘來、入相時分、那霸ヨリ一里五六合程ノ處へ致沖掛、同十六日朝、碇ヲ起、去ル十一日來着之魯西亞船近乘來、碇ヲ卸候付、本國并來着ノ次第篤ト相尋候爲、久米村大夫并通事掛附添、張紙之品々爲持差遣候處、小官船端へ出迎、嘆咭喇言語相通候付、地方官使トシテ大參候段相達候處、乘頭水師將軍致陸下候ト申ニ付、地方官ヨリ品々被差贈候間、御方請取被罷歸候ハ其段致轉達吳候様申、目錄并ニ品々相渡候處、無程水師將軍并ニ通事官召列罷歸候ニ付、右小官ヨリ早速將軍へ相達候處、通事官ヲ以テ地方官へ宜謝禮申入吳候様官話ヲ以挨拶有之候付、大夫ヨリ國祖母卒去、朦中ニテ冠服不致段申斷候處、早速將軍へ相通、笑止之儀ト悔申述候由、左候テ本國來着之次第、乘組人數等相尋候處、魯西亞國ノ船、人數四百二十人乘組、長崎ヨリ出帆、爰元沖掛ノ日迄五日目相成候、尤此地へ何ソ用事ハ無之、跡ヨリ火輪船一艘致渡來答ニテ、來着次第四艘共一同可致出帆ト申、將軍ヨリ通夏ヲ以テ、明日・明後日ノ間、地方官被差越、船見分有之候様致轉達可吳ト申ニ付、朦中ニテ難差越趣申達候處、平服ニテ相濟候間必被差越候様申ニ付、其段ハ可相



達候へ、決テ可致遠慮ト申候處、將軍ハ引取、船主ヨリ住居坐へ招入、船主通夏官相伴候テ、茶菓子酒等馳走爲有之由、左候テ長崎滯船之日數相尋候處、四ヶ月致滯船候ト申ニ付、用事ハ相濟候哉、且爰元ヨリ何方へ參候哉ト相尋候處、彼地ニテノ用事ハ相濟候、海島致方々事ニテ何方へトハ不相定ト爲申由、

本文ニ付、張紙、

- 一 豚 二疋
- 一 羊 二疋
- 一 玉子 百甲
- 一 唐芋 八拾斤
- 一 庭鳥 拾羽
- 一 大根 五拾斤

一通事官ヨリ入用之品々船元へ持來、賣渡候様申ニ付、當地金銀等通用無之、船元へ持越、賣渡候者無之候間、入用之品々書付ヲ以可申出、左候ハ構官へ申達、相調丈ハ辨可申段相達候處、所望申出候上、代金不請取候ハ將軍落着不致段申ニ付、他國之船汐掛等之節入用品成丈致辨達候儀、此地之作法ニテ代銀等請取候ニ不及候へ、將軍納得不被致候

ハ可請取ト申候處、左候ハ書付ヲ以所望可申出ト爲申由、

代銀等請取候儀ハ元ヨリ不宜儀ニ候へ、琉國如キ小國ニテ代銀請取不申、諸國之船數度來候ニ只遣シ候テハ、尙不屈之様ニ可相成候作法ニテ、代銀ハモラヒ不申候へハ、闕乏之品無心不致候へハ、□丈候杯申候ハ、是モ一ツノ難義トナルヘシ、

一同日七半時分、魯西亞國船小官一人、紙包一小樽一水主へ爲持、若狹町學校所へ參候付、板良敷里子親雲上逢セ候處、通事官ニテ、先刻地方官ヨリ品々被差贈候付、地方官相逢謝禮申述、張紙之品々遣候様ニト水師將軍被差遣候ト申、差遣候付、受取、地方官へ爲相逢形ヲ以謝禮申述、地方官直ニ逢度候へ、臆中ニテ其儀不相調候間、宜申入吳候様相逢、茶菓子等致馳走候由、

本文ニ付、張紙、

- 一 羅紗 一切
- 一 糸布 一切
- 一 酒入小樽

一板良敷ヨリ御方等日本へ爲罷渡由、何ノ用事ニテ候哉ト相尋候處、日本國ハ隣國之事ニテ何方へ渡海ノ節モ便宜所故、和好ノ誼ヲ結度參候段申ニ付、左候ハ願通免許相成候哉



ト相尋候處、汐掛之節ハ用水薪等所望相達候段返文有之候ト申ニ付、是ヨリ先ハ毎年罷渡候哉ト相尋候處、商賣之爲罷渡候ハ無之候ヘ、方々渡海之船々汐掛等ハ毎年可有之ト爲申由、

一何ノ爲此地ヘ罷渡候哉ト相尋候處、何ノ用事モ無之、火輪船一艘ハ前條日本ヨリノ返文中國ヘ持渡、魯西亞官人ヘ相届サセ候付、右船追テ爰元ヘ渡來可有之、致來着候ハ、一同可致出帆ト申ニ付、爰元ヨリ何方ヘ罷渡候哉ト相尋候處、何方トハ不相定候ヘ、四五ケ月後ニハ日本ヘモ罷渡候ト爲申由、

一通事官ヨリ亞船渡來之成行相尋候付、亞國提督日本江戸表ヘ罷渡候迎、當地ニテ船々待合、長々滯船ニ及、不自由之小邦、所望品辨達ニ付テハ至テ及難義居候段相達爲申由、

一同人ヨリ入用之品々爲致直賣候様申ニ付、當地之儀、金銀通用無之、平日穀物雜貨等ヲ以テ相達申事ニテ、直賣之儀何共不相調、夫故以前ヨリ他國船汐掛等之節、直買之儀申出有之候ヘ、不相調入用品ハ、構官ヘ申付、所望相達申事候間、御方等ニモ入用之品々ハ書付可被差出、左候ハ、構官ヘ申達、相調丈ハ可達ト申入候處、金銀通用無之候テモ唐ヘ持渡候ヘハ取遣可相成ト申、不合點之躰相見得候由、左候テ明日・明後日之間地方官船元ヘ差越、船被致見分候様將軍被申候間、此旨致轉達<sup>傳方</sup>吳候様申ニ付、國喪ニ付テハ

將軍等ヘ逢候儀別テ遠慮之事候間、此儀取止給候様將軍ヘ申入吳度相達候處、用事迎ハ無之、專嘶等被致候様ニトノ事候ヘハ、平服ニテ差越候様申ニ付、其通ニテモ可致遠慮候ヘ、適爲被差遣事ニテ地方官ヘ可相達ト爲申由、

大艦・大砲ヲ見セテ琉人ヲオビヤカシ候事、策也、

一同十八日、水師將軍ヨリ地方官ヘ贈物之禮謝并ニ地方官船元ヘ差越候斷爲可申入、大夫通事船元ヘ差遣候處、通事官致陸下、官話存知之者不罷居候ニ付、夫形罷歸候處、折節右通事官ハ魯西亞船所望之品々代銀請取候様ニトノ用事ニ付、若狹町學校所ヘ參居候付、右大夫通事差遣、通事官ヘ爲逢、地方官使トシテ船元ヘ差越候處、御方被致上陸候付罷歸候ト申、贈物ノ謝禮申述、左候テ地方官船見分ニ參候様將軍被申候段承知被存候ヘ共、當時膝中殊ニ不快ニ罷在、難差越候間、御方ヨリ將軍ヘ宜轉達被給候様申達候處、將軍ヘ可相達、尤船元ヘ被差越カタク候ハ可相濟ト申、學校所立出、方々歩行之砌、水師將軍等ヘ逢、一同護國寺ヘ入、逗留<sup>（メツテルヘイム）</sup>喚人咄イタシ、入相時分泊之様罷歸候砌、通吏官ニハ猶又右學校所ヘ入、板良敷逢度申出候付、差遣候處、地方官船元ヘ難被差越候ハ首里ヘ罷登、官人可相逢ト申ニ付、御方等何ソ用事無之、船見分イタシ候様ニト被申候付、膝中故致遠慮候、是非不被逢候テ不叶事候ハ押テ逢可被申ト相達候處、肝要ノ用事ニテハ無之候



へトモ、適此地罷渡官人へ逢不申候テハ水師將軍不安ニ被存候ト申ニ付、左候ハ、其段  
地方官へ可相達ト申入候處、通事官夜五時分泊之様爲罷歸由、最初ハ大夫ヨリノ斷筋聞  
濟居候處、右様致反復候儀、如何様伯德令ヨリ將軍等へ何角爲申入形ニ被察候旨、琉役  
申出候、

皆計策計リニ爲ス事也、

「ゲオスト  
一ク」上海  
ヨリ來著

一同廿日九半時分、那霸ヨリ此ノ方三里程沖（分オスト一ク）へ火輪船一艘相見、漸々那霸ノ様乘來、八時  
分ニハ先達テ來着之魯西亞船着場近碇ヲ卸候處、波立強此方傳間難漕寄、大夫通事差遣  
候儀不罷成候處、七時分、右船乗合之小官三人并以前來着船ノ小官一人同道若狹町學校  
所へ參リ、板良敷モ同所へ參候砌ニテ、本國來着之次第相尋候處、魯西亞國火輪船、人數  
三十人乗組上海ヨリ出帆、今日迄五日目相成候段申出、尤先達テヨリ來着可致ト爲申船  
ニテ候由、

一同廿一日、昨日來着火輪船へ、成行承候爲、張紙之品々爲持、久米村大夫通事差遣候處、  
船主并小官兩人船端ニ出迎、直ニ船主住居坐へ招入、酒馳走有之候處、官話存知之者乘  
合無之、何分尋方不罷成候付、地方官ヨリ品々被差贈候段手様ヲ以相達、帖并目錄相渡  
候處、悦入候躰ニテ品物相受取、禮謝有之、左候テ罷歸候砌、大夫へ竹筒一小玉鏡一與候

付、相斷候へトモ押々爲相渡由、

本文ニ付、張紙、

- 一豚 二疋
- 一羊 二疋
- 一玉子 百甲
- 一唐芋 八拾斤
- 一庭鳥 拾羽
- 一大根 五拾斤

一魯西亞國將軍乗船へ參、船見分イタシ候様申立、國喪之譯ヲ以相斷置候へル、強テ申立  
候付、同廿二日、地方官久米村大夫并板良敷召列、船元へ差越候處、通事官船端へ出迎、  
致音樂、直ニ將軍住居坐へ招入、初テ面會之挨拶、茶菓子酒馳走有之、地方官ヨリ松風二  
箱差贈候處、將軍ヨリ通事官ヲ以、此國人民淳厚ニ有之、致感心居候、國主安否尋仕筈候  
へル、國喪之由ニテ取止候ト申ニ付、地方官ヨリモ早速將軍へ致見舞筈候へル、國喪ニ  
テ致失禮候ト申斷候由、

一通事官ヨリ所望ノ品々書付差出候向ニテハ隙取相成候間、爲致直買候様申ニ付、當地之

地方官等旗  
艦ヲ訪フ



儀金銀通用無之、其上中國之様店迎モ無之、市立之交易モ女人トモ僅計ツ、持出、互ニ雜貨ヲ以品替イタシ候振合ニテ、他國人直買等ハ不相調、以前ヨリ暎亞之其外他國船來着之節、入用ノ品ハ書付、差出次第、所望相達來事ニテ、御方等所望品モ書付次第諸在郷ヨリ取寄、乍漸、致辨達候段申達候處、金銀通用無之候ハ唐錢ヲ以可買入ト申ニ付、唐錢ハ少シツ、致取遣事候ヘル、右通市立之交易女人共ノ致方、殊僅少ツ、時刻ヲ以持出候躰ニテ、旁以御方等入用品直買ハ不相調段申入候處、於何方モ入用品ハ致直買事候處、此地ハ兎角我々相嫌候旨申ニ付、左様之儀ニテハ無之、前條ニモ申候通、直買之儀ハ何分ニモ不相調候間、何卒取止給度爲申入由、

和交ノ申出ヲ斷ル

一同人ヨリ中國日本ハ致和交居候間、此國モ交友イタシ候様申ニ付、當邦不自由ノ所ニテ大國トノ相待向不相調、貴國船汐掛等之節ハ不自由ナガラモ所望品相調丈ハ可相辨候間、交友之儀ハ取止吳候様申入候處、此國ハ中國日本之中ニ相當候ニ付、何レ汐掛等不致ハ不叶ト申、不合點ノ躰ニテ爲有之由、左候テ日本國主ヨリノ給物ト申、刀大小二振取出見セ候由、尤錦之袋ニ入、紅ノ房ヲ掛、白木箱ニ入付爲有之由、計策ナリ、是ハ川路左衛門尉ヨリ贈候刀也、魯夷僞リ候事、

琉球ノ所屬

一琉球ハ日本ノ屬國ニテ彼國進貢イタシ候段承候、彌々其通候哉ト申ニ付、當地中國屏藩

琉球ノ辨解ハ不策ナリ

ノ段ハ御方等モ北京ニテ能ク被見分候通ニテ、日本隨順之儀ニテハ毛頭無之段相達候處、此儀慥ニ承候ト申ニ付、(島嶼ヲ指シ)度佳喇島人ハ年々渡來有之事ニテ、夫ヲ聞違ヒタルニテ有之ト爲相達由、琉球人申拂後患ニ可相成、如何トナレハ西國此節兵亂故、西國へ行云々申候トモ、琉球ノ事迄ニハ及聞敷、萬一勝手ニ致シ候様ノ挨拶有之候ハ、琉國ハ如何トモ可爲様有之間敷、琉人申拂ハ不策也、

一此地手鹽廣焚出候様相見得候間、猶又廣焚出サセ、彼國商船差遣候ハ致買賣候様申ニ付、當地之儀全躰鹽濱狹、其上人民モ少、鹽手廣焚出候義不相調、國中用分モ乍漸相辨候躰ニテ、彼國へ商賣等ハ何共不相調段相達候處、左候ハ、米麥ニテ致商賣候様申ニ付、當地田畠少、米麥手廣致作候儀不相成、官人以下諸士有財之方計乍漸米麥等給、多分ハ唐芋ヲ以飯料取續候事ニテ、是以商賣不相調段爲相達由、

一長崎ヨリ罷歸候砌、此地北方へ火山有之、彼所へ汐掛致上陸候處、人之容貌此地之人何ソ不相替、領内ニテ候哉申ニ付、島島之事ニテ可有之ト彌其通之段相達候處、彼地出產之硫磺爰元へ致受納候哉ト相尋候付、彌受納イタシ中國へノ貢物相辨候段相達候處、彼地ニテ茶ナト馳走ニ預リ候付、品物等相贈度候ヘル、其後風波荒立又以上陸不被成及失禮候間、品物差出候ハ、地方官ニテ彼所へ相届吳候様申ニ付、當地屬島へ他國船汐掛等



之節、相待向入念候様申渡置候、茶遣候迎別段品物被差贈候テハ痛入候間、取止度申入候處、馳走ハ僅ノ事ニ候ヘ、心入之處ハ致感心居候、何レ品物不差贈候事不相叶由爲申由、

露人ノ不法  
行爲取締ヲ  
求ム

一魯西亞人ニハ心底宜候處、通行之砌、此地之人多分差遣候間、無其儀様被申付度申ニ付、其通可申付段相達、尤モ二三日以前、市上ニテ女人手ヲ取り令驚怖候由候間、無其儀様取締被申付度申入候處、此儀戲迄之事ト申ニ付、此地之女人ハ堅貞節ヲ守リ、他人ニ手ヲ被取候ヘハ別テ恥辱相成事候間、取締被申付度相達候處、込入候躰ニテ、屹ト其取扱可致候間、人差ヲ以申聞候様申ニ付、人躰ハ不相知候付、以後之取締嚴重被申付度、且多人數上陸作毛被取候仕方モ有之候間、是又取締被申渡度申入候處、甚不届之仕形ト將軍怒立、代銀何程ニテ候哉可致辨償ト申ニ付、代銀受取候心底ニテハ無之候間、以後此儀無之様取締被申渡度爲相達由、右旁相濟罷歸候砌モ、禮儀最前之通ニテ音樂等有之、地方官ヘ左ノ通り相贈候付、斷モ難成受納イタシ候由、

若代銀受取候ハ、此上女ヲ犯シテ何イタシ候テモ、代銀ニテ爲濟候計策成ヘシ、代銀々々ト申、皆大道ヲ不知商人也、

一 鋪鉚調燧鋸 一 一ツ

一 玉盃大小 一 十二

一 鯉節 一 一箱

此鯉節ハ長崎ニテ贈候品ナルヘシ、此方ニテ用候様ノ事無之故、不用ナレハ琉人相應ト思ヒ、遣シタル事ナルヘシ、

一同廿三日四時分、魯西亞國布林七門是個府船并瓦夕多克船出帆、猶又八時分ニハ呵里不茶船皆共、辰巳之風ニテ未申之間ヘ乗行、七時分ヨリハ帆影不相見得段、琉役届申出候、

本文ニ付、

一 呵里不茶

右中振之船

一 布林七門是個府

右小振之船

一把瓦大

右水師將軍乘船

一 瓦夕多克

右火輪船

露船ノ船名

三艘出帆



安政元年正月二十三日

二四二

右之通船名承得候旨、琉役届申出候間、爲御見合、張紙ヲ以申上候、

一同廿三日、地方官ヨリ魯西亞船通事官へ扇子二本煙草入二組キセル入付、船元へ差贈候處、受取謝禮申述、左候テ地方官へ返禮ト申、酒入玉瓶六差出候付、不及其儀段申達候へ、  
凡、強テ爲相渡由、

一同日、魯西亞船、昨日、地方官差越候砌將軍ヨリ品々差贈候返禮トシテ、久米村大夫通事差遣シ、左ノ品々相贈候處、小官出迎、船主住居坐へ招入、茶菓子差出候付、地方官ヨリ昨日之御禮トシテ品々被相贈候段相達候處、將軍ハ致陸下候ト申ニ付、左候ハ、御方受取、將軍被罷歸候ハ轉達給候様相達候處、其通可致ト申、目錄并品々受取爲申由、

- 一扇 子 拾本
  - 一白 麻 五束
  - 一辨 當 一通
  - 一硯 フタ 一組
  - 一煙 草 七斤
  - 一上燒茶家 二
- 但ツル相添

- 一同丁子風呂 一
- 一同花入 一
- 一織部形煙草入十組幾世ル入付
- 一燒 酎 一壺廿五盃入
- 一眞岡布 二反

一同日七半時分、水師將軍通事官并小官一人水主一人召列、若狹町學校所へ參、所望代銀算面イタシ候間、板良敷里子親雲上逢度申出、差遣候處、昨日地方官船元へ差越候謝禮申述、且是迄所望品代銀算面ヲ以相渡候テ、明日ハ可致出帆候間、所望申出置候品々モ早相達吳候様ニト申、罷歸候砌、地方官へ見舞可致候間、彼宅見セ候様申ニ付、地方官用向ハ此所ニテ取扱候作法、殊大人等自分宅ニテ相逢候儀、禮儀ニモ不相叶候間、是非相逢不申候テ不相叶儀モ候ハ、地方官此所へ差越面會イタスベクト申入候處、見舞迄ノ事ニテ不及其儀ト申、日入時分本船之様罷歸候由、

一同廿四日五時分、把瓦大船（バルラダ）、午未之風ニテ申酉ノ間へ向、致出帆候段届申出候、右之通魯西亞船追々致渡來、通事官等若狹町學校所へ參、長崎滯船中之事共相咄シ、且地方官船見分トシテ本船へ招度トノ儀申出候付、乘頭致面會候テハ何角申立候儀難計、

安政元年正月二十三日

二四三



先ハ差扣候方可然吟味イタシ、折柄當分國喪ノ事ニテ右之譯申述相斷候處、猶又通事官  
 學校所へ參、地方官船元へ難差越候ハ首里へ登、官人へ可逢ト申ニ付、船見分迄ト承候  
 付、朦中故致遠慮候段相達候處、肝要ノ用事ニテハ無之、適此地へ渡來、官人へ不致面會  
 候テハ將軍不安ニ存候ト申ニ付、船元へ差越候方可然吟味ノ上、去ル十九日、地方官久  
 米村大夫通事召列、船元へ差越候處、手厚會釋ニテ、將軍通事官ヲ以直買其外交易之儀  
 前條通段々申掛候付、不相調譯ヲ以相斷候處、強テ申立候儀モ無御坐、夫形聞濟候半、其  
 後何タル沙汰モ無之、乍然中國日本致和交候間、此國モ致交友候様、尤當地ハ中國日本  
 之中ニ相當、何レ沙掛等可致ト申置候テハ追々渡來モ難計儀、就テハ繁々沙掛等不致様  
 是迄之形狀申述、文書ヲ以斷置候方可然哉ニモ候ヘ、屹ト申立候向ニモ不相見得、交  
 友一件旁則席相斷置候ニ付、文書ヲ以斷申入候テハ、却テ事六ヶ敷可申立モ難計、此以  
 後來着重テ申立候義モ有之候ハ、其節文書ヲ以相斷候方可然致吟味候旨、琉役申出、  
 其通可取計段相達置申候、右ニ就テハ是迄亞國船數艘滯船、引續魯西亞船渡來之處、格  
 別難題申立候儀モ無之、右船々都テ致出帆、先ハ仕合之事ニ御坐候、尤爰元渡來之節、鳥  
 島へ致沙掛候段申出候ヘ、未彼方ヨリ届ケ無御坐候付、追テ成行申上候様可仕旨、琉  
 役申出候、船繪圖六枚着場圖一枚相添へ、御役々へモ申談、此段御内用ヲ以御届申上越

候、以上、

但、滯船中步行又ハ所望物之儀ハ、別紙ヲ以申上候、

寅正月廿六日

郷田 仲兵衛  
(用)  
 川上 式部  
(久)

島津 豊後殿  
(久實、家老)  
 川上 筑後殿  
(久對、家老)  
 島津 石見殿  
(久浮、家老)  
 末川 近江殿  
(久平、家老)  
 新納 駿河殿  
(久仰、家老)  
 樺山 伊織殿  
(久成、家老)

魯國軍艦渡來ノ報

長崎ヨリ渡來之魯西亞船、且亞國金山渡海之英國商船乘組ヨリ板良敷里子親雲上應答  
 序、時々承候形行、左ニ申上候、

露船通事官ノ談

一此度日本之用事ハ、魯西亞之儀日本隣國之事故互ニ朋友之義ヲ結候一件ニテ、其通相濟、

安政元年正月二十三日

二四五



以來何方ニテモ渡海沙掛之節々、薪水其外不自由ノ品ハ可與トノ國老中連名之文書被相渡、尤長崎滞在申何角丁寧之事ニテ筒井氏川路氏兩人江戸ヨリ被罷下、互ニ往來宴會品物致贈節、塗器糸類煙草入等被相贈、出帆前ニハ米モ被差贈候ト爲申由、

一亞國申合長崎へ致渡海候哉ト相尋候處、申合候事ニテハ無之、魯西亞國モ江戸表へハ渡海深願ニテ、其譯ハ蝦夷地近邊「サルレン」ヨリハ、長崎へ參ルヨリ江戸之方近方辨利ヨロシク候付、此以後江戸へ可差越心組ニ候ト爲申由、

一亞國江戸ニテ合戰有無問試候處、合戰ハ不仕ト申ニ付、万々一及合戰候ハ、亞國へ加勢可致哉ト相尋候處、加勢ハ不致ト申故、左候へハ日本へ加勢可致哉ト申入候處、魯西亞國ハ此事構候儀ニ無之候間、何方へモ加勢ハ不致ト爲申由、

墨夷ヨリ魯夷ノ方智惠モ計策モ勝レリ、魯夷ニテ墨夷ヲバ手先ニ仕ヘルナリ、  
一魯西亞船此地へ渡來ハ亞國提督面會之爲ニ候哉ト相尋候處、其儀ニハ無之、火輪船一艘長崎ヨリ直ニ中國へ差渡候付、右待合之爲ト爲申由、

右魯西亞船通事官ヨリ應答序、承候形行御坐候、  
一魯西亞國火輪船正月十六日上海出帆、當分彼地大合戰ニテ毎日大砲之音轟、且上海之道臺ト申官名之者計策ヲ以地中ヲ穿、穴ヨリ進、火藥ヲ以城墻ヲ崩シ、太平王手之兵卒四

墨夷ヨリ魯夷智惠アリ

「ヴオスト」乗員ノ談

百人程及死亡候へハ、勝負不相分、乍然太平王手之兵強、其外所々合戰有之、廣東福建等ハ無事之段爲申由、

一直隸省之内天津府モ太平王手ヨリ攻取、最早北京近相進候ト爲申由、  
但、天津府ヨリ北京ハ日本里數貳拾四里位之由、

一亞國サラトカ船此地へ又々參候様承居候、其通之様子ニ候哉ト相尋候處、右ハ正月七日上海ヨリ直ニ江戸へ差越候ト爲申由、

一同國ペリムス船ハ上海へ亞館有之候ニ付、合戰中爲守護、上海へ居殘候ト爲申由、  
右魯西亞國火輪船、上海ヨリ去ル十九日來着、乘組之小官咄之由、

一太平王ハ耶蘇宗ニテハ無之哉之旨相尋候處、中々耶蘇宗ナトへ入候者ニテ此度之事可調哉ト笑、彌耶蘇宗ニテハ無之旨爲申由、

耶蘇宗ヨリモ又上手ノ害ヲナセリ、耶蘇宗ノ奥意ヲ早ク爲セルナリ、  
一太平王ハ今以南京城へ罷在、諸方へハ手先之大將差遣、合戰之段爲申由、

一太平王ト小刀會ハ近比不和相成モ絶之様夷人共ヨリ承候、其通ニテ候哉ト相尋候處、左様ニテハ無之、矢張同盟ニテ候ト爲申由、  
一廣東評判ニ、此度亞國願日本御免無之候へハ、合戰ニ可致ト專ラ取沙汰之由申ニ付、合

英船搭乗ノ廣東人ノ咄



戰相成候ハ、軍船諸(方殿方)ヨリ追々參リ候哉ト相尋候處、其儀ハ不承ト爲申由、但、英國・佛國加勢差出候評判相尋候處、亞國迄之筋ニ取沙汰有之候ト爲申由是ハ皆同穴ニ候ヘ、万一先手ニ仕フ墨夷不手際之節、暎佛モ同シク申出候ヘハ後計策ニ不相成候故云々申候テ、墨夷不手際之節ハ暎佛ヲ又手先ニイタシ、品ヲカヘテ持込ム事ト被察、

右十二月廿一日、香港出帆之英國商船乗合、廣東生唐人咄之由、尤右唐人ハ亞國金山へ毎年商賣ニ差越候ト爲申由、

右ハ別紙御届之外、時々應答序承候事ニテ、魯西亞船此地へ參候儀ハ火輪船待合之爲ト爲申由候ヘ、態々其爲此地へ沙掛イタシ候儀疑敷、和交一件申立候儀モ有之、其段ハ別紙申上越候通ニテ斷申入候處、夫成ニテ致出帆、(原註小國故格別ノ利益ト不存故、先其マ、ニ有タルモノカ)其外時々之咄成ニテ實否難計御坐候ヘ、形行申上越候、尤亞國提督乗船通事官ヨリ、遐邇貫珍貳冊差贈候處、唐國兵亂又ハ魯西亞國都兒格合戰之次第モ相見得申候付、是又爲御見合相添、御役々へモ申談、此段御内用ヲ以申上越候、以上、

寅正月廿六日

郷田 仲兵衛

川上 式部

島津豊後殿

川上筑後殿

島津石見殿

末川近江殿

新納駿河殿

樺山伊織殿

○露艦「ヴオストロク」ノ那覇著及「バルラダ」ノ同地退去ヲ本書ハ正月二十日及二十四日トナス。次ニ掲グル島津齊彬届書ハ之ヲ二十一日及二十三日トナス。「フレガード艦」ニ據レバ、「バルラダ」ノ那覇出帆ハ二十四日(西曆一八五四年二月九日)ナリ。依テ本書ノ記事ニ從ヒ、島津齊彬届書ノ日時ヲ訂正ス。

〔鹿兒島藩主島津齊彬届書〕

○内閣記録所藏本 有所不爲齊藤録所載

○三月五日老中へ

○上(正月十日)同日、右同所へ異國船二艘卸碇候付、役々差越、前條同様相尋候處、魯西亞國之船四艘、一同長崎ヨリ出帆、一艘ハ人數百五十人乗組、一艘ハ三十人乗組、一艘ハ近々可致來着、用事ハ無之旨申出候、同十三日、右同所へ異國船一艘卸碇候ニ付、役々差越同様相尋候處、魯西亞國之船、人數四百二十人乗組、長崎ヨリ出帆來着之旨申出候、同廿一日、右同所エ異

安政元年正月二十三日

二四九

露船四艘前  
後シテ那覇  
港ニ來ル



安政元年正月二十三日

二五〇

國船一艘卸碇候ニ付、役々差越、是又同様相尋候處、魯西亞國火輪船(ウオストリ)、人數三十人乗組、上海ヨリ出帆致來着候段申出候付、取締向嚴重申付置候處、同廿三日、四艘共致出帆候略(三)、  
(陣營日記)

○正月六日條(第二編ノ一ノ一八四頁)ニ本書ノ全文ヲ收ム。

〔仲村親雲上書翰〕

○侯爵尙裕所藏本  
異國日記所載

○正月十七日久手堅親雲上等宛

昨日八ツ時分、天久寺止宿之亞小官一人、俄傳間々俄船差越、日入時分罷歸、且同水主人前後ニ寺立出、泊那霸步行、護國寺迄入、夜入時分迄罷歸候由、關番人并通事役々首尾申出有之、御假屋方迄御届申上候、此段致問合候、以上、

正月十七日

仲村親雲上

久手堅親雲上

川平親雲上

〔露使日本來航記〕

○ゴンチャロフ著、フレガート艦バルラダ號「高須治助抄譯」  
東京帝國大學所藏本

琉球紀事(千八百五十四年一月卅一日ヨリ二月九日ニ至ル)、那霸港(ナバキヤム)、又(ナバ)、

那霸港ノ景趣

那霸港ノ景趣ハ概シテ沈鬱黯澹ナリ、然レドモ珊瑚礁ノ周圍ハ奇崑林立怪石錯峙シ、盤渦

鬪激シテ雪花ヲ吐クガ如シ、稍ヤ壯快ヲ覺ユ、(ゴンチャロフ)余輩ノ那霸港ニ入ルヤ、會マ風起リテ一時猛烈ナリシガ、漸クニシテ止ミケレバ余輩始メテ入港スルヲ得タリ、時未ダ味爽ニ屬シヌ、余ハ乃チ臥床ヲ出デ、甲板ニ上リ、眺矚ヲ試ミケレバ海岸ハ長崎ニ比視スルニ較ヤ低キガ如シ、岸ノ一方ニ名ノ知レザル水草薺々トシテ生ヒ立テリ、其ノ下ハ則チ珊瑚礁ナリトス、邱陵ハ茸々タル草莽之ヲ蒙絡セリ、而シテ其ノ巔嶺ニハ柏樹林ヲ成シテ枝葉繁茂セリ、又他ノ一方ニ翼然トシテ遙カニ岸邊ヨリ峭拔セル珊瑚礁アリケルガ、茲ニ翼然トシテ特起セル新教徒(プロテスタント)ノ寺觀アリ、屋宇天矯トシテ其ノ上ニ横ハレリ、之ト並ビテ稠密ナル草莽灌木ノ裡ニ礫々トシテ相攢簇セル一大石塊アリ、高サ百餘丈ニシテ奇狀一ナラズ、或ハ橢圓ニシテ象ノ蹲ルガ若ク、或ハ半圓ニシテ虎ノ踞ルガ若ク、或ハ長圓ニシテ空洞ノ若ク、遠クヨリ之ヲ望メバ謬リ認メテ一大厦トナス、其ノ巨大ナル此クノ如シ、蓋シ墓碣ノ群團セルモノナリ、港口ノ右岸ハ較ヤ隆起シテ海ニ突出ス、邱陵アリ、沙汀アリ、礁石亂立シ、多ク迅流奔馳セリ、盤渦潮上リテ隠ル、崑アリ、潮退キテ露ハル、石アリ、要スルニ那霸港ハ處トシテ暗礁汀洲ノ散布セザルナシ、余輩僅カニビーチ氏ノ調製セル海圖ヲ所持スレドモ、獨リ憾ラクバ其ノ完全ナルモノヲ有セズ、余輩ハヤガテ一時間程ヲ經タル後端艇ヨリ身ヲ躍ラシテ岸ニ上リ、岸上ノ密林ヲ穿テ、草莽ヲ披ラキツ、歩ヲ進メケレバ、我ガ北

安政元年正月二十三日

二五一



地ニ於テ往々見ル如ク、松樹ノ稀ニ生ヒ立ツアリ、其ノ餘ノ樹木ハ余輩未ダ名ヲ知ラズ、斯クテ余輩ハ密林ノ下ヲ跋涉シ、草莽ノ間ヲ徘徊シケレバ、花香馥郁トシテ鼻ヲ撲チ、濕氣淒涼トシテ衣ヲ襲ヘルコト、亦猶ホジャワ島シンガポール港ニ在ルガ如シ、余輩試ミニ粘土質ノ汀洲ヲ通過シタレバ、洞穴ノ傍ニ海水ヨリ鹽ヲ汲ミ取ルノ器具アリシ、進ンデ列樹道ニ出ヅ、

「バヂーリ・ガルリ」氏ノ琉球渡來

是ヨリ先キ(文化十三丙子、千八百十六年)バヂーリ・ガルリ氏ガ始メテ琉球群嶋ニ來航シタルコトアリテ、其ノ旅行記ノ附録ニ一小地圖アリケルガ、今余輩ガ實際ニ見ル所ノ地形ト比スルニ、琉球ハ更ニ面目ヲ改メズシテ亦當時ト同一ノ觀ヲナス、

琉球ハ外國人之ヲ呼ビ做シテ「リユーチウー」ト稱シ、琉球ノ住民ハ自ラ之ヲ「デウー、チユー」ト云フ、此地ノ住民ハ身ノ長ケ矮寢ニシテ、牛馬モ亦短小ナリ、而ルニ鷄ハ雌雄兩ツナガラ軀幹巨大ナリ、樹木ハ概子喬大ニシテ幾多ノ溪流林間ニ濼廻シ、其ノ聲潺湲琮々トシテ秋雨ノ屋根ニ濺グガ如シ、住民ノ氣質一般ニ淳朴ニシテ野菜ヲ常食トナス、○中略

是ニ於テ町奉行ハ其ノ翌日余輩ヲ訪問セント欲セシガ、大雨驟カニ至リタレバ果サマリシ、終ニ二月ノ七日、(正月二十二日)町奉行ハ書記官支那語通事及ヒ扈從ヲ隨ヘテ我ガ「フレガット」船ニ訪過セリ、町奉行ハ軀幹長大ナルガ頭髮白ヲ載キ、鼻梁赤色ヲ帶ヒ、一見其ノ威儀ナキ

地方官ノ來訪

ヲ認ム、聲音暖レテ言語詳晰ナラズ、書記官ハ狀貌魁梧、鬚髯美シク、體幹剛壯ニシテ年齢五十前後ナリ、他ノ隨從者ハ亦皆壯快ナリシ、町奉行ノ頭上ニハ金筭ヲ以テ髻髮ニ插ミ、書記官ハ銀簪ヲ以テ之ヲ穿チ、他ノ隨從者ハ銅製ノ筭簪ヲ插メリ、町奉行ノ後ロニハ十六歳バカリノ扈從一人坐シテ、間斷ナク煙管ニ煙草ヲ填メテ之ヲ町奉行ニ侑メ、奉行ハ又度々菓子ヲ取テ扈從ニ與フ、町奉行ハ我カ水師提督ニ「トルト」(フウチヤイナシ)ノ名二個ヲ贈呈シタレバ、余輩ハ巨大ナル湯瓶硝子器ヲ以テ奉行ニ餽クレリ、尤モ是ヨリ先キニ奉行ヨリ蔬菜ヲ贈ラレタレバ、余輩ハ羅紗ヲ贈リテ之ニ酬ヒタリキ、又余輩ハ日本ニ滯在中、日本ヨリ贈與セラレタル物品並ニ日本ヨリ我カ水師提督ニ特ニ贈リタル刀ヲ觀示シタリ、此際余輩ハ町奉行ニ問フテ曰ク、貴下ニモ亦刀劍アリヤ、奉行答ヘテ曰ク、無シ、余輩則チ又問フテ、然ラバ貴下ニハ如何ナル武器アリヤト言ヒ出デケレバ、奉行ハ扇子ヲ出シテ示シツ、此レ吾ガ武器ナリト應ヘタリ、

余輩ハ町奉行ガ嚮キニ余輩ニ糧食、特ニ魚類牡牛ヲ給與シ吳レタルノ好意ヲ謝シ、且ツ將來ノ歸航ニ必須ナル物品ヲ給セラレンコトヲ請ヘリ、既ニシテ而シテ余輩ハ奉行ニ謂テ曰ク、貴嶋ニハ鹽ヲ産スルコト頗ル多キガ如シ、故ニ若シ我カ露國船ノ貴嶋ニ寄航スル場合ニハ、貴嶋ノ產鹽ハ勿論、稻米其他ノ物品ヲ以テ我ト交易ヲ營ムコトヲ得ベキ乎ト問ヒ



安政元年正月二十三日

二五四

始メケレバ、町奉行ハ容ヲ改メ、辭ヲ正フシ、聲ニ應シテ答ヘテ曰ク、否ナ々々、此等ノ物品ハ唯リ我が住民ノ爲ニ産スルモノニシテ、稻米ハ我輩ノ如キ上流社會ノ食ニ供シ、菘菘其他ノ蔬菜ハ下流ノ庶民之ヲ食ト爲スナリト、余輩又町奉行ニ謂テ曰ク、貴嶋ノ住民ハ余輩ノ過グルヲ見ル時ハ輒チ逃散避匿スルコトナルガ、余輩固ヨリ何等ノ妨害ヲ爲スモノニアラザレハ、今後這般ノ舉動之レナキヤウ貴下ヨリ住民ニ諭サレタシ、町奉行曰ク、彼等住民ノ逃散避匿スルハ他ニアラズ、歐羅人ノ此ニ來ルコト太々罕ニシテ、且ツ在嶋米國人ノ如キハ、時ニ或ハ我が住民ノ田圃ヨリ菘菘類ヲ妄ニ摘取掠奪スルヲ以テナリ、此般ノ粗暴者若シ陸續トシテ輩出スル時ハ、我が住民ノ田圃ハ終ニ空虛無一物トナルベシ、此レ我が住民ノ歐州人ヲ嫌忌スル所以ナリト、是ニ於テ余輩ハ奉行ニ謂テ曰ク、余輩ハ敢テ田圃ヲ蹂躪シ、人家ニ侵入スルガ如キコト勿ルベシト言ヒ出デケレバ、隨從ノ支那語通事ハ奉行ノ旨ヲ承ケ、語ヲ續ケテ曰ク、然ラバ尙ホ茲ニ一ノ請アリ、他ナシ、婦女ヲ掠メ、或ハ褻贖スベカラザルコトナリ、曾テ一個ノ米人ハ我が一婦人ノ手ヲ執リテ出奔セリ、斯クノ如キ淫猥ナルコトハ、我が社會ニ於テハ嚴密ナル制裁アリト、余輩ハ此ノ言ヲ聞キ、琉球人ガ淫奔ヲ戒ムルノ習俗ハ、猶ホ太古淳朴ノ遺風ナリト竊ニ歎稱セリ、米國水夫カ強姦セシヲ云ナラン、○中略

地方官提督ノ自宅往訪ヲ拒ム

我が水師提督ハ復タ那覇ノ町奉行ヲ訪問セント欲セシカバ、町奉行ハ余輩ヲ自宅ニ延見スルヲ欲セズシテ、直チニ政廳ニ於テ面會スベシト言ヒ出デ、且ツ云フ、外國人ト一私ノ交通ヲ爲スコトハ我ニ在リテハ嚴禁ナリト、余ハ今琉球紀事ヲ結ブニ當リ、讀者ニ一片ノ微意ヲ陳メント欲ス、他ナシ、此ノ紀事ハ余輩ガ本嶋ニ於テ目擊實踐シタル眼前ノ風物ヲ寫出セルニ過ギズ、若シ夫レ深ク本嶋ノ地形・民俗・物産・沿革等重大ナル事實ヲ詳悉セント欲セバ、ピーチ、ベリチル氏ノ本嶋紀行ヲ閱讀セヨ、(終)

〔フレガート艦バルラダ號〕○オンチャロ全集所收

ФРЕГАТЪ ПАЛЛАДА. ОЧЕРКИ ПУТЕШЕСТВІЯ ВЪ ЯВУХЪ ТОМАХЪ.

ТОМЪ II. СТР. 284-270. ПОЛНОЕ СОВРАНИЕ СОЧИНЕНІЙ

И. А. ГОНЧАРОВА ВЪ 12 ТОМАХЪ.

ЛИКЕЙСКІЕ ОСТРОВА.

*Portrait of Nam-Kian, ex 31-vo anuara no 9-e fevralia 1854 v.*

Д все время поминалъ вась, мой задумчивый артистъ: войдешь, бывало, ут-рокъ къ вать въ мастерскую, откроешь вась гдѣ-нибудь за рамками, передеь полот-нокъ, подкрадешься такъ, что въ, углубившись въ вашу творческую мечту, не замѣ-

安政元年正月二十三日

二五五



тите, и смотришь, какъ вы набрасываете очеркъ, сначала легкій, блѣдный, туманный; все мѣшается въ однуль свѣтъ: деревья съ водой, земля съ небомъ... Придешь потомъ черезъ нѣсколько дней—и эти блѣдныя очерки обратились уже въ опредѣлительныя образы: берега дышатъ жизнью, все ярко и ясно...

Въ такихъ блѣдныхъ очертаніяхъ, какъ ваши эскизы, явились сначала мнѣ Ликейскіе острова. Масса земли, не то синей, не то сѣрой, мѣстами лежала горбатою кучкой, мѣстами пологой тянулась по горизонту. Насъ отдѣлили отъ берега пять-шесть миль и гряда коралловыхъ рифовъ. Объ эту каменную стѣну яростно билъ вода, и бурныя или разстигались далеко гладкой пеленой, или высоко вскакивали и облаками снѣжной пыли сыпались въ стороны. Издали казалось, что изъ воды выривались клубы густого бѣлаго дыма; а кругомъ синее-пресинее море, въ которое съ рифовъ потоками катился жемчугъ да изумруды. Береть темень; но вѣдутъ лучъ падалъ на какой-нибудь клочокъ, покрытый свѣжимъ виходомъ, и какъ ярко зеленѣлъ этотъ клочокъ!

Послѣдніе два дня дулъ крѣпкій, штормовой вѣтеръ; наконецъ онъ утихъ и позволилъ намъ зайти за рифы, на рейдъ. Это было сдѣлано съ разсвѣтомъ; я спалъ и ничего не видалъ. Я вышелъ на палубу, и береть представился мнѣ вѣдутъ, какъ уже оконченная, полная картина, прихотливо-изрѣзанный красивыми линиями, со всѣми своими очаровательными подробностями, въ краскахъ, въ блескѣ.

Береть, особенно въ сравненіи съ нагасакскимъ, казался низменнымъ; но за то какъ онъ разнообразенъ! Натѣво отъ насъ выдающаяся въ море часть вывѣтрилась. Тамъ росла скудная трава, изъ-за которой, какъ лысина сквозь рѣдкіе волосы, проглядывали кораллы, посрѣдѣнціе отъ непогоды, кое-гдѣ кусты, да глинистыя отмели. Прямо передъ нами, берега далеко отступили отъ мели назадъ, представляя коллекцію пейзажей, одинъ другого лучше. Низменная часть тонетъ въ густыхъ садахъ; холмы покрыты нивами, точно красивыми разноцвѣтными заплатами; вершины холмовъ увѣнчаны кедрами, которые стоятъ дружными кучками, съ своими горизонтальными вѣтвями.

Что за зелень тамъ, въ этой кучѣ деревьевъ? чѣмъ засѣяны поля? каковы дома?.. Скорѣй, скорѣй, на береть! Двѣ коралловыя сѣри скалы выступаютъ далеко изъ береговъ и висятъ надъ водой; на вершинѣ одной изъ нихъ видна кровля протесантской церкви, а рядомъ съ ней тяжело застели въ густой травѣ и кустахъ каменные массивныя глыбы разныхъ формъ, цилиндры, полукруги, овалы: издалика примешь ихъ за зданія—такъ велики они. Это памятники кладбища. Далѣе направо береть опять немного выдается къ морю и идетъ то холмами, то танется неизменной, песчаной отмелью, заливаемой приливомъ. Вплоть почти подъ самымъ берегомъ идетъ гряда рифовъ, черезъ которые скачутъ бурныя; мѣстами высунились изъ воды камни; во время отлива они видны, а въ приливъ прячутся.



Вообще весь рейдъ устьянъ мелями и рифами. Бѣда входитъ на него безъ хорошихъ карты! а тутъ одна только карта и есть порядочная— Бичи. Черезъ часть катеръ нашъ, чуть-чуть задръвая килемъ за каменья Обмельшей при огнивь присяни, уперся въ глинистый берегъ. Мы выскочили изъ шлюпки и очутились—въ саду не въ саду, и не въ дѣсу, а въ какомъ-то паркѣ, подъ непрочинаемымъ сводомъ, отчасти знакомыхъ и отчасти незнакомыхъ деревьяевъ и кустовъ. Изъ нашихъ свѣр-ныхъ знакомцевъ было тутъ немного сосенъ, а то все новое, у насъ не виданное. Меня опять поразилъ, какъ на Дѣвъ и въ Сингапурѣ, сильный, приторный и приятный запахъ тропическихъ дѣсовъ, охватила теплая влажность ароматическихъ испареній. Мимо дѣса краснаго дерева и другихъ, которые толпой жмутся къ самому берегу, какъ-будто хотятъ столкнуть друга друга въ воду, пошли мы по тропинкѣ къ другому большому дѣсу, или саду, манившему издали къ себѣ. Мы прошли по глинистой отмели, мимо ямъ и врытнхъ туда сосудовъ, для добыванія изъ морской воды соли. За отмелью началась аллея, или улица— какъ хотите, маленкой деревушки Бо-Тунгъ.

Возьмите путешествіе Вазиліа Галли (въ 1816 г.): онъ въ числѣ первыхъ посѣтилъ Ликейскіе острова, и взгляните на приложенную къ книгѣ картину, видъ острова: это именно тотъ, гдѣ мы пристали. Вы посмѣетесь надъ этимъ сказочнымъ ландшафтомъ, надъ огромными деревьями, сплывшимися въ дѣсу хижинами, красивымъ

ручейкомъ. Все это покажется похожимъ на пейзажи— съ деревьями изъ моху, съ стеклинной водой и съ бумажными людьми. Но когда увидите оригиналь, тогда посмѣетесь только безсилію картинки сдѣлать что-нибудь похожее на дѣйствительность.

Что это такое «Ликейскіе острова», или, какъ писали у насъ въ старихъ географіяхъ «Ліеу-Кіеу», или какъ иностранцы называютъ ихъ «Лю-чу» (Loo-Choo), а по выговору жителей «Лу-чу»? Развертываете того же Галли, думаете прочесть путешествіе и читаете— и диллію. Да это идиллія, брошенная среди безконечныхъ водъ Тихаго океана. Слушайте генеръ сказку: дерево къ дереву, листокъ къ листку такъ и прибраны, не спутаны, не смѣшаны въ неумышленномъ безпорядкѣ, какъ обыкновенно дѣлаетъ природа. Все будто размѣрено, расчищено и красиво разставлено, какъ на декорациіи, или на картинахъ Ваго. Читаете, что люди, лошади, быки—здѣсь карлики, а куры и пѣтухи—великаны; деревья колоссальныя, а между ними чуть-чуть журчатъ серебряныя нити ручейковъ, да приятно шумить театральныя каскады. Люди добродѣтельны, питаются овощами и ничего между собою, кроме учтивостей, не говорятъ: иностранцы ничего, кроме дружбы, ласкъ да земныхъ поклоновъ, отъ нихъ добиться не могутъ. Живутъ они патриархально, толпой выходятъ навстрѣчу путешественникамъ, берутъ за руки, ведутъ въ дома и съ земными поклонами ставятъ передъ ними избытки своихъ полей и садовъ... Что это? гдѣ



мы? Среди деревнихъ пастушескихъ народовъ, въ золотомъ вѣкѣ? Ужели Теокрытъ въ самомъ дѣлѣ правъ?

.....

Дорогой адмиралъ послалъ сказать начальнику города, что онъ желаетъ видѣть его у себя и удивляется, что тотъ не хочетъ показаться. Велѣно прибавить, что мы пойдемъ сами въ замокъ видѣть ихъ дворъ. Это очень подѣйствовало. Чиновникъ, или секретарь начальника, отвѣчалъ: что если мы имѣемъ сказать что-нибудь важное, такъ онъ, пожалуй, и прійдетъ.

—Очень важное,—сказали ему.

Онъ хотѣлъ быть на другой день, но шелъ противной дождь. Наконецъ вчера, 7-го февраля, начальникъ пріѣхалъ на фрегатъ, съ секретаремъ, помощникомъ, переводчикомъ китайскаго языка и маленькою свитою. Онъ былъ высокій, сѣдой старикъ, не совсѣмъ патриархальной наружности, съ краснымъ носомъ, и вообще—увя, процай и дигля!—съ слѣдами сильнаго невожатраня на лицѣ, съ изломанными чертами, синими и красными жлжками на носу и около. Онъ говорилъ силнымъ и пискливымъ голосомъ. Товарищъ его, высокій и здоровый мужчина, дѣтъ 50-ти, съ черной, длинной и жидкой, начинающейся съ подбородка, какъ у всѣхъ у нихъ, бородой. Прочіе, такъ себѣ, всѣ здоровой наружности, свѣжіе. У губернатора почти на головѣ былъ проткнутъ золотой, у помощника и переводчика серебряной,

а у прочихъ мѣдной шпилькой. За первымъ сидѣлъ мальчикъ дѣтъ шестнадцати и безпрестанно набивалъ ему трубку, а тотъ давалъ ему подачки: бискивиты, наливку, которою его почивали. Онъ подарилъ адмиралу два какіе-то торта, а ему дали большой самоваръ, стеклянной посуды, и еще прежде послали сукна на халатъ, за присланную живность и зеленъ. Показывали ему японскіе подарки и, мѣжду прочимъ, подаренную адмиралу саблю.

—А у васъ есть сабли?—спросили его.

—Нѣтъ.

—Какое же у васъ оружіе?

—А вотъ,—отвѣчалъ онъ, показывая вѣеръ.

Его поблагодарили за доставку провизіи, и особенно быковъ и рыбы, и просили доставлять—разумѣется, за деньги—впередъ русскимъ судамъ все, что понадобится. Между прочимъ ему сказано, что такъ какъ на островѣ добывается соль, то можетъ случиться, что суда будутъ заходить за нею, за рисомъ, или другими предметами: такъ нельзя ли завести торговлю?

—Нѣтъ, нѣтъ! у насъ производился всего этого только для самихъ себя,—съ живостью отвѣчалъ онъ:—и то рисъ ѣдимъ мы, старшіе, а низшій классъ питается бобами и другими овощами.

—Да еще мы просимъ сказать жителямъ,—продолжали мы:—чтобъ они не



бѣгали отъ насъ: мы имъ ничего не сдѣлаемъ.

—Они бѣгаютъ отого, что европейцы рѣдко заходятъ сюда, и наши не при-  
выкли видѣть ихъ. Притомъ американцы, бывши здѣсь, брали иногда съ собой  
горохъ, бобы: если бы одинъ или нѣсколько человекъ сдѣлали это, такъ оно бы  
ничего, а когда всѣ...

Мы увѣрили его, что наши не дотронутся ни до чего.

—Да, сдѣлайте милость,—продолжалъ переводчикъ:—насчетъ женщинъ тоже...  
Одинъ американецъ взялъ нашу женщину за руку; у насъ такъ строго на этотъ  
счетъ, что мужъ, пожалуй, и разведется съ нею. Отъ этого онъ и бѣгаютъ отъ  
чужихъ.

Какова нравственность: за руку нельзя взять! Въ золотой вѣкъ, особенно въ  
библейскія времена и при Гомерѣ, было на этотъ счетъ проще!

.....

Адмиралъ хотѣлъ отгадать визитъ напакінскому губернатору, но онъ у себя при-  
нять не могъ, а далъ знать, что приметъ, если угодно, въ *нравительственномъ домѣ*.  
Онъ отговаривался тѣмъ, что у нихъ частныя сношенія съ иностранцами запрещены.  
Этимъ же объясняется, почему не хотѣлъ принять насъ и напасацкій губернаторъ  
иначе, какъ въ казенномъ домѣ.

Но довольно Ликейскихъ острововъ и о Ликейскихъ островахъ, довольно и для

меня, и для васъ! Если захотите знать подробнѣе долгого, широкого мѣста, прост-  
ранство, число острововъ, не поглядите сами взглянуть на карту, а о нравахъ жите-  
лей, объ обычаяхъ, о произведеніяхъ, объ исторіи—прочтите у Бичи, у Бельера.  
Помните условіе: я пишу только письма къ вамъ о томъ, что вижу самъ и что  
переживаю изо дня въ день.

Сегодня мы ушли, и вотъ качаемся теперь въ Тихомъ океанѣ; но если бы и ос-  
тались здѣсь, едва ли бы я собрался на берегъ. Одна природа, да животная, хотя и  
своеобразная жизнь, не наполнить человека, не поглотить вниманія: остается  
большая пустота. Для того даже, чтобъ испытывать глубже новое, непохожее ни на  
что свое, нужно, чтобъ тутъ же рядомъ, для сравненія, была параллель другой  
развитой жизни.

是夜、兇賊藤吉外四人 兼吉・松之助  
金藏・勝五郎 傳馬町 江ノ 獄ヲ脱走ス。町奉行、令シテ

嚴ニ搜捕セシム。 尋テ、兼吉・松之  
助二人就縛ス。

〔江戸町觸〕

○東京帝國大學所藏本  
高麗環雜記時風錄所載

内密町觸

脱獄者人相

風體書

京都出生入墨

安政元年正月二十三日

二六三



藤吉

一歳三拾壹 一顔角張候方

一中丈小太り 一色淺黒ク

一眼□キ方 一鼻低キ俗ニ曰鼻

一月代濃キ方 一兩腕京都入墨貳本有之

一兩腕ニ龍之朱入彫物脊中ニ女達摩之筋彫有之

一月代延居候得共剃候も難計

一逃去候節之衣類木綿茶嶋裕著居下ニ紺藍之千筋裕半天著一黒無地三尺帶

二本松無宿

物(金後シテ難死ニ)吉

一歳貳拾四 一中丈方低キ方

一やせ形チ 一顔丸ク色黒キ方

一左之足内黒ほ一ニ桃之彫もの有之

一月代前同斷 一衣類木綿茶見甚之裕黒淺黄棒嶋三尺帶

丹後村無宿入墨

兼吉

一歳貳拾九 一中丈中肉方太り候方

一丸顔色淺黒ク 一左之腕ニ龍之彫物有之入墨灸ニる焼消居

一月代前同斷 一衣類紺茶堅嶋布子紺白手綱染三尺帶

川下村無宿堺入墨

松之助

一歳貳拾貳 一中丈中肉

一丸顔色白キ方 一月代前同斷

一衣類木綿藍見甚綿入下ニ紺白瀧嶋之單物黒白堅ト多三尺帶

本石町無宿

金藏

一歳三拾貳 一丈高キ方小太り

一顔大キク色淺黒ク 一上前齒壹枚掛有之

一月代前同斷 一衣類木綿紺白小サキおむん嶋入紺淺黄堅嶋三尺帶

矢場村無宿



一歳三拾五 一中丈やセ形チ  
 一顔細面テ色黒ク三ツ口あぢと有之  
 一衣類木綿紺茶堅嶋袴下ニ白地ニ紺荒キ堅嶋單物紺無地小倉帯 但貳重廻り  
 右之を共、昨廿三日、牢屋敷ヲ逃去候ニ付、人宿・日雇宿・旅人宿・百姓宿等ニ可立廻難  
 計、其外共格別入念密々取調、似寄之者有之候ハ、早速南御廻り方小林藤太郎様ニ可申  
 立候、尤有無返答、來ル廿八日迄無間違可被申聞候、且返答後益精々心付、人相似寄之者有  
 之候ハ、早々可申出候事、

正月廿四日

名主

〔庵原函齋風聞書〕

○公傳徳川園所藏本  
海防論及風説所載

江戸内百何十軒へ押入盜賊以と一候、大坂無宿七人之を、一昨廿六日夜逃去候由、右始  
 末之風聞ハ、夜中牢屋同心兩人ニ在、牢内ニ參り、錠を明ケ、何ウ取調候趣、七人之を共  
 申合、不意ニ明ケ置候口ヲ踊出、傍ニ有之足ヲ以二人の同心を打居へ、筒の戸の明き  
 候方ヲ飛出一、塀を越逐電以と一候趣、依之右二人の同心ニ御疑懸り、御吟味ニ相成、昨廿  
 七日楊屋入ニ相成申候、前書七人の惡徒召捕候ニハ、殊外骨折候事之由、然るニ取逃一候

脱獄ニ關スル風聞

似寄リノ者アラバ申告スベシ

次第、言語同斷之次第と申風聞ニ御座候、

〔片葉雜記〕

○色川三中雜記  
色川俊次郎所藏本

二月朔日、庚午、晴、○中略

京都無宿藤吉といへる盜賊同類六人ヲ窮冬召捕ル、此をのハ去年六月アメリカ渡來之節、  
 同類百七十餘人申合を、透を見て江戸市中ニ亂入せんとせりか、其巧あらはれて、嚴敷御  
 せんさくの處、當冬の頃江戸中殊之外物忽をりしあり、を市の中ニ入て賊ともとりあさへ  
 ねとらんふハ、打ころ一切殺せとも不苦旨御觸有ふ、十二月ふありて、右六人召捕ま  
 り一後ハ、去バ市の中も靜なるニ付、然上ハ元之通ニ可心得よ、御ふれ直も有りと、兼  
 る聞及處ニ、扱右六人の大惡徒のもの牢に入られ、兼てたくみとふや、或時大なる  
 喧嘩を初め、中々一方ならぬ事にて牢番の役人とり鎮えんとて入一時を見合セ、六人な  
 らよけ出る處ヲ、壹人ハとりあさへとれと、五人ハとく逃去てあと方と云り、傳聞の  
 たうひハ有へなれと、逃去一ハ實事あり、或人のいふふハ、も一此ものともとりあさへ  
 てハ、果ハ夷船ニ乗うつりあん、尤可患事ありと、

十九日、曇、夜又雪白くある、七ツ時雨ニある、○中略



安政元年正月二十三日

二六八

藤吉就縛ノ  
風聞

夕刻古戸村<sup>フルド</sup> 下總相馬郡 阿會兵馬來る、地頭ハ河口文助として二千七百石のよし、江戸へ年内方詰め切ふて、此間ニ水戸へ參り歸りあけとて、此夕當所泊りとして立寄語言、京都無宿藤吉といふ惡徒、正月十七日歟追去り一處、二月五日ニ本郷ふて被召捕、仍之江戸市中所々へ御觸有之、まか一右之もの等ふも不拘、其後捕あさへあね候惡徒ハ、切殺一打殺一候るも不苦旨ニ被仰出有りと、是か追去り一ハ、引迫一のもの引出まとして牢明とる時ふ、六人同意して牢のそめ板をづりて打て出て逃去り一とそ、先ふ聞一より此説實あるべし、仍之牢同心八人、入牢といふ、五人ハ遠嶋歟といふ、

○囚獄石出帶刀組同心等ノ處罰及藤吉同類二人ノ就縛ニ關スル史料ヲ次ニ收ム。

〔高麗環雜記時風錄〕○東京帝國大學所藏本

正月廿四日、

封廻狀

囚獄  
石出帶刀組同心

菊澤安太郎  
齋藤萬平  
水谷周三郎

一通尋之上  
揚屋に遣ス

一通尋之上  
召連人に預遣ス

同所辻番人

杉山政三郎  
上原鐵次郎  
橋本鎌左衛門  
木村一之助  
伊藤勝五郎  
伊藤金三郎  
藤田源藏  
井上新五郎  
野澤良助  
金子長次郎

一通尋之上  
差返ス

右、於池田播磨守御役宅、一色邦之助立會、播磨守申渡之、

五月廿八日、○中略

安政元年正月二十三日

二六九



安政元年正月二十三日

尋之上  
入牢

右、於池田播磨守御役宅、一色邦之助立合、播磨守申渡之、

六月廿七日、○中  
略

牢拔囚人之内

川下村無宿  
岩吉事  
増入墨

松

之助  
寅二十三

丹後村無宿  
入墨

兼

三吉  
三

二七〇

右、於池田播磨守御役宅、一色邦之助立合、播磨守申渡之、

吟味中  
改入牢

八月廿一日、

封廻狀

囚獄  
石出帶刀組同心

菊澤安太郎  
齋藤万平

中追放

江戸拂

押込

番人召放

安政元年正月二十三日

水谷周三郎  
杉山政三郎  
上原鐵次郎  
橋本鎌左衛門  
牢屋下男  
清吉

同心銚役見習  
木村一之助  
牢屋前辻番人  
伊東勝五郎  
伊東金三郎  
藤田源藏  
井上新五郎  
野澤良助  
金子長次郎  
同組同心

二七一



安政元年正月二十三日

二七二

急度叱り置

叱り置

河原林甚四郎	甲斐捨藏	渡邊恒次郎	橋本直吉	宮内龜太郎	木村作十郎	三上啓三郎	細田万之助	齋藤富藏	建部重次郎	鍵田貞助	林忠藏	甲斐重左衛門	同増録役	古川金之助
七十一	二十八	二十五	四十五	二十四	三十九	五十一	三十三	二十四	三十四	五十五	三十一	六十七		三十七

右、於池田播磨守御役宅、一色邦之助立合、播磨守申渡之、

〔町奉行申渡〕

○東京帝國大學所藏本  
高麗環雜記時風錄所載

○八月二十一日 囚獄石 出帶刀 組同心菊澤安太郎等へ

八月廿一日、前書封廻狀之有之申渡、

石出帶刀組同心

菊澤安太郎  
齋藤万平  
水谷周三郎  
杉山政三郎  
上原鐵次郎  
橋本鎌(右)右衛門

其方共儀、當正月廿三日夜、泊當番之る、囚人共之内八五郎を牢内々差出候節、引續藤吉  
 其外之者共立出候ハ、捕押可申處、右之を共及亂妨、安太郎外貳人志疵請、闇夜之儀之  
 る彼是手延之相成候迎、藤吉外四人を取逃、殊之惣吉儀逃後也、牢天井之隠居候をも不  
 存罷在候段、牢番人之詮無之、其上万平儀盜役一之助、右出牢之者之名前書并牢戸前之

安政元年正月二十三日

二七三



鑑先の請取候共、開閉之鑑役立合候仕來之候處、清吉儀挑灯を燈一來候迎、一之助も參り候儀も心得違致し、牢戸前を明ケ、右躰牢拔有之仕儀之至候段、旁一同不届之付、中追放、

牢屋下男

清

吉

其方儀、當正月廿三日夜、囚人共之内八五郎を、万平外壹人儀、牢内々差出候砌、引續藤吉其外之者共牢内立出候節、挑灯を持附添居候上之、捕押可申處、右之者共及亂妨、挑灯被打毀、闇夜之相成、彼是手延之相成候迎、取逃し候段、右始末不届之付、江戸拂、

石出帶刀組同心  
鑑役見習並

木村 一之助

其方儀、當正月廿三日夜、當番泊之節、八五郎儀溜預相成候ハ、仕來之通牢戸前之鑑持參致し、當番所之見張罷在、出牢可爲致處、右名前書并牢戸前之鑑とも先之万平之相渡候上、清吉之挑灯爲燈乍差遣、外御用向有之候迎、手間取候故、最早其方も參り候儀も万平儀心得違致し、牢戸前を明ケ、藤吉其外之者共逃去候仕儀之至り、其上跡取締之儀入念心付候旨之雖申、惣吉儀逃後也、牢天井之隠也居候をも不存罷在候段、畢竟勤方等閑故之儀、右始末旁不埒之付、押込、

牢屋敷辻番人

伊藤 勝五郎

伊藤 金三郎

藤田 源藏

井上新五郎

野澤 良助

金子 長次郎

其方共儀、當正月廿三日夜、辻番所之相詰罷在候砌、藤吉其外之もの共牢内立出、裏門續土塀等に乗越逃去候を、闇夜之儀之候迎、不存罷在候段、番人之詮無之、一同不埒之付、番人取放、

石出帶刀組同心

河原林 甚四郎

甲斐 捨藏

渡邊 恒次郎

橋本 直吉



宮内 龜太郎  
 本村 作十郎  
 三上 啓三郎  
 細田 万之助  
 齋藤 留藏  
 建部 重次郎  
 鍵田 貞助  
 林 忠藏  
 甲斐 重左衛門

其方共儀、當正月廿三日夜、藤吉其外之者共牢内逃去候後、其節之牢番人と追々ニ交代以  
 め、當番所ニ相詰、牢内等見張り罷在、時々見廻心付候旨と雖申、惣吉儀逃後也、牢天井  
 ニ隠居候を不存罷在、同廿五日曉、同人義首縊候節ニ至り見出候段、畢竟見廻り心付方  
 等閑故之儀、右始末一同不念ニ付、急度叱り、

同組同心  
 増録役

古川 金之助

其方儀、當正月廿三日夜、藤吉其外之者とも牢内逃去候後、當番こる牢内等晝夜折々見廻  
 心付候旨と雖申、惣吉義逃後レ、牢天井ニ隠居、首縊候迄不存罷在候段、畢竟見廻心付方等  
 閑故之義、右始末不念ニ付、叱り、

○舊臘、藤吉等捕縛ニ關スル町觸ヲ、參考ノタメ、次ニ收ム。

〔江戸町觸〕

○帝國圖書館蔵本  
 徳川幕府書類町觸所載

嘉永六年十二月廿四日、

盜賊召捕候儀ニ付町觸寫

去ル九日觸置候通、町中所々ニ盜賊押込金錢奪取候由相聞候ニ付、穿鑿之上、無宿京都入墨藤吉外三人を此程播磨守組  
 之もの召捕、及吟味候處、町家百三十七ヶ所ニ押込、中こゝ人ニ疵付及強盜候儀も令白狀候、頃日世上物騒之趣相聞候  
 と、多分右之もの共仕業候間、其旨可存候、乍去、此上共押込盗いとい候もの有之候ハ、彌觸面之通相心得、打殺不苦  
 候、右之趣、町中不洩様、早々可觸知もの也、

十二月廿四日

右之通、從町御奉行所被仰渡候間、町中家持と不及申、借屋店借裏々迄、不洩様入念早々可相觸候、  
 但、番屋々々大筆ニ認、張出置可申候、

十二月廿四日

二十四日<sup>甲</sup>子 米國艦隊參謀長「アダムス」等、軍艦「ワンダリア」ニ乗ジ、



浦賀ニ回航ス。風浪烈シクシテ上陸ヲ果サズ。明日、上陸ス。米使應接掛伊澤政義美作守○浦賀奉行・同鵜殿長銳民部少輔○目付・同松崎滿太郎純儉○儒者等、浦賀屋形浦假館ニ於テ之ト會見シ、使節「ペリー」ノ書翰ヲ受領シ、更ニ艦隊ノ内海退去及應接地ノコトヲ商議ス。

〔浦賀奉行浦觸〕○内閣記録課所藏本  
通航一覽續編所載

正月廿三日、浦觸、

異人見物等ヲ禁ズ

明日、館浦浦觸ノ異人上陸いゝ候間、見物見物ヲ勿論、決る不法之儀無之様、不洩様可相心附もの也、

右之趣相觸候間、夫々可申渡候、

〔忍藩主松平忠國届書〕○内閣記録課所藏本  
通航一覽續編所載

○正月二十四日老中へ

此度渡來之異國船、今廿四日、相州於館浦、應接有之候旨、且明廿五日、彼國祝日ニ付、船中こる空炮數發打放候趣、浦賀奉行所所方、爲心得達有之候段、同所所出張家來之者方申越候、此段御届申達候、以上、

正月廿四日

松平下總守

〔米使應接掛林輝等上申書〕○内閣記録課所藏本  
通航一覽續編所載

○正月二十四日老中へ

正月廿四日、役々言上書、

昨廿三日、黒川嘉兵衛并立合之もの共立戻り申聞候節、祝砲之義を不取敢申上候得共、其節猶又申聞候と、副將アータムス應接所其外之談判として、今日、浦賀表一艘乗戻候趣、横文字を以て申聞候故、右應對として、館浦浦觸私共一同罷越相待居候處、異船一艘浦賀沖まで乗戻し候處、俄に風波荒立候故こや、又々内手内手引戻申候、右と折惡敷逆風よて、何分浦賀近寄兼、又候小柴小柴乗戻し申候義と奉存候得共、未風波強、附添之もの引取不申候間、何れ之分に御座候哉相分兼申候、依之右横文字相添此段御届申上候、以上、

正月廿四日

林（稱、鷹彦）大學頭

井戸（稱、町奉行）對馬守

戸田（氏、浦賀奉行）伊豆守

伊澤（政義、浦賀奉行）美作守

米艦逆風ニ會ヒ小柴沖ニ引返ス

安政元年正月二十四日

二七九



二八〇  
鵜殿民部少輔  
松崎滿太郎

〔米使應接掛町奉行支配組與力〕浦賀御用日記○帝國圖書館所藏本  
徳川幕府書類外國事件書所載

正月廿四日、大風、

一今日、當所屋形浦御應接之場所一覽として、船將次官アイダムス上陸いとし候筈に付、御奉行衆御越有之候間、一同罷出、御席警衛可致旨被仰渡候に付、同心中召連罷出候處、西風烈敷、異船出帆いとし候迄、乗戻候旨、注進有之、一同引取候事、

〔彦根藩主井伊直弼届書〕○東京帝國大學所藏本  
沿海紀聞所載

○正月二十六日老中へ

一昨廿四日、亞墨利加人應接に付、海陸相固候處、亞墨利加船浦賀沖合迄罷越候得共、風烈なる寄付兼候哉、船掛致候元場所へ引返申候、然ル處、天氣相に付、不相越候に付、人數引取候様、浦賀奉行より達有之候段、家來共より申越候、此段御届申上候、以上、

正月廿六日

井伊掃部頭

〔忍藩主松平忠國届書〕○内閣記録課所藏本  
通航一覽續編所載

○正月二十六日老中へ

一昨廿四日、於屋形浦、異國船に應接有之候段、御届申達候處、依風様乗入不申、昨今之内乗入應接有之候旨、浦賀奉行所々達有之候段、同所に出張家來之者々申越候、此段御届申達候、以上、

正月廿六日

松平下總守

〔墨夷應接録〕○公館徳川家達所藏本

林ト井戸ハ使節ニ非レバ面會セザル心意

正月廿四日、林大學頭・井戸對馬守但、兩人義と使節參り不申候得て、出會ハ不致候心得ニ候得共、様子見届且臨時相談も可有之候間、出張致ス、戸田伊豆守・伊澤美作守・鵜殿民部少輔・松崎滿太郎四ツ時より浦賀館浦應接所罷越、異人之來ルを相待居候處、此日朝より陰天風浪起り、四ツ時より大風雨に相成、四ツ半時比、軍船壹艘小柴より引返し、浦賀港口迄參り、暫く漂ひ居候て、遂に又小柴へ乗戻し申候に付、早速通詞等遣候て、何故參り不申哉之旨尋候處、アイタムス申候こと、今日は非參り可申積りに御坐候得共、何分大風雨にて入港難出來、無據乗り戻し申候、明日ふも風收り候得と、參り可申旨申開候、

〔近海雜記〕○内閣記録課所藏本  
通航一覽續編所載

一正月廿四日、今日應接場の異人罷越、下見分いとし候都合に相成、此方も供警衛として出張いとし、夫々別座にて待受候處、異船應接場の近く乗込候得共、大風にて何分乗入







安政元年正月二十四日

二八四

彦根藩届書

(前野、彦根藩主)  
井伊侯が廿五日御届、

昨日屋形浦ニ而御應接ニ付、將官船一艘乗廻し候由、右ニ付、番船十五艘御人數少々、燈明臺之邊ニ被差置候由、

猶又御届、上略、

昨夜御届申達置候通、人數罷出海陸相堅候處、アメリカ船一艘浦賀沖合迄罷越候得共、風烈ニ而寄付兼候哉、船懸罷在候元場所之方へ引返申候、然處、天氣合ニ付不罷越候間、固人數引取候様、同日夕八半時頃、浦賀奉行が達有之候旨、相州陣屋詰家來之元が申越候、此段御届仕候、

(池田慶徳、鳥取藩主)  
因州様が御届、

鳥取藩届書

追々御届申上候、異船七艘之内一艘、一昨日猿島邊を乗廻居、風雨強、耽ト見留兼候處、昨已上刻、浦賀之方へ向致出帆候様ニ見届候段、持場詰家來之者が申越候、此段御届申達候、以上、

〔安政甲寅日記〕

○帝國圖書館所藏本

正月廿五日、○中略、

米人ノ動靜

一昨廿四日、蒸氣船壹艘浦賀と相廻り可申風聞専らニ御坐候間、五半時頃、出宅、東浦賀明

ニ關スル大  
槻平次ノ書  
翰  
明神山ヨリ  
ノ遠望

神山の上り遠望仕候處、最早揚帆走り來るを相見申候、此時四半頃と覺へ候、然ル處、蒸氣船ニ無之コルヘットニ御坐候、扱追々走來候處、折節南風甚敷、舟行甚難義之容子ニ(體也)、帆影も見得不申、見物も追々共歸り候ニ付、如何なる子細と甚案し候處、跡ニ承候得也、何分逆風ニ在、浦賀口ニハ船繋り場も無之、其上晴雨升降ニ測候ニ、至るまじ模樣も御坐候間、相控へ候由、猿島沖七八丁之處に碇を卸候由、右ニ付拙者共ニ明神山を下り、吉兵衛所ニ在る晝飯仕罷歸候處、雨降出追々風雨ニ相成、彌雨故不參候事ニ相決申候、此晩宇田川(奥郡)、箕作兩人通詞と相尋候處、今日と風雨ニ在、異船も半途ニ懸り候由、異人共也、至る氣取も宜敷、明日と着岸可仕旨承候罷歸り申候、

(薩摩アラン)  
通詞是と異國製菓子少々懸御目申候、今日異人ニ被下御獻立も別紙寫取入御覽候、

今日御饗應首尾能相濟候ハ、彌御返翰御渡御一條ニ相成可申、先々追々ともびも相附御安心之事ニ御坐候、尙又今日之義篤と見分仕候、明日便ニ申上候様可仕候、正月廿五日、尙々今日話聖東北アメリカ之國祖誕生日ニ在、船中ニ祝義有之、大砲壹艘ニ付十六發ツ、祝放仕候由、七艘ニ在ハ百發以上ニ相成候間、餘程之大聲ニ相成可申と奉存候、今朝と早朝が大澤迄罷越、千里鏡ニ在一覽可仕、丁度ワシントン之誕生日ニ相逢候も不思議之様と奉存候、(薩摩、仙臺藩主)  
大槻平次、

安政元年正月二十四日

二八五



安政元年正月二十四日

二八六

〔浦賀館浦應接所日米對話書〕

○外務省所藏本  
續通信全覽所載

甲寅正月廿五日、

林等應接所  
ニ至ル

今朝五ツ時をり、林大學頭始其外役々館浦應接所へ相詰、

同四ツ時頃、軍艦一隻浦賀へ入港、無程惣人數十六人上陸、使節ペルリを病氣之由ふて、今

「アダムス」  
假館ニ入ル

度ハ未一度も面會不致、參將「アダムス」以下應接所へ相越、

伊澤美作守・鶴殿民部少輔・松崎滿太郎出座、

一應會釋畢る、

「アダムス」、漢文之名刺差出、

大學頭始役々よりも、役名附之名刺を同人へ相渡、

大學頭初面會之應接一通りふる直こ退座、應接掛り浦賀與力組頭黒川嘉兵衛并通詞相残り、應接左之通り、

嘉兵衛

當地ニ内海口之海關ふ付、内國之船(船カ)よる無斷通航を許さざる規則ふ有之、然るふ、此度渡

來候貴國之船艦、當關へ一應之引合も無之、直こ内海へ乗入、恣こ繫船致し候ハ、國禁ふ觸

浦賀回航ヲ  
求ム

林等退席黒  
川應接ス



嘉永七寅年正月廿五日  
屋形浦江亞墨利加人上陸之圖

見魚崎  
御臺場  
大垣人數

御船藏

此邊  
屋形浦ト云  
應接場

倉藥合

ピコネ  
カタメ

アメリカ  
バツテイラ  
松平丸  
小野金藏  
外五人

日吉丸  
下會彌次郎助  
佐久間福之助  
外五人

中山旗郎  
友成寛三良  
外五人

彦根持  
平根山陣屋

會津  
人數

彦根  
固

彦根  
人數

燈明臺

房州  
ノコギリ山

川越人數

亞墨利加船

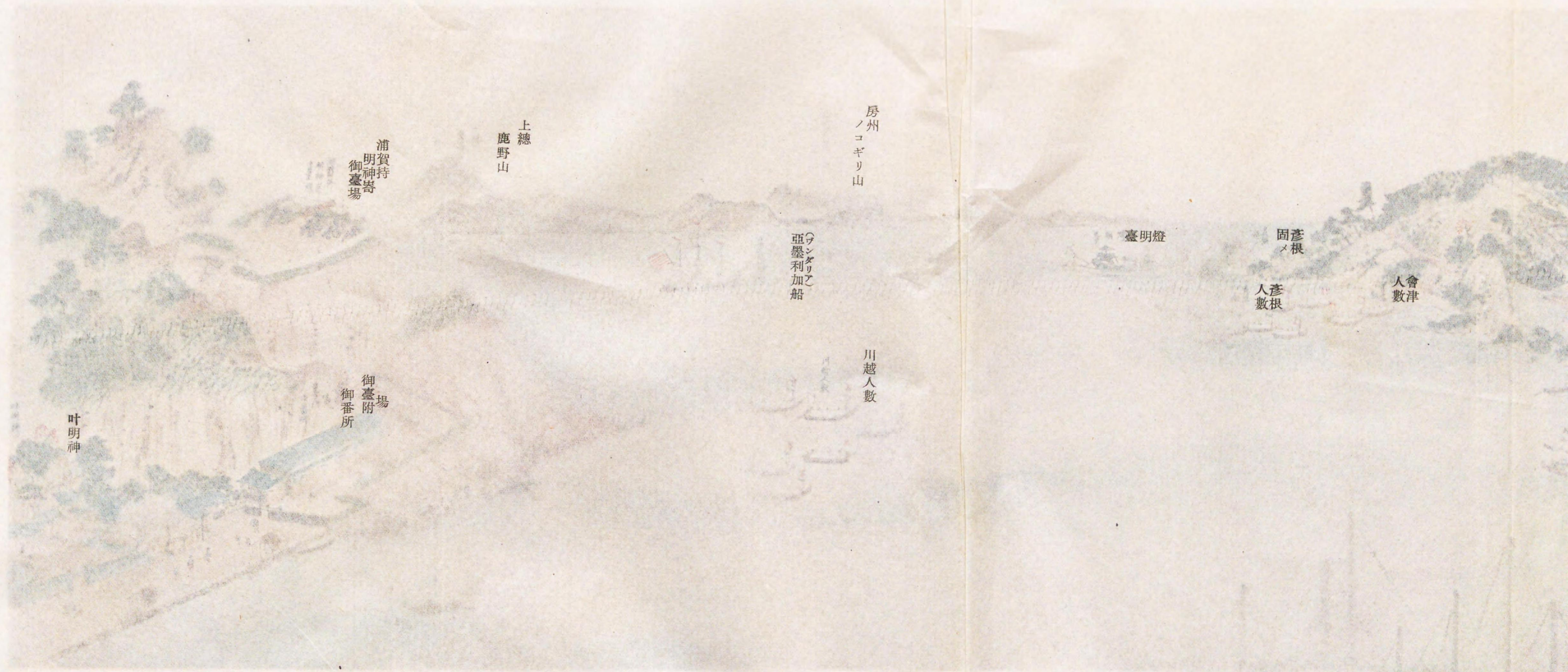
上總  
鹿野山

浦賀持  
明神崎  
御臺場

御臺場  
御番所

忍人數





房州  
ノコギリ山

上總  
鹿野山

浦賀持  
明神寄  
御臺場

亞墨利加船

川越人數

臺明燈

固彦根

人彦根  
數根

人會  
數津

御臺場  
御番所

叶明神



來候貴國之船艦、當關へ一應之引合も無之、直ニ内海へ乘入、恣ニ繫船致し候ハ、國禁不觸

嘉永七寅年正月廿五日  
屋形浦江亞墨利加人上陸之圖

見魚崎  
御臺場  
大垣人數

御船藏

數人忍

此邊  
屋形浦ト云  
應接場  
倉藥合

ヒコネ  
カタメ

晨風丸  
松平金藏  
小野五人  
外野五人

日吉丸  
下曾次郎  
佐久間福之助  
外五人

友成三郎  
中山旗  
外五人

アメリカ  
バツテイラ

千里丸  
友成三郎  
外五人

會津  
人數

固彦根  
メ

彦根  
人數

燈明臺

房州  
ノコギリ山

川越人數

亞墨利加船  
シンドリア  
メ

上總  
鹿野山

浦賀持  
明神寄  
御臺場

御臺場  
御番所



彦根持  
平根山陣屋

日吉丸  
下會彌次郎助  
佐久間福之助  
外五人

會津  
人數

彦根  
固  
彦根  
人數

燈明臺

房州  
ノコギリ山

川越  
人數

ワシタリ  
亞墨利加船

上總  
鹿野山

浦賀持  
明神寄  
御臺場

御臺場  
御番所

叶明神



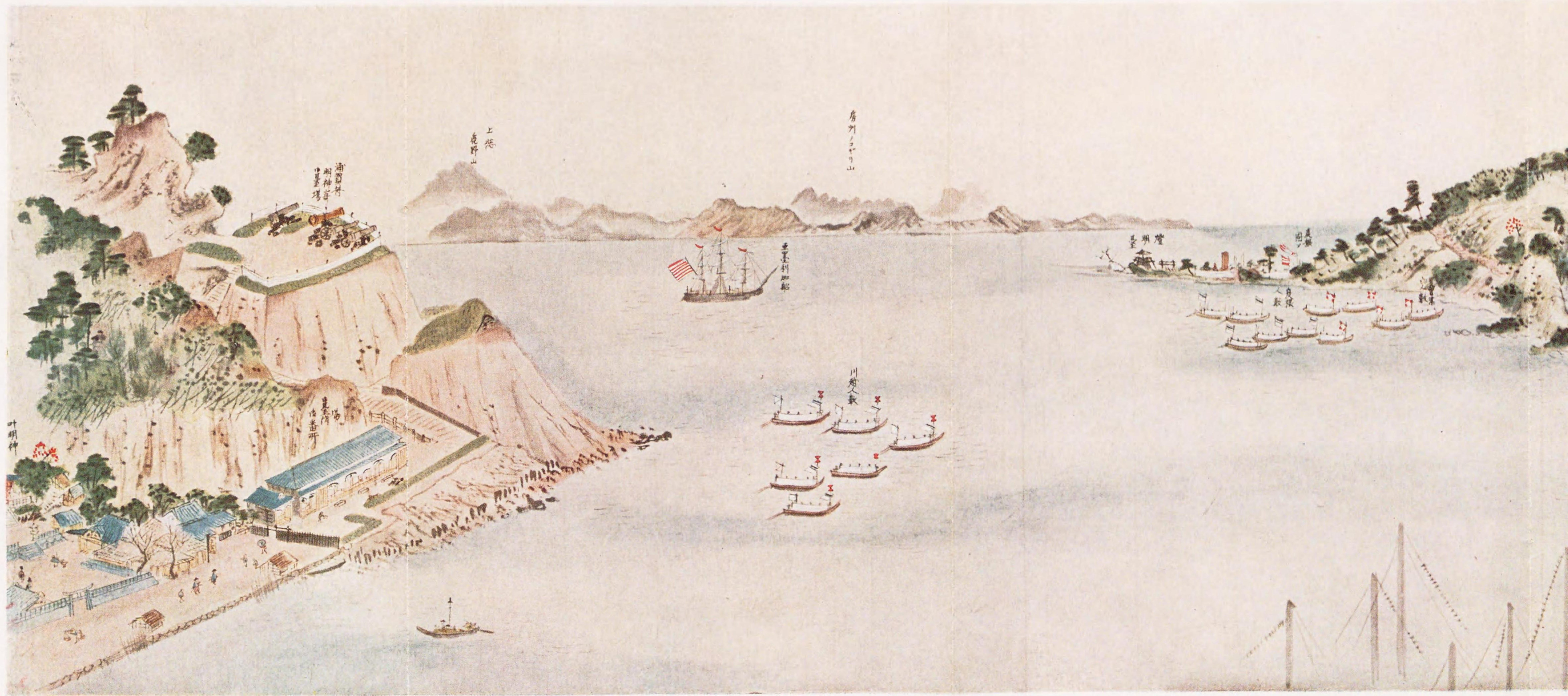


嘉永七年二月廿五日  
 登船浦上陸之圖

嘉永七年  
 正月廿五日  
 浦賀屋形浦上陸之圖  
 (横六十五分)

(維新史料編纂會所蔵)





市京海軍軍令部所蔵



内海進入ノ  
理由

候ふ付、何れも當港へ乗戻し相成度候、

アゲムス

隔遠之地ふ滯泊致し候るハ、万事の掛引も不便利ふ付、少しも江戸近よ乗入候へそ、双方之引合も速ふ往復相辨候、根元遠路之海上を遙々罷越、一日ふるも空しく日を送り候ハ難澁ふ付、御返答之次第依て、一刻も早く退帆致し度、若日間多々相係り候ハ、直ふ江戸表へ罷越、右之趣申上度心得ふ付、江戸近くふ乗入候、

嘉兵衛

外人ノ參府  
ハ國禁

外國人猥りふ國內ふ上陸を禁候儀ハ、舊古より之國典、殊更江戸表杯へ罷越候儀ハ、以之外之事ふ候、

アゲムス

如斯數千里之波濤を凌ぎ渡來候儀ハ、素より容易之事ふも無之候間、於本國も往昔より之記録をも夫々取調候處、王城之地に罷越候儀ハ確と書留有之、決る此度初る之事ふハ無之、則舊例ふ據て取計候儀ふ付、御國典を犯候譯ふハ無之候、

嘉兵衛

其方ふハ如何様之記録有之哉不相心得候へ共、於當方決る左様之舊例無之、夫そ傳聞之誤

安政元年正月二十四日

參府ノ古例  
アリ



ふる、世界萬國之人を延候儀ハ有之間敷、琉球・朝鮮ハ往古より因み有之、阿蘭陀人之儀ハ忠節之義も有之を以、于今王城へ罷候へ共、其他之外國人を王城ハ延候例之無之候、

アーダムス

其御挨拶之甚以難心得事候、既ハ

家康公 秀忠公駿府ハ被爲在候砌、本國之使節兩度迄被 召出、御目見仕候ハ相違無

之候へ共、其儀ハ御舊記御取調相成候ハ、判然可仕、右之譯之付、江戸表へ乗入候共、

聊差支之無之と相心得候、

嘉兵衛

素より數日徒月日を費させ候様之儀ハ、且以無之、少も速ハ談判相整候積之取計ハ有之、

其應接之場所ハ鎌倉邊歟、或ハ久里濱等之る面會ハ及度候、

アーダムス、此時漢文之書簡を取出し、嘉兵衛へ相渡、

嘉兵衛受取之、

アーダムス

以つれども、江戸の役官ハ於て面談不致候ハ、速ハ埒明兼候、

嘉兵衛

應接所ハ鎌倉カ久里濱ニ定メタシ

「アーダムス」江戸應接ヲ固執

勿論此方ハ於ても、一日も早く埒明候様致し度候故、江戸表より重役之面々出張致し居候へ共、使節病氣之由ふる上陸無之ハ付、不得止空敷時日を移候ハ至り候、只今も及示談候通、鎌倉邊歟久里濱邊ふる面會ハ決候ハ、速ハ相運可然存候、

此時、アーダムス懷中より、日本板行之江戸近海繪圖を出し、相示、

アーダムス

江戸府ハ於て之御面會、是非御迷惑ハ候成候儀ハ相成度、左様候ハ、使節へハ程能執

成可申候、

右之外一切取合不申、無是非今日之對話ハ是迄ハ相止候、

此時茶菓并酒一巡、香橙クネンボを肴として差出候、

右相濟、

今ハツ時頃、亞墨利加人一同退去、

〔米使應接掛林輝等屆書〕

○内閣記録課所蔵本  
通航一覽續編所載

○正月二十五日老中へ

昨廿四日申上候アメリカ船、浦賀沖より又々立戻り候儀ハ、全烈風之相成候故ハ、風順次第早速罷越可申旨申立候由、乗組候組之をの立戻申聞候處、今廿五日四半時過、一艘

安政元年正月二十四日



安政元年正月二十四日

二九〇

館浦應接  
伊澤鶴殿松崎對談ス  
浦賀應接ヲ  
忌避シ出府  
ヲ申立ツ

浦賀沖に乘戻候故、案内之をの差遣候處、無程副將アーダムス并士官之をの拾六人、通詞召連、ハツテイラ二艘罷越候に付、館浦應接場所に呼入申候得共、使節ヘルリ并將官之をの罷越不申候に付、私共不殘罷出應接仕候義とも不被存候間、伊澤美作守・鶴殿民部少輔・松崎滿太郎對談に及候處、別紙書面之通差出、應接所之儀、浦賀表と波荒之場所を、何分こも船繫留兼、江戸表に罷出度儀を再應申出、明後朝迄に返事承度段申聞候故、一通り理解申聞、使節ヘルリ罷越不申候を、何分對談仕兼候趣、能々申諭候上、先令廿五日と右之應對までふて爲引取申候、差出候書面之義を、和解出來次第差上可申候得共、此段御届申上候、以上、

正月廿五日

林 大學頭  
井戸 對馬守  
戸田 伊豆守  
伊澤 美作守  
鶴殿 民部少輔  
松崎 滿太郎

〔米國使節ヘルリ書翰〕

○公符徳川閣願所藏本  
豆州下田港亞細亞利加船所藏

○正月二十三日米使應接掛宛

甲寅正月廿五日、差出候漢文并和解、

亞美理駕合衆國欽差大臣兼管本國師船現留泊日本海提督被理爲照會事、現據

貴國委員等乘座駕船到來稱說去歲會將

本國大統領公書一函呈遞今蒙

國政於各款甘心應諾上本大臣聞知心誠

喜悅但于浦賀地方海面留泊各船及大火船等甚不便當因火船係寶重之物于拋

錨必要慎重或駛往該處地方自己之心亦不以為妥本大臣反宜於此處洋面之近

向北者細心考察好灣泊船以爲拋錨之所且領國命必要往江戸相會所以下以

船泊地方係以愈近京城爲愈便捷若船相近京一易得往來今本國有奇巧

禮物饋送便能于此指點陳設應用至歐羅巴亞美理駕西域各等邦倘有欽差到疆有

禮必要迎下接之到京賓客相待所以下本大臣到貴境一甚見和氣之意豈望有碍不

登京乎或近京之時倘有朝廷大臣人等臨火船上隨便能鑒察火輪船之機巧旋動也茲照會特遣協台

呈遞或有公書回音代收可也倘或欽差大人等坐船一并同行亦可也右

安政元年正月二十四日

二九一

漢文

國書ノ報答

浦賀港碇泊  
ヲ好マズ

江戸附近乘  
入ヲ欲ス

款待ヲ望ム

高官ノ來訪  
ヲ望ム  
「アダムス」  
ノ使命

書朱外疆



此照ニ

各大臣等ニ并候ニ

崇安ニ一

甲寅年正月二十三日

由ニ鮑厦旦<sup>リハツハタン</sup>名船座駕船ニ遞ス

○欄外朱書

本文にてハ江戸を京と指所ハ、少しく安心也、

漢文和譯

國書ノ報答

亞美理駕合衆國欽差大臣兼管本國師船現留泊日本海提督被理より申通して、掛合ニ及ヘ  
る主意也、當節

貴國之懸りノ御役々衆、座駕船ニ乗り、當表へ御越りて、昨年會て本國大統領之公

書一箱を持參して指出候ひ一、今執政之御方々、公書中ケ條々々の事共、悉く御心ニ叶

ひ、御許容有之旨を申述玉へる由、本大臣承り聞て、心中誠ニ喜悅致し候、但し浦賀之海

下ケ札△

夷人共江戸へ罷越候事のみ申募り候ニ付、此方、交易願之事、付、談判可致間、浦賀表へ罷越

上ニ、船々及蒸氣船等繫泊せん事、甚々不都合成る事ニ候、其中ニも蒸氣船ニ、至極大切ニ

浦賀港碇泊  
ヲ好マズ

江戸附近乘  
入ヲ欲ス

款待ヲ望ム

高官ノ來訪  
ヲ望ム

存候品成り故ニ其碇をあるし繫泊せる場所を定る事も、必心を用ひてかりをめよいあさ  
る事也、若此船當國何方之地方へあり共馳セ行事あらんよハ、我々も甚々心を痛むる  
事あり、されハ本大臣ハ、當地海上北方ニ寄りたる場所の内にて、船繋り宜き船付場を委  
く吟味をし、其所ニ船を繋きて碇をあるし、繫泊せる地と定むべく存候、其上國王之命を  
受たる事なれハ、是非ノ江戸表ニ趣き面會を遂んと存候、執政御方々へ面然るが故よ、船を  
繫泊せる場所ハ、愈江戸京城ニ近き程、愈都合宜く候、若船々京城ニ近く候へハ、海陸之往  
來共ニ心安く候、當節本國より珍敷細工之禮物を贈り進し候、則獻貢之  
場所ニ、夫々指圖をなし連子置て、其用ひ方を辨せられ候様致さべく候、元來歐羅巴・亞  
美理駕・西域等之國々ニあるハ、若他之國王之使者其國ニ至れる時必は夫々の禮式あり、  
其使者を迎接して國都ニ至り、賓客を以て相待せる事ニ候、夫故よ本大臣も、  
貴國之境ニ入るハ、一段和順の様子をあらわし候よ、  
貴國よさし目りありて、江戸ニ赴事不叶とい、思も不寄事ニ候、左られハ、江戸近く往候時  
節ニ、若

朝廷大臣の御方々蒸氣船中ニ御越りらハ、其序を以る蒸氣船之機巧旋動之様子をも委敷△

下ケ札△

安政元年正月二十四日



安政元年正月二十四日

二九四

「アダムス」ノ使命

朝廷大臣又大臣と相見候ハ、私共三人の事ころハ無之、別段ニ貴官を指遣りさるへき事を申候と相見候、  
しく御見分るへし、是等之御掛合の爲メ、協台副將の事アリの啞咄アムスを遣して、此書を指進し候、若  
昨年公書之御返翰も候ハ、我等より代り受取候も不苦事候、若又此度之 欽差大臣之  
御乗船も、此船々と共ニ御同行りても、是又不苦事候、依る是等之事共、大臣之御方々  
御懸合ニ及ヒ、就るハ此節之御安否をも承り度候、不一、

甲寅正月廿三日

鮑厦旦船名の座駕船ヲ指出せ、  
ハウハダシ 名 ヨウワセン

甲寅正月廿五日、指出、合衆國水師總督ヲ指出候横文字和解、

亞墨利加合衆國水師總督の船ボウハタン船一千八百五十四年二月廿日皇國正月廿三日 江戸  
内海ニ於て、

蘭文和譯  
國書ノ報答

一昨年七月下旬皇國六月中旬御渡申上候合衆國「プレシデント」の存意ニ付、格別之御懇切を以御  
返答被成下候旨、官府ニ於て治定有之候由、總督の船ニ御入被下候官府之御役人衆より  
承知あり、大慶ニ存候、

浦賀港碇泊  
ヲ好マズ

一浦賀の船繋所ニ、甚無心元、且不便利ニ有之候故、蒸氣船の大サ并其高價を相考候へ、  
浦賀ニ參候義ハ、本意之儀ニ有之間一ニ存候、然とも、内海ニ近寄、都合宜港を相撰候

江戸附近乘  
入ヲ欲ス

義を專要ニし候、私義ハ、江戸表ニ參候様被申付候間、可成義ニ候ハ、江戸近く乗入  
候義相願候、左候へハ、御相談之都合宜、「プレシデント」より日本國 帝殿下に指上候  
數品の献貢物を取立、御見聞ニ相備候便利も宜義ニ候、

款待ヲ望ム

一私義懇情之義を以使節として罷越候間、歐羅巴并亞墨利加國人民之法禮の如く、政廷  
ニ於て御請待被下、苦心無之様、御取扱之程相願候、蒸氣船江戸近く乗入、船繋いし候  
に都合宜所相決候上、官府高位の御方々、蒸氣并其道具仕掛を御見分被下候ハ、  
總督の船ニ御招待申上度相願候、

高官ノ來訪  
ヲ望ム

一此書面ニ主役「カピテン、ファン、デ、フロード」爵「ハ、ア、アーダムス」人より差上可  
申、且右書面の御返書ニ、此者受取可申、猶官府使節の御方の爲メ「アスカドル」軍艦の隊伍の

「アダムス」  
ノ使命

内壹艘相備、御世話申上候様申付置候、此段謹る申上候、

東印度并支那日本海ニ在る

合衆國水師總督

エム、セ、ペルリ人名

右之通和解仕候、以上、

阿蘭陀小通詞

堀 達 之 助判

安政元年正月二十四日

二九五



安政元年正月二十四日

寅正月

二九六

同 小通詞並

名 村 五 八 郎 判

同

立 石 得 十 郎 判

○欄外朱書及朱點・朱丸ハ、何レモ徳川齊昭ノ自筆ニカ、ル。墨夷應接録、通航一覽續輯、マタ本書ト略々同一内容ノ書翰三通(欄外朱書其他ヲ除ク)ヲ載ス。

〔米使應接掛林緯等上申書〕

○公爵徳川順所藏本  
豆州下田港亞墨利加船所藏

○正月二十七日老中へ

異人指出候書面指上候段申上候書付

林 大學頭

戸田伊豆守

一昨廿五日、館浦ニ於る異人共々指出候書面(前二掲ク)三通り、右之内漢字蘭字之分セ、和解相添指上申候、右漢文之方ハ、御不審之義も可有御座哉と、和解之へ方下ケ札仕置候、右ニ付、今廿七日、答書指遣候間、是又和解相添差上申候、然る處、當港ハ碇掛兼、小柴へ一旦引取、使節へ申立候趣ニ付、帆卷立候ニ付、無程小柴へ立戻可申々奉存候、此段申上候、以上、

寅正月廿七日

林 大學頭

井戸對馬守  
戸田伊豆守  
伊澤美作守  
鵜殿民部少輔  
松崎滿太郎

〔米使應接掛町奉行支配組與力〕

浦賀御用日記

○帝國圖書館所藏本  
徳川幕府書類外國事件書所藏

正月廿五日、風、

一今朝五半時揃ニテ、昨日之通屋形浦ヨリ罷出候處、九時頃、アイダムス其外之者共軍艦壹艘ニ乗組、燈明臺々四町程沖ニテ帆を卷、發炮いよいよ候上、バツテイラ二艘ニ乗移、屋形浦ヨリ着岸、アイダムス以下士分之由十五人上陸いよいよ、美作守殿民部少輔殿滿太郎殿御出席御對話、異人ノ菓子茶酒等被下之、畢ル退去、

但、大學頭殿御頭并伊豆守殿ニ御出席無之、御陰聞之姿ニ候事、

〔溫恭院殿御實紀〕

○續徳川實紀所載

正月廿五日、亞墨理加人應接、○中略、

一此日、浦賀表屋形浦對面所江、アメリカ將官アイダムス上陸、菓子御酒等を賜ふ、此度渡

安政元年正月二十四日

二九七

「アイダムス」上陸ス

伊澤鵜殿松崎出席對話



來、直に内海江乗入、船繫致候者、御國禁に付、浦賀港江乘戻候様申談候處、遠路罷越、空敷日を送り候者難儀に付、御返答次第一刻も早く退帆致度、若日合掛候はゞ、直に江戸表江罷越、右之趣申上度に付、江戸近く乗入候由を申、依之外國人猥に上陸を禁じ候儀、殊更江戸表杯に罷越候儀者、以之外之旨制候處、斯數千里之風波を凌ぎ罷越候儀者、容易之事にも無之、是迄記録を取調候處、王城之地に罷越候事耽與突留有之、尤此度初而之儀に無之、舊例を以取計候段申立に付、琉球・朝鮮・蘭人之外、王城江罷越候例無之趣申諭候處、家康公 秀忠公駿府に被爲在候砌、本國之使節兩度迄被召出、御目見仕候に相違無之候得者、御舊記御取調可被下候、右之譯に付、江戸表江乗入候而、聊差支無之心得候旨申立、

此日者僅十六人上陸、使節彼理は病氣之由に而、一度も面會不致、參將アイダムスと申者以下、官人共上陸、但大學頭以下は只一應面會致し候而已に而退座致し、應接者浦賀與力組頭に而、當年應接方相勤候黒川嘉兵衛、並通詞一人に而應對に及候由、但し今日者應接場所の一儀を談じ候のみに候、先方書翰一通嘉兵衛へ相渡し、應接之儀者、是非江戸の役官に於て可致申張候よし、此方に而者、鎌倉或者久里濱等之場所掛合に及候處、アイダムス懷中が江戸近海之日本板行繪圖を出し、是非江戸府迷惑に

林等一應面會ノ上退席黒川専ラ交渉ニ當ル

候はゞ、品川が川崎邊迄之間に而、執行候儀に候はゞ、使節江執成可致由を申、其餘者一向取合不申、無是非今日之對談是切に而相果、其節アイダムスより差出書付三通之（前二通之略）

〔墨夷應接錄〕○公爵黒川宗達所藏本

正月廿五日五ツ時より、大學頭其外役々前日之如く館浦應接所へ相詰候處、四ツ時比、軍船壹艘浦賀へ入港仕、無程アイタムス其外十四人上陸仕候、伊澤美作守・鶴殿民部少輔・松崎滿太郎罷出對面致し候、アイタムスより洋文なる名札差出ス、此よりも役々名札役名付よて同人に相渡遣ス、此時美作守扇子を疊ミ候處、餘程響き候得と、夷人共大ニ驚よ、面色を變し、夫々目配りを一々熟覽いとし候様、如何にも落付居候に付、夷人も安心之様子に相成る、アイタムスよて漢文一通持出申、此漢文ハ別漢文之意味よて取合不申、何れ使節上陸よて面話に候得と、大學頭・對馬守を委曲對談に及可申旨答置候、茶菓並酒一巡、クシチボを肴として出候事、八ツ時比、異人退去仕候、此日亞國之開祖和盛頓誕生日を祝候事よ、て前日より相斷り置、祝炮連發有之候事、

〔海禁雜記〕○内閣記録所藏本 通航一覽續編所載

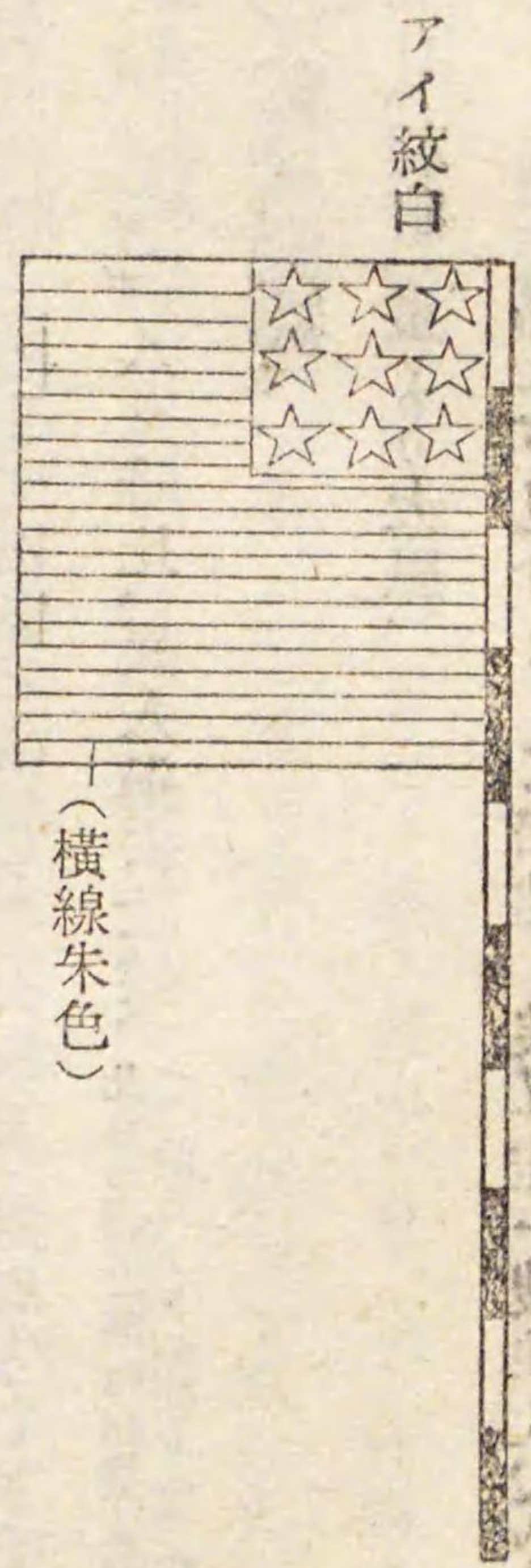
一 正月廿五日、朝晴、晝より大風、今日いよ／＼應接場へ下見分として相越し候軍艦一艘乗入、貳拾丁計沖なる碇を卸、夫よりハツテイラ二艘なる乗附、ハツテイラハ外黒ぬり、内青シツト白との模様有之、

伊澤等「アイダムス」ト對面ス  
「アイダムス」漢文書翰ヲ提出ス



安政元年正月二十四日

船印之圖



三〇〇

一 異人應接場の相越候節、御馳走如左、

一 茶 菓子 カステイラ アルヘイ

一 酒 肴 九年母

一 應接所の相越候もの人数至る少なり、十七人之内二人ハッテイラへ残り、拾五人上陸、

一 舟師等ハ酒蜜柑を被下、ミウんを腰へ付候小刀よて皮を除く、

一 應接所の相越候節、鐵砲等ハ所持無之、上陸いハ候へハ、直ニ畫師筆をとり、座席之様子奉行其外役々の人のさほを寫しとる、

一 異人浦賀ハ參り候節、本船にて鐵砲十二發をな候、

一面會之人例之三人なり、三人ハ、

伊澤美作守

着服

御紋付御納戸縮緬羽織

革野袴あつみ模様

茶色革足袋

伊澤殿軍扇を持、パチ／＼といハ被居、手ハハツみよて、パチと大きく音のまなれハ、下官の人驚て劍をぬきとり、

鵜殿民部少輔

着服

自紋黒縮緬羽織

茶色野袴

松崎滿太郎

着服

黒御紋付縮緬羽織

安政元年正月二十四日

三〇一

伊澤等ノ著服



安政元年正月二十四日

三〇二

外に御徒目付・浦賀組頭・通詞、是を惣髪、

近習之人々、いづれも丸羽織野袴

其節書狀之通漢文・蘭文・横文字、右をツバクロ入様之ものゝ入て差出、明日中へ御返答伺度より申立候得共、此方より明後日中返答可及と被申出、然れとも不承知不平之心をいざさき、是非明日中へ被申出、然らば明後廿七日朝迄に無相違返答可致といひ、退座、

書狀提出

其趣意ハ江戸乗入ノ希望

一 彼云、去七月差出候書翰之御返答承り度よし、申述る、

一 今日下見分として相越候ものとも名前、昨日之通、

一 今日差出候書翰之趣意ハ、只々江戸海へ乗入り度候、此方之蒸氣船一艘御かへ申候間、右車仕懸御見物旁御案内御願申候、右を昨年之御返翰受とり度申述有之候、自脱之

一 異人共引とり、ハッテイラへ乗込候故、掛り役人衆退散被致候後、異人又々上陸いよ、もとの應接場を相越、火鉢を圍ミ煙草をのミ、其臺所を酒などを乞ひ呑候事、右を畢竟初澤山の候事ゆへ、餘程銘酩之上と被存、異人共ハ兎角酒の上不宜に付、右等之亂妨に相成罷出候、上官より今日を酒肴菓子等御馳走之程ハ、御厚意難有奉存候得共、此後對話之節も、酒ハ御斷申候旨申述候、

一 最初下官之もの共酩酊故もや、下官同士喧嘩を初め、むなぐらをとりにて彼是打擲ありいとそ、兩人を引分ケ、別船へ乗せて返りたり、

一 異人士官のもの最初應接所を來り、互に名札を取替り、彼の名札ハ銀のノベ板なり、

〔浦賀日乗〕

○東京帝國大學所藏本  
如是我聞所載

正月廿七日夜中、中島三郎助咄、

一 一昨廿五日、第三之船アーダムス以下水夫迄四拾人餘、屋形浦の上陸、書面三通差出ス、

蘭文漢文ア  
メリカ文 大主意を、國許に於てフレシテンド之命を受、是非江戸に罷越候、御返翰

を頂戴可仕、貢獻上物も、同様於江戸可差上旨被申付候なり、此日、浦賀奉行伊澤美作守御儒者松崎滿太郎兩人計出座、應接を無之、酒菓子被下、士官以上を格別不酔、水夫共殊之外大酔、或は笑或は歌ひ、又は仲間同士口論するも有之、アーダムスを右之書面を呈、館浦應番所<sup>（後）</sup>に木品等見分して、壹時計を過たり、是を水夫共之酔を醒を心なる

へ、歸る時、水夫に猶楫を取得する者有之、依之頭立者願出、此方之舟にて送り返り貫度旨付、酔たる水夫を、此方之船に乗て戻り、少くも異人心和らけ候端も可相成くと此評議へ、又賜りたる養老酒之残り有之を、水夫共は可遣哉といへ、アノ通大酔致さる故、平に御免可被下と申たるよし、

江戸へ行キ返翰ヲ得ン

安政元年正月二十四日

三〇三



浦賀應接ニ  
關スル開書

〔合同舶入相秘記〕

○松平慶永手記  
東京帝國大學所藏本

一正月廿五日四ツ時過、軍船浦賀沖迄出シ、夫ヨリハツテ一ラ二艘ニテ、異人上官之者十人余水夫三十人計ニテ、屋カタ浦應接場へ上リ候而、諸役人ト應接有之候由、其上種々之饗應ニテ、九ツ時前ヨリ七ツ半時比迄、上陸致シ居候、歸リ之節ハ、上官ノ者ハ我舟ニ乗セ歸候由、何モ酒ニ酔候テ亂雜致シ候、水夫之者杯(マ)ハイタク程之者モ有之候由、

我應接人

林大學頭・井戸對馬守・浦賀兩奉行・組頭兩人・松崎滿(志)二郎

一右應接之沙汰、

屋形浦ニテ御返翰御渡ニ可相成候段、彼へ申聞候處、彼云、何之國ニテモ書翰ヲ受取之節ハ、城下ニテ受取候間、何分ニモ江戸表ニテ受取度候段申張リ候而、決定不致候由、

但、此說實非不詳候、

大道寺七右  
衛門ノ報告

(編并薩城使)  
大道寺七右衛門、六ツ半時過、罷歸申聞候ハ、此度之夷船到泊、定テ長引候半ト被存候由、(正助、奥藏)  
黑澤咄之、多分ロシヤ致承服及退帆候事故、アメリカモ同様致承服退帆ニ及ヘク候ヘトモ、何分來月一抔ト存候ヘハ、ハツレ候事ハ無之由、又黑澤申候、昨日ハ應接可有之筈ニ候ヘトモ、多分使節ヘルリ屋形浦へ上陸致シ、及應接候儀ニテハ無之、下官之内ト被存申候、

尤應接イタシ候所カ、久々ニテ御逢申遠方御苦勞ニ候由ト、双方挨拶位ニテ相濟候由、明日後日ノ應接有之筈、昨日應接ニ付、何ソ事替リ候儀モ候ヘハ、評議御下ケ、我等承知可致候ヘトモ、不存候ハ、爲指事無之ト見ヘタリ、且兎角彼方江戸近邊ニテ及應接度由所念ノ趣、多分金澤ニテ使節之應接ニ相成候半ト被存候由申聞候、

乍内々黑澤申候、魯西亞ハ先諸事三五年相考置可申位之事ニテ相濟候由、「オロシヤ」「アメリカ」「インキリス」「フランス」等ハ、當今朝旭之勢ニテ、日本ハ打續候大平之事故、申サハ落暉之姿ニ相成候故、戰爭ニ及候ハ、必定敗衄ハ眼前之事ニ候故、先此度ハ平穩ニテ、是ヨリ幾夷船到來ニ候トモ、御備之出來候迄ハ、當今御平穩之御姿ニテ、星羅碁布之萬國ニ御應シ被成、三五年之末、彼ト同様朝曦之勢ニ被成候テ之事ニ被成度、閣老衆思召之由、内々黑澤咄之、

於御城之風説ハ、筒井肥前守・川路左衛門尉等長崎ヨリ歸著ヲ御待被成候由、

二十九日、

大道寺七右衛門申候、遠山三右衛門浦賀へ罷越懇意之由、與力中島三郎助嘶、左之通り、此程夷人上陸應接之節、上官アハタムスヘハ井戸對馬守・鶴殿民部少輔上ニシヲ始對面、

安政元年正月二十四日

三〇五

城中ノ風説

中島三郎助  
ノ嘶



中官へハ與力、下官へハ同心、先有平糖ニ茶差出候後、九年甫一鉢ニ酒出シ候趣、上官ハ眼ノ淵赤ク成ホト給へ候由、下官隨分給へ候故銚子ヲ取上候、下官ノ夷人堪へ兼候テ、臺場<sup>(所方)</sup>マテ參リ酒々ト申頼候故、十分ニ相渡候處、余程澤山ニ給へ候由、舟中ニテハ分量有之趣ニテ不被吞候故、ハメヲハツシ相傾候ヨシ、歸リノ節杯ハ中々へロツキ、四五拾間ノ處歩兼、ハツテラエ我方ノ者乗セ遣シ候處、漕兼候故、我方ノ者漕遣シ候、舟中へ歸シ候處、直ニ喧嘩ヲ始メ、五六人ニテ取押へ候由、我方白猿如キモノト被察候趣、中々ニ兵端開キソウナルモノニテハ無之由、咄シ候由、

〔昨夢紀事〕

正月二十五日、

一、此頃の風説にては、異船平穩にハあれと、彼か申出たる事ハ退引ならて、應接場所の事も、彼是と難題申出て決しかた、漸く二十五日に至り、浦賀の屋形浦にて初度の應接ありて、饗應の御料理を下されたりと、此節の應接掛り全權ハ林大學頭殿井戸對馬守殿にて、井澤<sup>(マ)</sup>美作守殿鵜殿民部少輔殿等も被差加たり、林祭酒は應接已前にハ、高の知れたる夷狄の輩何程の事あらんと蔑視廣言せられしか、初度の應接後は、俄に臆病神立添て、彼かいふ處甚理あり、申に任せずしては御大事に及ふへし、東照宮再生し給ふ

林輝廣言セシモ應接後態度約變ス

とも御任せの外はあるましとて周章狼狽せられたれハ、大事を誤られたる而已ならず、大ニ世の非笑をも請られたり、使節は兎角して、江戸へ參りて執政衆へ對談せずしてハ事就りかたきハ、各國通例なる由を申立、又此方にては一步たりとも遠き處にて事を濟せんとの商議にて、事の外に指纏れたれとも、遂に横濱の海邊に假屋を設て、此後の應接あるへきに事定まれりと聞えたり、

〔安政甲寅日記〕

○帝國圖書館所藏本

一聞書寫、去ル<sup>(正月)</sup>廿五日、浦賀屋形浦對面所<sup>(所)</sup>ハ、亞墨利加船將官ア、ダンス上陸爲致、御菓子并御酒被下、此度渡來直ニ内海<sup>(所)</sup>乗入船掛仕候ハ、御國禁ニ付、浦賀<sup>(所)</sup>乗戻候様申談候處、遠路罷越居、空敷日を送候ハ難義ニ付、御返答次第、一剋も早く退帆仕度、日合相掛り候ハ、直ニ江戸表<sup>(所)</sup>罷越、右之趣申上度旨申候由、依之外國人猥ニ上陸不相成、殊更江戸表杯と<sup>(所)</sup>以の外と制候處、行程萬里之風波を凌キ罷越候義と、容易之事ニ無之、尤是迄之記録をも取調候處、王城之地<sup>(所)</sup>罷越候事、耽ち書留有之、必此度初る之義ニ無之、舊例を以取計ひ候段申立候ニ付、琉球・朝鮮・蘭人之外、王城<sup>(所)</sup>罷出候例無之趣申諭候處、家康公 秀忠公駿府ニ被爲在候砌、本國之使節兩度迄罷出、既ニ 御目見仕居り候ニ相違無御坐候間、得と御舊記御取調可被下候、右之次第ニ付、江戸<sup>(所)</sup>乗入候る

浦賀應接ニ關スル聞書



も、差支無之心得之旨申立候由、右對面所<sup>レ</sup>上下十七人上陸仕、ア、タンヌも心能く御酒頂戴、隨分宜キ機嫌<sup>ニ</sup>相成、殊之外難有<sup>リ</sup>、必野心御坐候<sup>ル</sup>渡來致候<sup>レ</sup>ハ無之候間、萬一陸<sup>ニ</sup>鐵炮被打拂候とも、船々<sup>ニ</sup>敵對致候存念<sup>ニ</sup>ハ無御坐候旨、下官之拾六人數獻戴候<sup>ニ</sup>付、給仕之者餘り過酒致し狼藉仕候<sup>ル</sup>ハ如何と、銚子を控置候處、手間取候<sup>ニ</sup>待兼、勝手之方<sup>ニ</sup>罷越、和語<sup>ニ</sup>こるさけ<sup>〜</sup>と所望致し候間、其後十分<sup>ニ</sup>銚子を替遣候處、大醉<sup>ニ</sup>相成、罷歸候節<sup>ニ</sup>、何<sup>レ</sup>も歩行成兼、七十間濱邊迄十六人四ツ這<sup>ニ</sup>罷成候<sup>ル</sup>、漸々船<sup>ニ</sup>乗候由<sup>ニ</sup>御坐候、右<sup>ニ</sup>荒々申上候、以上、二月十日、俊、意、此手紙初<sup>ニ</sup>聞書寫<sup>ト</sup>相記し、本紙俊意<sup>ニ</sup>、<sup>レ</sup>兩人の者自分相認<sup>ル</sup>の手紙とも難決候間、暫無日付部に置候事、

〔萩藩 浦元襄日記〕○維新史料編纂會所藏本

正ノ廿五日、天氣、○中略、

三井善右衛門ノ咄

一三井善右衛門今夕罷歸候、都合穩之由、船長之者四拾人計浦賀へ上り、應説今日當り初り候哉之様子、御料理事も有之様子<sup>ニ</sup>承り歸候事、

一上官へルリ病氣<sup>ニ</sup>付、奉行<sup>ニ</sup>見舞勤、菓子大根人參鶏卵貳束鶏百羽とか申事<sup>ニ</sup>候事、

廿九日、天氣、○中略、

一昨夜内藤作兵衛・松野四郎右衛門從浦賀候、山縣半藏も同所<sup>ニ</sup>歸り、廿五日、屋形浦<sup>ニ</sup>異船壹艘歸り、卅人餘り假屋へ上り、御饗應有之、下分<sup>ニ</sup>交り々上り候<sup>ル</sup>、檣甘之肴<sup>ニ</sup>よて酒吞<sup>ニ</sup>され候由、應説ハ格別無之、頭立候者四人とも云五六人とも申候、緋羅紗様物著、余ハ黒キ衣裳之由<sup>ニ</sup>候、引手物大根人參金子と申評判、實説哉難分候事、

〔萩藩 秋良敦之助手記〕○秋良朝之助所藏本

正月廿五日、浦賀新屋形<sup>ニ</sup>異人三拾人程上陸、アトミラリ官名軍奉行名の事・アハタムス人の名・倅十八才其外異人ども<sup>レ</sup>、於浦賀饗應アリ、下官共ハ酒等醉アフトスル者もあり、蜜甘等を悦ひ、或ハ袖もも<sup>ト</sup>入、貯へ去もあり、

〔ペリー日本遠征記〕○ホークス編

Francis L. Hawks: Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan, performed in the Years 1852, 1853, and 1854, under the Command of Commodore M. C. Perry, United States Navy, by Order of the Government of the United States. Washington: 1856. Vol. 1. pp. 333-336.

On Tuesday, the 21st day of February, the Japanese boat came alongside the Powhatan, and the officials, on being received aboard, stated that they had come



to show Captain Adams the landing at Uraga. They were then invited to accompany him on board the *Vandalia*, which ship immediately set sail, and moved down the bay. Captain Adams was the bearer of the following note from the Commodore to the Japanese authorities:

“UNITED STATES FLAG-SHIP POWHATAN,

“*American Anchorage, Yedo Bay, February 20, 1854.*”

“The undersigned is highly gratified to learn, through the officers of his Majesty who have visited the flag-ship, that the imperial court has come to the conclusion to respond, in the most cordial manner, to the propositions of the President of the United States which the undersigned had the honor to present in July last.

“Inasmuch as the anchorage at Uraga is unsafe and inconvenient, and considering the great size and value of the steamers composing a part of the command of the undersigned, he does not consider himself justified in removing to that place; on the contrary, he deems it necessary to seek a more commodious harbor higher up the bay; and as his instructions direct him to present himself at Yedo, it is desirable that he should approach as near as possible to that city, as well for the better convenience of communication as with reference, also, to the arrangement and exhibition of the various presents sent by the President to his Imperial Majesty.

“As the mission of the undersigned is of a most friendly character, he is not

prepared to anticipate any objection to his reception at the seat of government, conformably to the usages of all the nations of Europe and America, and he hopes that when the steamers shall have reached the vicinity of the city, and secured more suitable moorings, he may have the honor of receiving on board his ship such distinguished members of the imperial court as may be desirous of viewing the steamers and witnessing the working of their machinery.

“This communication will be presented by Commander H. A. Adams, captain of the fleet, who is empowered to receive any written proposition addressed to the undersigned, and place at the disposal of the commissioners of his Imperial Majesty one of the vessels of the squadron.

“With the highest respect,

“M. C. PERRY,

“*Commander-in-chief U. S. Naval Forces East India, China, and Japan-seas.*”

It was calm in the morning, but before the *Vandalia* had reached Uraga a strong gale from the southwest, and directly ahead, prevented her from reaching the port, and made it necessary for her to anchor under Point Rubicon.\* Captain Adams, accordingly, was not enabled to land, until the succeeding day. It being the twenty-second of February, Washington's birthday, the *Vandalia* commenced at noon firing a salute in honor of the occasion, and amidst the salvo of artillery Captain Adams



left the ship, accompanied by a score of officers and attendants, and landed at Uraga, where they were met by a large party of Japanese officials, who conducted them to a wooden pavilion, which evidently had been but lately constructed.

Captain Adams and his suite were ushered into a large hall, some fifty feet long and forty wide. The floor was spread with soft mats of very fine texture, and at a distance of several feet from the walls, on either side, were arranged long settees covered with what appeared to be a red felt; in front of them were tables spread with a silken crape.

The Americans were invited, on entering, to take their seats on the left hand, which is esteemed by the Japanese the place of honor; this they had no sooner done than the Japanese prince, accompanied by two other high dignitaries, entered the hall, through a curtained opening which led into another compartment. As soon as these dignitaries presented themselves, the governor of Uraga, the interpreters, and various Japanese subordinates, who had accompanied the Americans, dropped at once upon their knees — a position they retained throughout the interview — and bowed their heads to the ground. The prince and his two associates took their seats on the right, opposite to the American officers, and a file of Japanese soldiers, amounting to half a hundred, marched in and ranged themselves, on their knees, behind the three dignitaries, in the space between their backs and the wall.

The prince, with his robes of richly embroidered silk, his fine presence, his benevolent and intelligent face, and his courtly manners, made quite an imposing appearance.

He first addressed Captain Adams, rising as he spoke, and expressed his pleasure at seeing him. His interpreters translated his Japanese into Dutch, which was then repeated in English by the American interpreter, Mr. Portman. The audience then commenced in form, and was conducted throughout with the most friendly expression of feeling on both sides.

Captain Adams commenced by stating, that it was quite evident that Uraga was not a proper place for the ships, since the anchorage was so much exposed. The Japanese replied, that it had been ordered by the Emperor to receive the Admiral there, and to deliver the answer to the President's letter there. Captain Adams, without at the moment pushing this subject further, handed his card to the prince, and requested his in return. He was told that he should have it in a few minutes, when the Japanese prince, requesting to be excused for a few moments, retired through the curtained door into an adjacent apartment. In the meantime the attendants handed round tea, in small China cups handsomely adorned, and borne upon wooden trays beautifully lacquered. The Japanese interpreters apologised for the meagreness of the repast, and entered into an informal conversation, in the course



of which they asked for the names of the American officers who were present, and inquired whether they were satisfied with Uraga as a proper place for the reception of the President's letter.

This subject was uppermost in their minds, and they seemed resolved to press it on all occasions, as they were very desirous of preventing any nearer approach of the squadron to Yedo; being instructed, no doubt, to attempt to accomplish this purpose at all hazards. They were told that Captain Adams had a letter upon the subject from the Commodore, and were reminded of the severe weather to which the *Vandalia* had been exposed, and how impossible it was to place the squadron in a position so little protected against the stormy season then prevailing.

The prince now entered and his card was handed to Captain Adams, upon which was recorded his full name and title, thus: Hayashi-Daigaku-no-kami, *i. e.*, Hayashi, prince of Daigaku.

Captain Adams now handed the Commodore's letter, which has already been given in full, to the prince, accompanying it with a statement in regard to the insecure anchorage at Uraga, and the necessity of having shelter, space, and smooth water, for mooring the squadron, and repairing one of the ships which had become leaky. He also emphatically declared that it was quite impossible for the Commodore to come to Uraga, but that he would be very happy to send one of his steamers to

convey the prince up the bay to a place of meeting, near the anchorage of the American ships.

The prince and his two coadjutors now retired to consider the Commodore's letter. In the meantime refreshments were presented, consisting of tea, of a cake resembling our sponge cake, candy, various fruits, and their saki.

A general conversation ensued in regard to the building which the Japanese said had been especially constructed for the meeting with the Commodore, the depth of the harbor, and other points of no material interest.

The Japanese interpreters, in answer to the objections urged against the security of the port of Uraga, insisted that it was perfectly safe, and requested Captain Adams to make a survey of it, in order to convince himself; and again and again earnestly urged upon him to entreat the Commodore to bring his ships there, and meet the Japanese high officers, who had been appointed to treat with him; saying that if he would come the whole treaty might be arranged before night. Captain Adams, in answer, said that he would inform the Commodore, when the conversation was interrupted by the reappearance of the three Japanese high dignitaries. Upon entering they announced that they had carefully perused the Commodore's letter three or four times, but were not prepared to give an answer, as they would be obliged to consult the other high officers appointed by the Emperor, and who were now in



waiting at Uraga. On being asked when the answer would be ready, they appointed the third day after the interview. Captain Adams strove to impress upon them the necessity of dispatch, in consequence of the insecurity of the ship in the prevailing stormy weather at Uraga, and of explicitness in their answer, as the Commodore was anxious to bring matters to a conclusion, and to send to America one of his ships to report progress in the negotiations, and prevent others from coming out. The conference now being at an end, the prince and his coadjutors bowed politely and retired.

The weather being stormy and the water in the bay very rough, the American officers delayed their return to the Vandalia, and occupied the interval in strolling about and viewing the neighborhood. Hardly anything could be seen, however, of the town and the people, as the Japanese authorities had, in accordance with their usual custom, hemmed in the shore, on both sides of the audience hall, with cotton screens of some eight feet in height, which excluded the houses from the sight of the strangers. Crowds of men, women, and children could be observed, however, in the distance, thronging upon the surrounding hills, and gazing eagerly at the Americans. When the storm had somewhat abated, Captain Adams and his party, having been presented, in accordance with Japanese practice, with paper parcels containing the remains of the refreshments which had been left upon their plates

or salvers, returned to their ship lying off the harbor. Some went back in the Vandalia's boats, while others accepted the offers of the Japanese officials, and put off in their craft. The superior excellence of the Japanese boats, in a sea, was admirably proved, by the fact that those on board of them reached the ship with dry jackets while the others were wet through and through by the dashing spray. The use of the scull instead of the oar, may partially account for this advantage of the Japanese boats, although their construction has something to do with it. The sculls never leave the water, while the oars are constantly in and out, dipping up considerable spray, which at every stroke is blown, in case of a high wind, all over the persons in a boat of our usual construction.

\* Point Rubicon was a headland, in the bay which had received that name from the Commodore, because it was just abreast of it where the surveying boats, on the first visit to Yedo Bay, had, in spite of some show of opposition on the part of the Japanese, persisted in carrying on the operations with success, and thus passed, as it were, the Rubicon.

○是ヨリ先<sup>十五</sup>日 幕府ハ小倉・松代ニ藩ニ米人應接地ノ警備ヲ命ゼシモ、翌十六日ニ至リ、其命ヲ撤回セリ。依テ、川越・彦根ニ藩、舊ニ仍リ、専ラ米人上陸當日ノ浦賀警守ニ當ル。次ニ其史料ヲ收ム。

〔川越藩日牒〕

○前橋市立圖書館所藏本

安政元年正月二十四日



安政元年正月二十四日

正月廿四日、曇雨、○中略、

一海岸御掛御月番松平和泉守殿、左之御届書壹通、鷺尾金右衛門持參之、御取次松平新造を以差出候處、被成御落手之旨、以同人被仰聞之、

此度渡來之亞墨利加船、今廿四日九ツ時頃、於浦賀屋形浦、亞墨利加使節之者、應接有之候、付、番船拾五六艘差出候様、昨廿三日、浦賀奉行、達有之候段、大津陣屋詰家來之者、申越候、此段致御届候、以上、

正月廿四日

御名

一阿部伊勢守殿、右同斷寫壹通、右同人持參之、御用人渡邊三太平、面會、海岸御月番松平和泉守殿、御届被差出候、付、寫を以御案内被申候旨、御口上申述差出候處、被成御落手候旨、以同人被仰聞之、

一御相持御三手、右同斷寫壹通、爲御案内御留守居迄、御留守居共、紙面を以遣之、但、浦賀奉行、爰元、御壹人も御出無之、付、不差出候事、

一御年寄大御目付篠山攝津守殿、左之御届書壹通、以御使者可相勤之所、例之通御使者相勤候形、宜取計吳候様、用人迄御留守居共、以昏面頼遣之、

此度渡來之亞墨利加船、今廿四日九ツ時頃、○中略、大津陣屋詰家來之者、申越候、付、

海岸御掛御月番松平和泉守様、御届申上候、付、此段申上候、以上、

御名家來

正月廿四日

小倉錄之助

廿五日、晴、○中略、

一海岸御掛御月番松平和泉守殿、左之御届書壹通、鷺尾金右衛門持參之、御取次宇野伊左衛門を以差出候處、被成御落手之旨、同人を以被仰聞之、

昨廿四日、浦賀於屋形浦、亞墨利加使節、應接有之、付、番船差出候處、大風荒波、○中略、異船浦賀湊、難罷越、元掛り場、夏嶋之方へ碇を下候、付、猶又今廿五日、於屋形浦、應接有之候間、昨日之通相心得候様、浦賀奉行、達有之段、大津陣屋詰家來之者、申越候、付、此段致御届候、以上、

正月廿五日

御名

一阿部伊勢守殿御勝手、右同斷寫壹通、右同人持參之、御用人武田小藤太を以差出候處、被成御落手之旨、同人を以被仰聞之、

一御年寄大御目付篠山攝津守殿、左之御届書壹通、名前入以御使者相勤之、但、本文之通可有之處、例之通相勤候形、取計吳候様、御留守居共、用人迄以紙面頼

安政元年正月二十四日

三一八

番船派遣

浦賀奉行ヨ  
リ番船差出  
ノ命ヲ受ク



遣之、

前文同斷、浦賀御奉行様方御達有之段、大津陣屋詰家來之者方申越候之付、海岸御掛御月番松平和泉守様之御届申上候之付、此段申上候、以上、

御名家來

朝岡文平

正月廿五日

廿六日、曇、風立、○中略

一海岸御掛御月番松平和泉守殿之左之御届書一通、鷺尾金右衛門持參之、御取次仁賀保孫之丞を以差出候所、被成御落手之旨、以同人被仰聞之、

昨廿五日、浦賀於屋形浦、亞墨利加使節之應接無滯相濟候之付、番船引取候様、浦賀奉行方達有之候間、番船引拂候段、大津陣屋詰家來之者方申越候、此段致御届候、以上、

御名

正月廿六日

一阿部伊勢守殿御勝手之、右同斷爲御案内、寫一通、右同人持參之、御用人渡邊三太平を以差出候所、被成御落手之旨、以同人被仰聞之、

一御相持御三軒之、右同斷寫一通、爲御案内、御留守居共方以手紙遣之、但、浦賀奉行御兩人共、爰元御詰合無之之付、不差出事、

應接終了セ  
シテ以テ番  
船ヲ引拂フ

一御年寄大御目付篠山攝津守殿之左之書取、以御使者相勤候形之取計吳候様、用人迄御留守居共方以手紙頼遣之、

前文右同斷、浦賀御奉行様方御達有之候間、番船引拂候段、大津陣屋詰家來之者方申越候之付、海岸御掛御月番松平和泉守様之御届申上候、此段申上候、以上、

御名家來

堀内廣治

正月廿六日

〔川越藩主松平典則届書〕

○内閣記録課所蔵本  
通航一覽續編所載

○正月二十六日老中へ

一昨廿四日、亞墨利加使節應接可有之所、大風荒波之る、異船浦賀湊之難漕寄、夏嶋之方之碇を下候、昨廿五日、應接有之候間、一昨日之通り相心得候様、浦賀奉行より達有之段、大津陣屋より申越候段、御届申上候、以上、

松平誠丸

正月廿六日

○正月二十七日老中へ

一昨廿五日、浦賀於屋形浦、亞墨利加使節之應接相濟候之付、番船引取候様、浦賀奉行より

安政元年正月二十四日

三二一



安政元年正月二十四日

三二二

達有之段、家來共より申越候、此段御届申上候、以上、

正月廿七日

松平誠丸

〔彦根藩主井伊直弼届書〕

○内閣記録所藏本  
通航一覽續編所載

○正月二十五日老中へ

此度渡來之亞墨利加將官之船一艘引戻シ、昨廿四日、於浦賀屋形浦應接有之候ニ付、番船拾五艘差出、於陸固之義、多人數無之相固候様、浦賀奉行より達有之候段、御用番御届候旨申越候、

正月廿五日

井伊掃部頭

(續通信全覽)

番船差出ノ件

人數引拂ノ件

○正月二十七日老中へ

一昨廿五日、於浦賀屋形浦、亞墨利加人應接有之候ニ付、浦賀奉行より依達、固人數差出候處、同日午刻頃、亞墨利加人致上陸應接相濟、猶依達人數引拂候段、家來共方申越候、此段御届申上候、以上、

正月廿七日

井伊掃部頭

鳥取藩、本牧守衛中臺場ニ侵入セル米人ノ搦捕及藩主ノ臨機出馬ニ就イテ指揮ヲ候ス。幕府、批シテ之ヲ聽ス。尋二十七日米使應接掛林大學頭輝儒役等、之ヲ聞知シ、其措置穩便ヲ旨トスベキヲ陳ジ、且凡テ之ヲ應接掛ニ委ネンコトヲ稟議ス。

〔鳥取藩伺書〕

○縣立鳥取圖書館所藏本  
鳥取藩從江戸之日記寫所載

○正月二十四日老中へ

此度渡來之異國船内海ニ乗入、或ハツテイラニ乗、致測量候得共、厚く御趣意之儀も有之事ニ付、穩便ニ取扱、且滯船中永キ内ニ退屈も可仕儀ニ付、揚陸等可仕難計候得共、嚴重ニ警衛而已罷在、必立合申間敷旨、於持場家來之者御達之趣一同奉畏居候、乍去萬一臺場等ニ罷越一、備置候筒ニ手出一等致一、又ハ固メ人數之内ニ理不盡ニ入込候様之節、無據搦捕置可然哉、

一異船渡來中萬一異變之模様有之節、此度御達一之趣も御座候、不奉伺御機嫌、直ニ持場ニ出馬仕候心得を以、御内慮相伺候處、登城ニ及不及、出馬之儀、其節御差圖可被成下旨被仰渡、奉畏居候、尙申上候、自由ケ間敷候得共、御差圖無

安政元年正月二十四日

三二三

老中達

米人臺場等へ入り不法行爲アル場合捕縛シテ可ナル哉



異變ノ際注  
進次第出馬  
シテ可ナル  
哉

老中指令

安政元年正月二十四日

三二四

之共、持場家來共々注進之次第ニ寄候るを、臨機之儀ニ付、直ニ出馬仕度奉存候、右之段  
猶御内慮相伺度、各様迄申上候様、相模守申付候、以上、

(池田康徳、鳥取藩士)  
松平相模守内

正月廿四日

永見 鎌吉

御付札

伺之通相心得可申事、

(通航一覽續輯)  
高麗環雜記)

〔米使應接掛林輝等上申書〕

○外務省所藏本  
續通信全覽所載

○正月二十七日老中へ

正月廿七日、和泉守殿に差出候書而寫、○續通  
信全覽

正月廿七日、應接掛之面々御届、○通航一  
覽續輯

亞墨利加船之儀ニ付急速申上候書付

林 大學頭  
戸田 伊豆守

米船ノ動靜

亞美利幹船一艘、一昨廿五日、浦賀表に乘戻し、此節應接中ニ御座候處、昨廿五日、(六)バツテ

鳥取藩ニ對  
スル指令

挑戰セバ應  
接モ水泡ト  
ナル

萬事委任サ  
レタシ

正月廿七日

イラ一艘本牧より内海に乘入、測量もいとし候よし、且又今廿六日、(七)蒸氣船一艘本牧鼻ま  
て相進、外船も追々同所へ艇寄候様、注進御坐候、且松平相模守より、異人小船よて上陸狼  
藉等いとし候節、搦捕可申哉之旨相伺候處、伺之通被仰渡候由、右に應接中にて、聊殺氣無  
之證據の爲、本牧鼻海中へ白旗建置候義故、右に對し、万一當方より手出仕候得と、忽戰爭  
と相成、應接も水之泡と相成可申、異人とも無名之戰を仕らぬ、畢竟を武威を以て諸願相  
立可申と見込候義ゆへ、右に拘合不申、柔順に御國威を不失様、應接可仕と奉存候事ゆへ、  
彌々本牧内手へ乘入候共、先ッ私方へ爲御任被置候様仕度、此段申上候、以上、

林 大學頭 (稱、備後)  
井戸 對馬守 (覺取、町奉行)  
戸田 伊豆守 (氏榮、浦賀奉行)  
伊澤 美作守 (政義、浦賀奉行)  
鶉殿 民部少輔 (長親、目付)  
松崎 滿太郎 (知候、備後)

(通航一覽續輯)

〔鳥取藩從江戸之日記寫〕

○縣立鳥取  
書館所藏本

安政元年正月二十四日

三二五



安政元年正月二十四日

三二六

老中達

正月十七日、○中略

一今日、御懸り御月番松平(兼老中)和泉守殿より御留守居被召呼、罷出候處、公用人を以、左之趣御達有之候段、同人申達之、

異國船近海に渡來之節、其様子に寄、人數屋敷内に致用意置、先不及登城、老中の方案内次第登城可被致候、其節に可成丈ヶ輕輩を相省キ、士分之者重に小勢に召連、若人數出張之儀相達候ハ、出火之節之振合を以、先一手ツ、様子を見合を可被差出候、其餘に臨機之事に候得と、其心得に可有之、場所等と其節相達せる可有之候、別紙之趣と、此度渡來之異國船に限り候儀と無之候間、其旨相心得可申事、

十八日、○中略

一左之面々儀、此度異國船渡來に付、臨時

御出馬之節、御供被仰付旨被

仰出、其段夫々呼出に申渡之、尤御目付出座と無之、

其方共儀、此度臨時

田村甚左衛門  
岡村喜兵衛

臨時出馬ノ際ノ供人數

異船渡來ノ際ハ案内次第登城スベシ

御出馬之節、御供被

仰付旨、被仰出候、

長谷川八衛  
白井重之進

其方共儀、右同斷、

津田右門

其方共儀、右同斷、

岩越次郎兵衛

其方共儀、右同斷、

隱岐久兵衛  
小林竹之丞

其方儀、右同斷、

黒部權之介

中村中  
永見善太夫

安政元年正月二十四日

三二七



安政元年正月二十四日

三二八

其方共儀、右同斷、

安留與三郎  
大竹俊藏

其方儀、右同斷、

馬淵官兵衛

其方共儀、右同斷、

伊木久右衛門  
二宮奎之助

其方儀、右同斷、

遠藤平八

一左之面々儀、右同斷之節、

御留守残り被 仰付旨被 仰出、其段夫々呼出申渡之、

御用人請持

井尻庄介  
嶋村喜

御奏者請持

洞美隼人  
賀美隼人

加納男教

小野三郎兵衛

堀又造

山本三七郎

藤野喜兵衛

淺井健之助

安田和六

一右同斷之付、臨時

御出馬之節、御供可被 仰付間、

御留守残り共、名前急之取調申達候様、左之面々之、左之通申渡之、

御用人

觸口又觸共

安政元年正月二十四日

御番之面々

三二九

番頭



安政元年正月二十四日

三三〇

御目付

御留守居

觸口之者共

勘定頭

廿日、○中

一昨晚本牧方之認メ次第御飛脚今朝五半時到來、御用向左之通申來、委細來狀扣有之、異國船萬一持場之揚陸致一候節之、如何取計可申哉、兼る心得置申度奉存候、此段奉伺候、以上、

異船警備區域内侵入ノ時ノ處置ヲ候ス

御名内

正月十七日

岡部善右衛門

一今日認次第本牧方之御飛脚、今晚七半時到來、左之通申來候、委細來狀扣有之、松平和泉守殿御達之旨之、御徒目付兩人、御小人目付差添、御留守居同道、今晚七時、(當尾、島取藩家老)駿河本陣之罷越左之趣御差圖之旨、申聞候由、此度異船渡來之付るを、萬一内海にも乗込、或る小船之乗測量致一候とも、其儘之差置、兎角穩之取扱可申候、揚陸致一候共、手取之仕候様成る事之無之様之末々之

異人ハ上陸スルモ捕フベカラズ

者迄之申渡、嚴重之人數相備置候様、孰兵端之儀之又々模様之寄、御差圖次第候旨、口述之被 仰渡候、

廿二日、○中

一左之趣、今朝御懸り御月番松平和泉守殿之御留守居を以被成御届、且又左之趣、去ル十九日御同家之右同人ヲ以被成御伺置候處、今日御同家方御呼出之、左之通御付札ヲ以御差圖有之候段、右同人申達之、○中

伺書提出

異變ノ際ハ即時本牧警備地ニ出馬シテ可ナル哉

此度渡來之異船、萬一異變之模様有之節を、不取敢登

城奉伺 御機嫌、直様本牧持場之出馬仕候心得之罷在候處、昨日御達之趣之付、最早不奉伺

御機嫌出馬仕候心得之御座候、此段御内慮奉伺置候様、相模守申付候、以上、

松平相模守内

正月十九日

永見 鎌吉

御付札

登 城之不及候、出馬之儀を其節可及差圖候事、

老中指令

安政元年正月二十四日

三三一



出張藩兵ノ心得

廿四日、○中略、

一今日、認次第本牧表々之御飛脚、晚七半時過到來、左之通申來、委細來狀扣之有之、

一左之趣、本牧詰之面々、去ル十一日申渡一候間、御序之申上候様、當御場所御警衛爲御手當罷越一候面々、心得方之儀を、御軍令こも被 仰出、何事も相心得居申儀之候得共、第一上一和一して禮讓厚く、持場所嚴重之相守、夜分も度々致見分、

公邊御役人不時廻り等有之節、御不都合無之様、兼る其旨相心得、於陣中を、假令如何様之意趣遺恨、聊之儀を共爭論ケ間敷儀無之様可致、是非不叶儀を、追る配頭之差圖之任ヤ可申、萬一異船上陸致一候共、

公邊御達之趣も有之儀、猶又容易之動搖不致、自分之持場所彌以嚴重之相固メ、不作法無之様、且又於御場所、

公邊御役人々見受候を、何事之不限應答、早速御留守居共案内致一、無禮無之様取扱候様、未々迄堅可被申付事、

廿五日、

一左之趣、昨廿四日、御懸御月番松平和泉守殿御勝手、御留守居々相伺置候處、今夕御呼

出一こる罷出候處、左之通御書取ヲ以御差圖有之候段、同人申達之、○中略

一右之趣、本牧表認次第御飛脚差出之、

〔安達清風日記〕

正月廿二日、晴、早天發沼津、晚至大磯、自大磯戴星而出、至武州本牧、天既曙、直問家翁、

廿三日、晴、在本牧家翁之營、亞墨利伽船七艘、在本牧港、藩大夫荒尾駿州、番騎隊長宮脇備

州、加藤丹下、火器隊長八人備沿海、巳牌、見補大磯方、屬津田氏、八王子十二天關于津田

氏、余守八王子、

辰牌、亞奴小船二艘、來八王子山下、記姓名而去、此日官賜黃金五兩、安田叔父君、屬荒尾

氏、山部賢兄兼監察、

○欄外記事

去年十二月念七、有命日、六月亞奴窺邊、某忠在親隊之列、雖未發奴退、以旨賜上下服一領、此日始聞命家翁、

廿四日、大風雨、終日在磯臺、風雨撼臺、臺如船、即吟知章乘馬似乘船之句、異船無異、

○鳥取藩ノ武器取寄セニ關スル史料ヲ次ニ收ム。

〔鳥取藩從江戸之日記寫〕

○縣立鳥取圖書館所藏本

二月朔日、○中略、

安政元年正月二十四日



安政元年正月二十四日

三三四

大小砲及武器關所通行ニ關スル何書

一左之趣、昨廿九日、松平和泉守殿に御留守居を以爲御伺被成候處、今日、御同家より御呼出  
こる、左之通御書取を以、御差圖有之候段、同人申達之、右之趣、本牧表に申遣之、  
相模守、本牧本郷村御警衛御用被 仰付候に付る、此度大小砲を始、武器類馬具等  
をも國許より追々差越候節、御關所鐵炮罷通候儀、平常之通、證文御裏印等、前以相願候  
様こる、乍自由遠路急速之往返不都合之儀も御座候に付、陸路之分ち、今切御關所、  
船路之分ち、浦賀御番所共、其品に寄、御定法之趣も有之候得共、其節々付添之者より相  
斷、包荷之儘無滯罷通候様被成下度奉願候、此段各様迄申上候様申付候、以上、

松平相模守内

正月廿九日

賀美隼人

御書取

書面之趣を、此度に限り、今切關所浦賀御番所共、家老證文に罷通、時宜に寄、付  
添之内重立候家來より證文差出相通、追る其段可相届候、尤自餘之見合に難相成候  
間、可被得其意候事、

老中指令

長瀨藩主米津政懿

越中守

卒ス。

嘉永六年十一月二十五日

是日、養子啓次郎

政易○後相模守○庄内藩主酒井忠發弟

家

督ヲ承ク。

〔老中申渡〕

○東京帝國大學所藏本  
幕府沙汰書所載

○正月二十四日政懿養子米津啓次郎へ

正月廿四日、

大坂御定番  
越中守養子

米津啓次郎

名代 永井若狹守

越中守（會知）「奉願置候通」遺領無相違、養子啓次郎に被下、菊之間縁頼詰被 仰付之、

（前部正取）  
右、於芙蓉之間、老中列座、伊勢守申渡之、

〔溫恭院殿御實紀 安政年録 西九日記〕

〔安政年録〕

○内閣記録  
課所藏本

二月十五日、

一今已上剋、御表に 出御、月次之御禮相濟、

御白書院

家督之御禮

安政元年正月二十四日

三三五

米津啓次郎  
遺領相續  
ヲ命ズ



米津啓次郎  
家督相續ノ  
禮

安政元年正月二十四日

金貳枚  
卷物貳

右、畢る入御、

○温恭院殿御實紀・幕府沙汰書、マタ本書ト同一内容ノ記事ヲ載ス。

〔上總  
大綱〕米津家譜

○東京帝國  
大學所藏本

米津政懿ノ  
事蹟

勘兵衛通政、○中、寛政十一年己未十二月八日、病ヲ以テ隱居ス、文政二年己卯六月十三日、七十歳ニシテ死ス、男三太郎政懿封ヲ襲フ、文化三年十二月十六日、從五位下ニ敍セラレ、同四年丁卯二月廿三日、竹橋門ノ守衛ヲ務ム、同六年己巳九月二日、日光山東照宮祭典ノ奉行トナリ、同七年庚午二月二日、大坂ノ加番トナリ、同九年壬申二月十六日、竹橋門ノ守衛ヲ務ム、同十年癸酉六月十六日、半藏門ノ守衛ヲ務ム、同十二年乙亥六月十五日、竹橋門ノ守衛ヲ務ム、同年九月二日、日光山東照宮祭典ノ奉行トナリ、文政二年己卯八月十六日、田安門ノ守衛ヲ務ム、同四年辛巳六月十四日、竹橋門ノ守衛ヲ務ム、同年九月二日、日光山東照宮祭典ノ奉行トナリ、同六年癸未二月二日、大坂ノ加番トナリ、同八年乙酉二月二日、大坂ノ加番トナル、同十年丁亥六月廿八日、一橋門ノ守衛ヲ務ム、同十二年乙丑六月十九日、竹橋門ノ守衛ヲ務ム、天保二年辛卯二月二日、大坂ノ加番トナル、同六年乙未八月十六日、馬場先門ノ守衛ヲ務ム、其後天保十三年壬寅六月迄、數度江城各門ノ守衛ヲ勤タリ、同

三三六

米津啓次郎

米津政易ノ  
事蹟

年十二月廿八日、大坂城玉造口ノ定番トナリ、弘化元年甲辰十二月廿八日、江城修繕ニ依テ金三百兩ヲ獻ス、同三年丙午六月廿四日、出羽國村山郡ノ内鷹巢村ニ藤袋村・本楯村併三ヶ村上地シ、武藏國埼玉郡ノ内稻子村・上村君村・下村君村・上崎村・下崎村併セテ五ヶ村代地トシテ給ル、嘉永六年癸丑十一月廿五日、大坂城ニヲヒテ死ス、歳六拾五、政懿子ナシ、酒井左衛門尉忠發ノ弟啓次郎政易ヲ養子トシテ封ヲ襲フ、同七年甲寅十二月十六日、從五位下ニ敍セラレ、安政四年丁巳三月十日、大坂加番トナル、同六年己未六月十四日、半藏門ノ守衛ヲ務ム、万延元年庚申五月九日、病ヲ以テ隱居ス、政易子ナシ、酒井左衛門尉忠發ノ弟鏞助政明ノ弟ナリヲ養子トシテ封ヲ襲シム、○下略、

三太郎、勘兵衛ト改ム、從五位下、伊勢守、復越中守ト改ム、於武藏出生、

通政 政懿

嘉永六癸丑年十一月二十五日於攝州大坂死、于時六十五歳、  
法名、文宗院仁道玄智、武州前澤米津寺ニ葬、  
室、中山備中守丹治信明女、  
後、菅沼新八郎源定邦養方叔母離縁、

安政元年正月二十四日

三三七



安政元年正月二十四日

三三八

又、森越中守源忠敬養方叔母、  
母、家女、

某榮三郎、早世、  
母右二同、

某勘兵衛、早世、  
母定邦養方叔母、於武藏出生、

文政七甲申年九月十一日、於江戸死、

法名、穎秀院神彩玉山、深川本誓寺、

政饒 晉六郎、監物、  
實松平下總守源忠發弟、

天保十四癸卯年三月二十八日、於江戸死、于時二十七歲、

法名、峻徳院光轉淨超、深川本誓寺、

室、堀大和守菅原親實女、

某邦丸、  
母家女、

政易 啓次郎、從五位下、相模守、於武藏出生、  
實酒井左衛門尉源忠發弟、

萬延元庚申年五月九日、隱居、

女子 榮子、  
母家女、

女子 壽子、  
母右二同、

政明

〔羽前 酒井家譜〕  
○東京帝國大學所藏本

忠器

忠發

小五郎

攝津守

從五位下

文政九年十二月十六日

叙任

左衛門尉

天保四年十二月十六日

叙從四位下

嘉永元年四月五日

任侍從

文久元年八月六日

致仕

號豐山

女子 早世

女子 內藤紀伊守藤原信思室

正修 哲次郎

增山彈正少弼藤原正寧養子

安政元年正月二十四日

三三九



安政元年正月二十四日

三四〇

- 忠中 悦之助
- 長義 鋼三郎
- 市橋主殿頭藤原長富養子
- 某 錦之助 早世
- 某 銀次郎 早世
- 女子 早世
- 女子 松平隱岐守源勝善室
- 政易 啓次郎
- 米津越津守藤原政懿養子
- 女子 早世
- 政明 鏘助
- 米津相模守藤原政易養子
- 女子 早世
- 女子 早世
- 女子 松平右京亮源輝承室

- 女子 五嶋近江守源成盛室
- 女子 早世
- 女子 早世
- 女子 松平主殿頭源忠精室
- 忠寬 富之進
- 兄忠發養子
- 某 虎次郎 早世
- 某 春次郎 早世
- 女子 早世

二十五日丑乙 小柴沖碇泊ノ米國艦隊、故大統領華盛頓誕辰ニ當ルヲ以テ祝砲ヲ發ス。

〔米使應接掛林輝等上申書〕

○内閣記録課所藏本  
通航二覽續輯所載

○正月二十三日老中へ

アメリカ船引戻方之義、追々申諭候處、少々之相和候故、引戻方納得も可仕哉之見受候由、

安政元年正月二十五日

三四一



安政元年正月二十五日

三四二

米艦祝砲ノ件

浦觸ヲ出ス

(浦賀奉行支配組)  
黒川嘉兵衛立辰申聞候、然る處、來廿五日、ワシントン誕生日故、船々白晝一艘凡十六七發ッ、祝砲仕候由、届申出、右を差留候ると引辰方も相響き可申と奉存候故、爲取締右船々組之を差遣し可申、砲聲數發ふそ心得違之をも可有御坐哉と、品川宿まて浦觸差出置、此段先申上置候、以上、

正月廿三日

林	大學頭
井戸	對馬守
戸田	伊豆守
伊澤	美作守
鶺殿	民部少輔
松崎	滿太郎

〔浦賀奉行浦觸〕

○内閣記録課所藏本  
通航一覽續編所載

正月廿三日、浦觸、

來ル廿五日、小柴沖滞留之異船なる、アメリカ國王之誕生日ニ付、右七艘之異船なる、祝として空砲十六七發宛打之候間、聊心配之儀を無之候條、動搖いふを間敷をの也、

(伊澤政義、浦賀奉行)  
美作印

(戸田兵衛、浦賀奉行)  
伊豆印

浦賀々海岸附村々

名主	江
年番	江

〔忍藩主松平忠國届書〕

○内閣記録課所藏本  
通航一覽續編所載

○正月二十四日老中へ

此度渡來之異國船、今廿四日、相州於館浦應接有之候旨、且明廿五日、彼國祝日ニ付、船中なる空砲數發打放候趣、浦賀奉行所々、爲心得達有之候段、同所に出張家來之者々申越候、此段御届申達候、以上、

正月廿四日

松平下總守

〔老中松平乘全書翰〕

○東京帝國大學所藏本  
高麗環雜記所載

○正月二十四日側衆石河貞大宛

晝八半時、到來、  
亞墨利加船引辰方之儀、追々申諭候處、少一ハ相和候故、引辰方納得も可致哉ニ見受候由、黒川嘉兵衛立辰申聞候、然ル處、廿五日、ワシントン誕生日故、船壹艘凡十六七發も祝砲致

安政元年正月二十五日

三四三

浦賀奉行達ノ件

林等上申書ノ件



安政元年正月二十五日

三四四

候由、届申出、右を差留候ると引戻方にも相響可申と存候故、爲取締右船組之者差遣可申、炮聲數發せる心得違之者も可有之哉と、房總相武海岸に浦觸差出置候旨、林大學頭申聞候、此段可被入 御聽候、以上、

正月廿四日

松平 和泉守

石河美濃守様

〔老中達〕

○帝國圖書館所藏本  
徳川幕府書寫外國事件書所藏

○正月二十四日町奉行池田頼方へ

〔朱書〕  
〔寅正月廿四日、以御使來ル、〕

〔朱書〕  
〔一年番  
町年番  
へ達ス、〕

池田播磨守殿

松平 和泉守  
〔松平與全老中〕

別紙書付差越候間、可被得其意候、以上、

正月廿四日

松平 和泉守

池田播磨守殿

覺

祝砲ニツキ  
市中動搖セ  
ザル様處置  
スベシ

渡來之異國船平穩ニ候得共、明廿五日と、彼國祝日ニ付、船中ニ銃炮數發打放候旨申立候段、浦賀奉行方注進申越候、右炮聲承り候共、動搖致間敷、併彼方事情も難計事ニ付、其心得せる油斷無之様、尤右之趣浦賀奉行方浦觸差出候得共、爲心得海岸御固之面々相達候間、得其意、市中ニるも動搖不致様、可被取計事、

正月廿四日

〔町奉行達〕

○帝國圖書館所藏本  
徳川幕府書寫外國事件書所藏

○正月二十四日江戸町名主へ

〔朱書〕  
〔寅正月廿四日夜、御向方被遣之、對馬守に便之節申遣、〕  
〔南町奉行〕  
〔井戸敷、北町奉行〕

市中取締  
諸色掛  
名主  
年番  
名主  
共

此度渡來之亞墨利加船沖合ニ滯船以多し居候處、明廿五日國王之誕生日ニ付、歡之爲船

安政元年正月二十五日

三四五



米艦祝砲ニ  
ツキ動搖ス  
ベカラズ

安政元年正月二十五日

三四六

中こる空炮打可申旨、浦賀奉行々届出候間、海岸近町々にて右音聞可申哉候得共、右邊を勿論市中一統恐怖致間敷候、

正月廿四日

〔諸用留〕○内閣記録課所蔵本

正月廿四日、

扣

諸家相達候書付

渡來之異國船平穩候得共、明廿五日と、彼國祝日付、船中こる祝砲數發打放候旨申立候段、浦賀奉行々注進申越候、右炮聲承り候共、家來下々迄動搖致間敷、併彼方事情も難計事付、其心得こる油斷無之様可致候、尤右之趣浦賀奉行より浦觸差出候由候得共、爲心得御固場迄早々可申越候

右之趣、井伊掃部頭・松平肥後守・松平下總守・松平誠丸・松平越後守・松平越前守・松平阿波守・松平隱岐守・松平相模守・松平兵部大輔家來呼可達事、  
但、細川越中守・松平大膳大夫・松平内藏頭・立花飛驒守も、爲心得家來呼可申聞置事、

米艦祝砲ニ  
ツキ老中達  
動搖ヲ戒ム

正月廿四日

〔廿四日持歸、爲廻り、備前守殿遣ス、〕

〔村垣範正公務日記〕○村垣範通所蔵本

正月廿四日、例刻、

一亞米利加船こる、明廿五日、ワシントン誕生日付、祝砲一艘こる十七八發充空炮以多し候旨申出、浦賀こる聞届、檢使與力御徒目付等差遣し、尤浦觸以多し候段も申越、町觸并諸家御固之向等へ通達御差圖有之、

〔安政甲寅日記〕○帝國圖書館所蔵本

正月廿四日、

一明廿五日、アメリカ國元祖之王ハシントン誕生日に相當候付、勇氣祝之爲、渡來之船何れも大砲打候旨、浦賀奉行々申出候趣申越候、

〔仙臺橋本九八郎日記〕○維新史料編纂會所蔵本

正月廿四日、晝少々雨、雪氣之、○中略、

一ハシントン誕生日付、明日勇氣祝の爲、空炮打候、尤一艘こる十五六發ツ、打候由、米夷申出、御聞置に相成、御固メ向々御達一之由之、

安政元年正月二十五日

三四七

祝砲一艘ニ  
ツキ十數發



安政元年正月二十五日

三四八

〔老中達〕

○東京帝國大學所藏本  
幕府沙汰書所藏

○正月二十四日福井藩主松平慶永へ

松平越前守

渡來之異船平穩ニ候得共、明廿五日、彼國祝日ニ付、船中ニ在る鐵炮數發相放候旨申立候段、浦賀奉行方申越候、右炮聲承り候共、家來共ニ達、動搖致間敷、併彼方事情も難計ニ付、其心得ヲ以油斷無之様可致候、尤右之趣、浦賀奉行方浦觸差出候由ニ候得共、爲心得御固場所ニ早々可申越候、

右、今夕、於和泉守宅家來呼出、達之、

但、御固之諸家海岸附屋敷有之面々にも達之、

（通航一覽續輯）

米艦祝砲ニ  
ツキ動搖ス  
ベカラズ

〔川越藩日牒〕

○前橋市立圖  
書館所藏本

正月廿四日、曇雨、○中略、

一海岸御掛り御月番松平和泉守殿御用人中々、御留守居共ニ、以剪紙御達之儀有之候間、只今壹人可參旨申來候ニ付、即刻鷲尾金右衛門罷出候處、御用人中川善右衛門を以、左之御書付壹通御渡之、

祝砲ニ關ス  
ル老中達

渡來之異國船平穩ニ候得共、明廿五日、彼國祝日ニ付、船中ニ在る祝砲數發打放候旨申立候段、浦賀奉行より注進申越候、右炮聲承り候共、家來末々迄動搖致間敷、併彼方事情も難計事ニ付、其心得ニ在る油斷無之様可致候、尤右之趣浦賀奉行より浦觸差出候由ニ候得共、爲心得御固場所ニ早々可申越候、

一右御同方ニ、右御書付之趣被成御承候御請立戻り、御使者右同人相勤之、御取次松平新造御口上申述候處、留置可申聞旨申聞之、

一御城御當番御目付中々、御格達壹通、御使を以來ル、  
明廿五日、異船ニ在りて祝儀事有之、空炮連發致候趣ニ付、動搖致間敷旨、海岸屋敷有之向ニ可申達旨、和泉守殿被仰渡候、仍之申達候、以上、

正月廿四日

岩瀬

修理（忠實目付）

永井

岩之丞（備忘目付）

堀

織部（利忠目付）

御名殿

留守居

〔津山藩日記〕

○子爵松平  
康春所藏本

安政元年正月二十五日

三四九

目付達



正月廿四日、曇風、○中略

一海防御掛り御月番松平和泉守殿御勝手御呼出之付、御留守居介松本八左衛門罷出候處、左之御書付壹通、御用人南八右衛門を以御渡、請取來、

渡來之異國船平穩之候得共、○中略

廿五日、晴風、○中略

一高輪御陣所御徒目付兩人罷越、左之通御達之旨申聞候付、御請取計候段、出張之大番頭代渡邊甚介より申越之、

(武藏郡久良岐郡)杉田沖之掛居候異國船、今廿五日、祝儀事有之、於船中大炮數發相放候間、所々御固之

面々、右炮聲動搖不致、決る卒爾之取計無之様、相心得可申旨、和泉守殿御差圖之付、

堀織部殿御達之旨、御徒目付星野新太郎・片岡彌左衛門罷越申聞候、

〔秋藩家老〕浦元襄日記○維新史料編纂會所藏本

正ノ廿四日、天氣、

一松平和泉守様御呼出之付、公儀人罷出候處、亞墨利加船明祝日之付、大炮數發打放候段申出候間、格別ハ有之間敷候へ共、右様孰も心得、由斷無之様との事之候、亞墨利加王誕生日之由之候事、

〔土浦藩士〕中田正誠雜記○大谷正道所藏本

寅正月廿六日、聞、

此度渡來之亞墨利加船々、明廿五日、ワシントン誕生日之付、壹船之る拾六七發ツ、祝發以多一候旨、浦賀奉行之相届候趣之付、爲心得申達候、品川高輪之るも爲心得置候方可然候、

正月廿四日

〔溫恭院殿御實紀〕○續徳川實紀所載

正月廿五日、○中略異國船中發祝砲、○中略

一亞墨利加國主誕日に付、祝砲十艘（一）に於て十七發づ、但號令官コマダント、官名也砂時計にて其間合を計り、ループルを以てこれを傳ふ、ループルとは、數町の外へ聲の届く道具也と云ふ、

一右前日御觸、此度渡來之アメリカ船沖合滯船致居候處、明廿五日國主誕生日に付、歡之爲船中なる祝砲打可申旨、浦賀奉行之届出候間、海岸付之町に於て一統恐怖致間敷旨、被觸之、



安政元年正月二十五日

三五二

〔米使應接掛林輝等届書〕

○内閣記帳課所蔵本  
通航一覽續編所載

○正月二十五日老中へ

一昨廿三日御届申上候通り、今廿五日、異船にて祝砲仕候に付、今日、組之もの御目付方立合爲取締罷越候處、無滞相濟候旨、一同立戻申聞候に付、此段御届申上候、以上、

正月廿五日

林 大學頭  
井戸 對馬守  
戸田 伊豆守  
伊澤 美作守  
鵜殿 民部少輔  
松崎 滿太郎

米艦ノ祝砲  
無事終了ス

〔江戸町名主上申書〕

○帝國圖書館所蔵本  
徳川幕府書翰外國事件書所載

○正月二十五日町奉行へ

〔表紙〕  
〔上〕

廻船問屋  
大島屋三右衛門

上乗 代 佐 兵 衛

日高屋龜五郎

同 代 新 助

右に、昨廿四日暮六半時、當地出帆、今曉七時頃、本牧邊に罷越候處、同所王子權現下迄、兼る異人彫付候亞墨利加文字之義、御下知之由なる因州様御人數罷出消落居申候、同晝四時頃、猿島沖に仕立船乗廻し、見張罷在候處、昨日、同所邊に乘戻し候異船壹艘、同刻帆を上ケ、猶又觀音崎沖合に浦賀之方迄走り候を見留、直に乘返し候、途中小柴村沖異船五艘、杉田沖同壹艘共、事替候義無御座候、且今晝九時頃半時程之間に、右異船なる空砲凡百貳參拾度程打申候、依之同晝九半時頃、同所出帆、只今着船御注進奉申上候、右奉申上候、以上、

正月廿五日

夕八時過

名 主 共

〔表紙〕  
〔上〕

廻船問屋  
山際屋  
太郎兵衛

安政元年正月二十五日

三五三

祝砲百二三  
十發アリ



安政元年正月二十五日

山田屋

三五四

義兵衛

右之、昨廿四日夕八半時、陸こる當地出立、夜五半時、神奈川に着、今廿五日朝六時、同所  
舟こる乗出し、小柴沖に罷越候處、同所異船五艘杉田沖異船一艘共無別條、然ル處、猿  
島沖に乘廻候異船壹艘を、浦賀之方に參り候様子に御座候、小柴沖異船五艘之内こる、  
今晝時過、大筒七八拾度空炮相發申候ヲ見留、私共船乘戻し候處、當十九日、異人共相立  
候目印、猶又本牧之方に寄り壹里程隔、高サ壹丈五尺程有之候ヲ相立申候、依之猶又神  
奈川に上陸、只今着御注進奉申上候、  
右奉申上候、以上、

正月廿五日

夜四時

名主共

〔關東取締出役渡邊園十郎上申書〕

○帝國圖書館所藏本  
徳川幕府書類外國事件書所藏

○正月二十五日南町奉行用人竹村俊次等へ

〔朱書〕  
關東取締出役渡邊園十郎、向方用人中へ申越候由、向方留記寫、

別紙浦賀邊風聞并及見聞候義、御覽置迄に奉申上候、右之書物多、別紙を下書之儘差出、奉  
恐入候、宜御取繕奉願候、以上、

正月廿五日

西浦賀廻り先

渡邊園十郎

浦賀邊風聞  
等ヲ上申ス

品川浦賀間  
海岸ノ人氣

米艦ノ動靜

應接地協定  
ノ交渉

米人ノ態度

竹村俊次様  
安井錦作様  
富田小源太様

○別紙

此程、品川宿々海邊通、神奈川・本牧・金澤・浦賀邊、右最寄とも、都る人氣穩相替義無之、  
同所米直段六斗壹貳升位、是又差支無御座由、且異船碇泊場所ハ、矢張夏島々本牧・小柴  
三ヶ所沖合に七艘罷在候、ハツテイラを、日々元船近邊又を沖合海岸を乗廻り、深淺ヲ  
量、且地方之様子及見候躰に相聞、扱又浦賀に異船に度々掛合、最初に鎌倉光明寺へ異  
人上陸、於同所應接可致旨申談候由之處、副使ナビアタムツ申答候を、御返翰御渡相成  
候ハ、可罷出、左も無之候ハ、唯今碇泊場所に罷在、御返答可相待、若又強る上陸被  
仰付候ハ、小柴・本牧又を品川邊に被仰付度、夫こるも御返答御決無之候ハ、江戸表  
迄も可罷出旨申居候由、正使「マツテセヘルリ」を病氣之由こる、未浦賀手と面會不致  
由、都る是迄之應答副使之答に御座候由、尤異船に乘込候得を、船中を勿論蒸氣船車仕  
懸等こ至迄、夫々掛り異人案内致し、聊取隠しなく念頃こ見え、且應對も至極神妙こ有  
之、船中部屋々手道具等取出し見え、或を茶菓子銘酒杯差出、折々雑話も致し、都る親し

安政元年正月二十五日

三五五



安政元年正月二十五日

三五六

浦賀應接

く相成候、

一昨廿四日、七艘之内壹艘浦賀御番所外屋形浦に引出し、上陸爲致、一先應接可有之筈、一昨日を再應申諭、承伏致、昨廿四日晝時頃、御番所前迄壹艘乗出候處、南風烈敷上陸難成、無餘義元場所へ乗戻、今廿五日のち參候由に候へ共、如何可有之哉に御座候、上陸之上を、異人とも御料理被下候筈、尤正使を參り申間敷哉、中官とも候哉、

一今廿五日を、アメリカ國王誕生日に付、七艘共右之祝ひとして空炮拾六七發宛打放候間、心配致間敷旨、昨日、浦賀御役所を浦觸相廻申候、昨年と違ひ、陸手も事馴候哉、都る穩、異人も同様平和に御座候、

祝砲

諸家警固地

諸家御固凡左に

大井村	土州	人數
鈴ヶ森	隱州	人數
八幡	不入斗村	
大森	阿州	人數
羽田		

神奈川	明石	同
本牧邊	因州	四手同
野嶋	米倉	丹後守
大津邊	川越	同
三浦邊	彦根	同

右を、何れも沿岸野陣嚴重に相見申候、

右場所風聞及見聞候趣、荒増奉申上候、以上、

寅正月廿五日

下ケ札

本文相認候處、昨日引戻候異船壹艘、今已中刻頃、浦賀御番所前迄乗出申候、然ル上を、今日應接に相成可申哉、

〔松代藩士佐久間修理書翰〕

○象山全集所載

○正月二十四日同藩在府家老望月主水宛

只今長岡藩より參り居候門人小林虎三郎と申もの、其御屋敷より罷歸り申聞け候は、明日ワシントン<sup>アメリカ合衆國開基之人</sup>の生日に付、内海へ乗入居候異船共、大砲壹門に付拾六發宛打放し

安政元年正月二十五日

三五七

米艦祝砲實況視察ノ許可ヲ請フ



候と申事、其届有之候よし、慥かなる事と申義に御座候、右行装をば心得のため一見仕置き申度、今夜中より金澤まで罷出居り、右一見仕、明夜晩くも罷歸り候様仕度奉存候、此段御聞置き可被成下候、以上、

正月二十四日

望 主水様

佐久間修理

○正月二十六日同藩在府家老小山田壹岐宛

昨二十五日ワシントン生日に付、異船ども大砲祝發候義に付、其様子柄心得の爲め一見仕置き申度御聞置き申上、一昨夜中出立仕、昨日右祝發の模様一覽仕、昨夜深更歸宅仕候、此段申上候、尙委細は罷出可申上候、以上、

正月二十六日

小 壹岐様

佐久間修理

〔鳥取藩從江戸之日記寫〕

○縣立鳥取圖書館所藏本

正月廿四日、○中略、

一御懸り御月番松平和泉守殿々、今晚、御呼出ーこる、則賀美隼人罷出候處、左之通御達有

祝砲ニ關スル老中達

之候段、同人申達之、

渡來之異國船、平穩ニ候得共、明廿五日、彼國祝日ニ付、○中略、

公用人口達

吳々心弛ミ無之様ニ付、

一右ニ付、今晚、認次第本牧表に御飛脚差出之、○中略、

一浦賀御奉行々、來ル廿五日、小柴沖滞留之異船こる、アメリカ國王之誕生日ニ付、右七艘之異船こる、祝として空炮十六七發宛打之候間、聊心配之儀ニ無之候條、動搖致間敷旨、御達有之候處、空炮之儀ニ付、誤る此方々致炮發、對 公邊御不都合有之候るニ不相成儀ニ付、假令如何様之儀有之候共、猥ニ不立騒、御差圖有之候迄を穩ニ取計候様、夫々申渡置候間、宜申上旨、

廿五日、○中略、

一今日認次第本牧方之御飛脚、今夜四時頃到來、左之通申來ル、委細來狀扣ニ有之、

一從 公邊昨日御達之趣も有之處、唯今異船こる空炮數發打放候得共、外ニ相替候儀無之旨、

一安達辰三郎悴<sup>(清風)</sup>志津馬儀、爲御手當呼寄候様被 仰付置、一昨廿三日本牧表に著致一候

安政元年正月二十五日

三五九

祝砲ノ實況ヲ觀察シテ歸宅ス



安政元年正月二十五日

三六〇

處、御手薄之付、直之爲相詰、大筒懸り被 仰付旨、申渡候由、  
一昨廿四日、松平和泉守殿々御達之旨ふる、大炮打候節、御固之面々決る卒爾無之様可  
致旨、御徒目付左之兩人、加藤丹下本陣之夜前罷越、同人之對面申達候旨、

星野新太郎  
片岡彌左衛門

〔合同舶入相秘記〕

○松平慶永手記  
東京帝國大學所藏本

正月二十四日、

今晚、松平和泉守ヨリ呼出、留守居罷出候處、御勝手ニテ○中、公用人書付相渡、

渡來之異國船平穩ニ候得共、○中

右之趣傳（前用人）左衛門申達之、家老へ傳左衛門申達、山城ヨリ（前家老）三郎兵衛迄以馬方申越、

二十五日、洋曆二月二十二日、

朝負・目付土屋十郎右衛門品川持場へ差越、

昨日、和泉守ヨリ達有之候墨船祝炮射放、九ツ時比ヨリ相始マリ、無程炮聲相止、多分百發  
計リモ有之候哉、

右墨船祝煩射發之儀者、今日、話聖頓生誕ノ日ニ付、祝有之様風説有之、坤輿圖識補ヲ以テ

米船ノ祝砲  
百發計リ

見レハ、華盛頓生誕ハ、我享保十九年ト記載ス、西曆千七百三十四年也、ヒルギニアノ部内  
「ファイルフアキスノ」地ニ生ル、寛政十二年十二月十四日卒、彼千八百年也、  
同日、異人開祖ワシントン誕生日ニ付、空炮百計モ放候由、浦賀沖之舟ニテハ、九ツ時前十  
七ハナシ致シ候、右之趣、昨廿四日、彼ヨリ達シ有之候由、

〔代竹垣直道日記〕

○維新史料編纂會所藏本

正月廿五日、半晴、○中

一當月十四日浦賀之渡來以、候北亞墨利加船、今日ワシントン誕生日ニ付、壹艘々十六  
七發つ、大炮祝發以、候段届出候旨、浦賀奉行々申上有之、昨日海防懸々齋藤之達有  
之候處、今日九ツ時前、炮聲相聞候事、

〔松字日記〕

○水戸藩士西野宣明日記  
子爵齋藤敬三所藏本

正月廿五日、天晴、暖如如三月、品川御臺場見物ニ出、於品川聞大炮數聲、實如雷也、○中

新築礮臺時海邊、令嚴侯伯陣營堅、大炮何處數聲響、港口空留來往船、

右、登品川臺見海防、頓聞礮船大炮作之、

今日一覽之所、御家々御献上之大炮諸大名衆へ拜借濟、海岸へ御備被 仰付候由也、

〔亞米利加船渡來日誌〕

安政元年正月二十五日

三六一

砲聲ヲ聞ク

砲聲如雷



米人祝砲ノ  
コトヲ落書  
ス

正月廿二日、上總富津御備場會津侯御人數御出張相成居候所、此地方ニテハ外國船ノ舉動相分ラス候迎、當本牧邊へ見置トシテ押送り船ニテ其掛リ役人被參、先日來所々ノ岩へ異人樂書セシ横文字解譯被成候ニ、當廿五日ハ、亞美理駕國王誕生日ニ當リ、祝砲ヲ打候事ヲ記し置シト言、

砲聲二十里  
ニ響ク

廿五日、異人、本日國王誕生日ナルヲ以テ、祝砲トシテ大筒ヲ打放ス事夥多シ、砲聲二三十里ニ響互リ、戸障子ニ鳴渡リ、觸書ヲ心得サルモノハ、最早合戦ノ始マリシト疑ヒタルヨシ、

〔亞墨理駕船渡來日記〕

祝砲ニ關ス  
ル浦觸

正月廿三日、先達中所々海岸の岩ニ落書仕候其趣、御取調有之、御觸之趣、左之通、來ル廿五日、小芝沖滯留之異船ニ而、亞美理駕國王誕生日ニ付、右七艘之異船ニ而、祝として空砲十六七發宛放之候間、聊心配之義ニは無之候條、動搖致間敷もの也、

寅二月廿三日

相州浦賀々武州神奈川迄

美 作

名 主 年 寄

伊 豆

廿四日、事なし、

廿五日、天氣快晴、亞美理駕國王誕生日之由、異船海上ニ而大筒を放ス、其音夥多し、筒音

一發ニ而玉音四聲響有之、秘傳火藥の袋ニ仕掛け有之、傳受略之、

御觸之趣承知之者、差して驚義ニも無之候得共、二三十里も遠方の者は、最早合戦も始りし様ニ心得實ニ心配セリ、其音下總銚子迄も能聞たり、

〔ハリー日本遠征記〕○ホー  
クス編

祝砲ヲ合戦  
ト誤ルモノ  
アリ

*Francis L. Hawks: Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan, performed in the Years 1852, 1853, and 1854, under the Command of Commodore M. C. Perry, United States Navy, by Order of the Government of the United States. Washington: 1856. Vol. 1. pp. 332-333.*

The next day (February 20th) there was another visit, with the usual ceremonies, and a present of oysters for the Commodore.

In the course of a general conversation they were told that the following Wednesday

安政元年正月二十五日

三六三



would be the anniversary of Washington's birthday, and that a salute would, in consequence, be fired. They seemed perfectly acquainted with the name of the great father of our country, and expressed a desire to participate in celebrating the occasion, asking to be permitted to come off to see the guns fired. They were, of course, politely invited, and requested to bring their ladies with them; the latter part of the invitation they, however, jeered at as a very amusing but quite an impracticable joke.

〔日本及世界周航記〕オモキル  
カニヤ著

*Spalding, J. W.: Japan, and around the World: an account of three Visits to the Japanese Empire. London: 1856. pp. 216.*

On the 22nd of February the different ships fired a salute in honor of the day. The atmosphere was the purest, and it was a fit presence in which to honor the memory of George Washington—Fogee-Yama, with its mantle of snow, towered upon the sight, its ermine of the elements typifying the purity of his character; and its great height, the eminence which he attained in the eyes of the world.

二十六日丙寅 浦賀奉行支配組頭黒川嘉兵衛敬雅 米國艦隊參謀長「アダ

ムス」ヲ其乘艦「グンダ  
リア」ニ訪ヒ、浦賀應接ノ同意ヲ求ム。同與力香山榮左

衛門孝永 マタ至リテ之ヲ説クモ肯ゼズ。明日、更ニ交渉スルモ、決セズ。尋  
デ、「アダムス」、内海錨地小柴  
沖ニ歸航ス。

〔米使應接掛林輝等書翰〕○公符徳川開府所藏本  
豆州下田港船利加船所載

○正月二十五日勘定奉行石河政平・同松平近直宛

石河等書翰

香山榮左衛  
門登用ノ件

御内狀拜見仕候、然る浦賀表(所見ナシ)の異船引戻等應接之儀、組頭黒川嘉兵衛格別骨折申諭中之  
由、自然右(所見ナシ)の見込通貫候得と重疊(所見ナシ)候得共、萬一右(所見ナシ)の不行届候節と、香山榮左衛  
門儀、昨年結構被 仰付候事故、今般之應接爲取扱候ハ、格別差を添(所見ナシ)り可相勤儀(所見ナシ)付、  
見込之次第同人の申談、應接爲取扱、碎身之御奉公仕候様取計候方可然哉、右之趣(所見ナシ)伊勢  
守殿(所見ナシ)より御談も御座候間、宜取計可申旨、被御申越候旨、承知仕候、

一大嶋沖の異船數艘見掛候ものも有之候付、遠見之者差遣候旨、去ル廿日御届申上候  
處、右と不取留風説(所見ナシ)候哉、猶大嶋邊迄も見届之者差出候哉、事實相糺申上候様御沙汰  
之趣、承知仕候、何事得と相糺可申候得共、數艘一旦相見候儀と相違も無之趣(所見ナシ)相聞(所見ナシ)の、  
アメリカ船中(所見ナシ)なるも魯西亞・佛蘭西等可參風聞有之、且アメリカ類船も御座候趣ハ申立  
候事故、此度渡來之御取振(所見ナシ)なるを、早速乘込可申哉、何共異情難計、且大嶋邊迄之遠見船

大嶋沖出現  
ノ異船精査  
ノ件



安政元年正月二十六日

三六六

之差出兼、漁船等此節遠沖までを罷出兼、未定説相分兼候故、御屈指扣罷在候間、宜御申上可被下候、

一渡來之異人夏嶋の上陸いゝ、其外本牧邊迄も小船を以て乗廻し、又淺深測量いゝ候由、御地こる品々風聞も有之、事實左様之儀計こも有之間敷候得共、次第に捨置候ハ、彌増長可致哉こ付、穩こ制一方工風有之度段、御申越之趣致承知候、右御地こる異人之情態御實見無之候故、彼是御心配も御尤とて御座候得共、此度之異船を江戸御直訴之形勢、且夕に迫候事こる、御大切之御場合こ有之、小過を咎れ、大害を引出候儀を容易之儀、右等之場合得と御察可被下候、何と穩便之結局に相成候上と、追る御國法之申諭方も可有御座候、此段宜御含可然被 仰上可被下候、  
右之趣御答申上度、如斯御座候、以上、

正月廿五日

松崎 滿太郎 (編後、備者)  
鵜殿 民部少輔 (長鏡、目付)  
伊澤 美作守 (政義、浦賀奉行)  
戸田 伊豆守 (兵兵、浦賀奉行)  
井戸 對馬守 (傳助、町奉行)

林 大學頭 (編、備役)

石河土佐守様  
松平河内守様

〔浦賀沖米艦日米對話書〕

○外務省所藏本  
續通信全覽所載

甲寅正月廿六日、アーダムス乗船未浦賀港外に碇泊し付、

嘉兵衛

昨日も及示談候通、江戸近傍よる之應接ハ、所詮難相整、左候へハ、彌徒は時日を費させ候譯に相當り候し付、既に當所は應設所取設に相成、昨日、此場所も一覽被致候事故、使節浦賀へ相越、對話相成候方便利に可有之と存候間、其心得よて使節へ談合有之度候、

アーダムス

應接所之儀ハ、既に昨日も申述候通、江戸表よて之應接差支候ハ、品川々崎邊に應接所取設相成度、仮令當表へ使節相越候共、何分昨日一覽之場所よてハ手狭よて、使節上陸致し難く候、

嘉兵衛

安政元年正月二十六日

三六七

浦賀ニテ應接セン

品川川崎邊ヲ望ム

米人ノ横行ヲ制止スベキ件



對談致し候よし、何も格別手廣し無之候共、差支候儀ハ有之間敷候處、右様被申候之如何之譯し候哉、

アーダムス

兼る本國より貢獻物も持參致し居候間、應接之様子より、獻上も致し度、其爲も館浦昨日一覽之場所よりハ、貢獻物陳列出來兼候間差支申候、併猶又使節へも可申聞候へ共、何れも右様手狭しるハ、使節も承知可致様無之候、

嘉兵衛

左候へて、昨年之場所久里濱も致し候へて宜敷候哉、

アーダムス

久里濱も地勢不宜、何れ江戸へ參り可申心得し有之候へ共、金澤又ハ神奈川邊も宜敷場所も見受候、其邊ならむ宜候哉、

嘉兵衛

其儀し候ハ、先長官へ可申聞候、

此時アーダムスより、香山築左衛門へ之横文書翰一通差越せ、

○墨夷應接録、マタ本書ト略々同一内容ノ對話書ヲ載ス。

館浦へ狭少ニテ貢獻物陳列不可能

金澤神奈川邊ニ適地アリ

書翰ヲ出ス

米船七艘再來

香山ヲ應接ニ關係セシメズ

〔元浦賀奉行支配組與力香山築左衛門上申書〕

○東京帝國大學所藏本  
米澤渡來國書殘呈一件所載

○安政六年正月書上

○上(安政元年)正月十一日未上刻、異國船七艘城ヶ島沖に相見候段注進有之、夫々見届船差出之相成候之處、同日、入港不仕、異船不殘鎌倉地之方へ乗入候旨、見届船歸帆申立、同十二日も同様入港不仕、同日、伊澤美作守俄に江戸表出立、浦賀著に相成、翌十三日も入港不仕、御役所へ於てハ、伊豆守・美作守兩人御用談有之候處、私義昨年亞船取扱之儀に付、御疑念之筋も有之候間、此度之亞船御用と、一切爲取扱申間敷、亞人共の面會も不致方可然趣、御内命御座候由、伊豆守申聞候に付、篤と愚考仕候處、兼る之惡説と、畢竟偏執之成之處と而已存居候處、此度と亞人の面會仕候るも不宜杯と之御内沙汰有之候趣、成行候ハ實以歎息之限、乍恐御不明之御事と、彌退身之志相決、私義と、水主并人足共の被下と相成候兵糧焚出シ方世話仕居候處、翌十四日、亞墨利加船壹艘乗入に相成、直に小柴沖に碇泊仕候に付、與力近藤良次・佐々倉桐太郎爲應接罷越、浦賀沖に引戻一方之儀及掛合候處、應接行届不申趣を引取申候、

同十五日、長井村と申所より注進、今日異國船壹艘磯根に乘當候様子に相見候段申出候に付、不取敢近藤良次右取扱とて通詞召連出張仕、無事船卸し候趣、近藤良次歸浦